淨瑠璃通解

第六編

目次

増補生寫朝顔話……明石船別の段
増補生寫朝顔話……摩耶が嶽の段
増補生寫朝顔話……濱松小屋の段
増補生寫朝顔話……笑藥の段
増補生寫朝顔話……宿屋の段
戀娘昔八丈……城木屋の段
戀娘昔八丈……鈴が森の段
花雲佐倉曙……宗五郎住家の段
花雲佐倉曙……牢屋の段
花雲佐倉曙……增補宗五郎住家
岸姫松轡鏡……朝比奈上使の段

竹本攝津大掾 贊助
竹本弥太夫
山本九馬亭 著

淨瑠璃通解

第六編

東京 博文館藏版

淨瑠璃通解第六編

目次

增補生寫朝顔話……明石船別の段……一四
增補生寫朝顔話……摩耶が嶽の段……一八
增補生寫朝顔話……濱松小屋の段……三六
增補生寫朝顔話……笑藥の段……四七
增補生寫朝顔話……宿屋の段……五八
戀娘昔八丈……城木屋の段……七八
戀娘昔八丈……鈴が森の段……一〇二
花雲佐倉曙……宗五郎住家の段……一二五

花雲佐倉曙……牢屋の段……一四五
花雲佐倉曙……增補宗五郎住家……一五九
岸姫松轡鏡……朝比奈上使の段……一七七

目次終

淨瑠璃通解第六編

山本九馬亭 著
竹本攝津大掾 竹本彌太夫 贊助

增補生寫朝顔話

總解

此淨瑠璃は。山田案山子即ち近松德三の遺稿なり。德三朝顔の作をものせしも。故ありて未だ演ずるに至らず。文化七年に病沒せり。近松柳これを遺憾に思ひて。翌年讀本體に補綴し「德叟遺稿朝顔日記」と題して板行せり。其後更に演劇に改作したるが。嘉永三年翠松園主人。遺稿を删補潤色し「增補生寫朝顔話」と題して世に行ひしもの。即ちこれなり。其跋に曰く。

生寫朝顔日記といへる淨瑠璃。すぎし文化の年間。故人山田案山子。竹本重太夫が爲めに筆をとるといへども。いまだ局を結ばずして。終に鬼籍に入りたり。爰に故人重太夫子。鶴澤才二同儀左衛門等。此謳曲の全からざるを深く惜み。團圓をなして。專ら世に廣くせん事をはかり。予に校補を需むる事せちなれば。いなみがたく。舊章の足らざるを刪補潤色し。兩子これに節奏を加へ。且外題の文字は。六つの員となる事。梨園中の人の嫌忌なりといへば。改めて增補の二字を冠らしめ。生寫朝顔話と題するのあらましを。簡端の餘紙に錄する事しかり。

洛土　翠松園主人

此作は近松德三。熊澤蕃山が「露のひぬ間」なる朝顔の今樣歌に。案じつきて作れるものにて。其歌主蕃山が有名なるより。其名をひがめ借りたるなるべし。世に蕃山の事を作れるやういひはやせれ

ど。蕃山は陽明派の學者にして。德行一世に高き。近江聖人中江藤樹の門人なり。品行頗る嚴正の人なれば。假令裏面の行爲にもせよ。かゝる事のありしとは。得て信ずべくもあらず。只事の發端を京都に歸せしは。蕃山が同地に居たりし事あるより。思ひよれるものか。朝顔の事川止の趣向などにつき。零碎なる種々の說は耳にすれど。未だ作の據所と思はるゝ程の。信憑すべき話を聞き及ばず。思ふに大方は作事にして。或は他人の事柄を取合せて。書ける所もあるなるべし。坊間の朝顔日記及講釋などは。此淨瑠璃を本として。敷衍したるに過ぎず。

蕃山の傳は。岡山藩史中の蕃山考。最も詳しき由聞及べど。未だ見及ばず。左に先哲叢談を。假名交り文に直して揭ぐ。以て其人となりを知るべし。

熊澤伯繼。字は了介。(介或は海に作る)小字は次郎八。後助右衛門と更

む。蕃山と號し。又息遊軒と號す。平安の人。備前侯に仕ふ。

蕃山。本姓は野尻。出でゝ外祖熊澤氏の後となり。因つて其姓を承く。天性深知儁才。古今に卓越す。年甫めて十六。岡山烈公に仕ふ。弱冠の比。公驟りに奬眷を加へ。將に大に用ひんとす。而して辭するに。未だ學ばざるを以てし。乃ち乞ふて游學す。七年公召して之を還す。信任愈厚く。何もなく要路に當る。於是。德を布き惠を流し。貧を賑はし困を救ふ。勾査を罷め賭博を禁じ。淫祠を毀ち節義を表す。其聖教を明にし。以て異端を闢き。武備を嚴にし。以て不虞を戒む。諸の新政。海內耳目を驚す。太宰春臺湯淺常山に復する書に曰く。夫烈公は不世出の英主。熊澤子を得。而して任ずるに國政を以てす。明良の遇。實に千載の一時也と。日本詩史に載す。熊澤了介。政を其國に爲す。世を擧つて知る所。余嘗て松原一淸が出思稿を閲るに。其牛牕泊舟の詩に「漁家兒女亦知字。笑將孝經教老翁」の句あり。

一時教化想ふ可し。今に至つて泮宮の設。尙典刑ありといふ。

蕃山。初め笈を負ふて京に上り。良師を求む。未だ其人を得ず。共に宿に投ずる者。一人語て曰く。往日余主の爲めに遠く行く。時に金二百兩を懷にす。即ち主の齎らしむる所なり。途驛馬に跨り。金を出して鞍に繫ぐ。日暮之を收むる事を忘れて宿し。困頓枕に就く。半夜始めて覺め。乃ち金を遺れたるを覺ゆ。則ち茫然。猶疑ふて夢寐となす。既にして神乃ち定り。痛心疾首。千思萬慮。之を求むるに術なし。一つに死を雉經に決し。戚然自ら嘆ず。天の爲に弔恤せられずして。此悲涼に逢ふことを。時に剝啄の聲甚だ急なるを聞き。之を問へば則ち馬夫某と稱す。因つて亟に出づ。渠乃ち金を出して曰く。小子家に歸つて。將に馬を洗はんとす。鞍を解くに及んで之を得たり。是君の遺るゝ所。故に來つて還呈す。封完して故の如し。吾驚喜措く所を知らず。腰纏別に十六兩あり。即ち解て以て之を

謝す。馬夫受けずして曰く。君の物を君に付す。奚の謝かこれあらん。然れども爲めに夜を冒して來る。此顧賃二百錢を得ば足れり。吾曰く。蘖自ら作す。汝に發義の心微りせば。吾生を得るの地なし。所謂死を生して骨に肉するなり。不腆の黃物。敢て報といふには非らず。聊以て寸志を表す。馬夫愈辭す。乃ち八兩に減ず。亦受けず。稍々減じて方金二に至る。馬夫執ること益確し。曰く君我を溷すこと母れ。予守る所ある也。吾歎じて曰く。欲に淡なる者。今の世多く見ず。其義を以て利と爲す。汝の如き者に至ては。則ち絕て得べからず。所謂守る所のもの何事ぞや。曰く賤役口を餬す。豈利を思はざらんや。而して中江與右衞門といふ者あり。里中に教授す。嘗て其言を聞に曰く。誠正以て其身を修め。君に事ふるに忠を致し。親に事ふるに孝を盡し。貧を以て濫ること母れ。賤を以て枉ること母れ。今若賜ふ所を以て之を利せば。則ち此心を欺く也。言畢つ

て去る。噫澆世安ぞ此人あるを得んやと。蕃山傾聞良久して曰く。馬夫は一鄉の鄙人のみ。素と道の何物たるを識らず。則ち利に趨ること鶩の如く。何の義かこれ思はん。而して其廉潔古の君子に愧ざるは。必ず教育の致す所なり。所謂中江氏は。其德と學と想ひ見る可き也。今の世に方つて此人を捨てゝ。而して誰にか適從せん。是日即ち束裝し。往て謁し。業を門に受けん事を請ふ。藤樹辭するに。人の師たるに足らざるを以てす。蕃山益請て置かず。二夜其廡下に寢ぬ。藤樹の母之を見て。藤樹に謂て曰く。人遠方より來り。懇請此の如し。これに其習ふ所を傳ふるも。誰か好んで人の師となると謂はんや。こゝに於て始めて接容す。時に寛永辛巳。蕃山年二十三。

蕃山壁間毎に。義經の畫像を懸く。未だ嘗て他の書畫を懸けず。嘗て某侯(紀州侯)に至り。入るに及び。一士人の威儀特秀。骨體非常な

るを見る。相與に目を張り。注視すること良久ふし。遂に一言を交へず。侯に見えて曰く。余今一士を見る。知らず仕臣乎將た處士乎。侯曰く。渠は吾爲めに兵書を講ず。處士由井民部助(名正雪)といふ者なり。蕃山色を正して曰く。余其貌を熟視し。以て其意を察するに。君復た彼の如き士を近くる事勿れ。他日正雪亦來つて。侯に見えて曰く。前日退朝の比。某衣某形の人を見る。未だ知らず。それ誰とか爲す。侯曰く。渠は吾に說くに經書を以てす。岡山の臣熊澤次郎八といふ者なり。正雪色を正ふして曰く。余其貌を熟視し。以て其意を察るに。君復た彼の如き士を近くること勿れ。

嘗て君の述職に扈し。江戸に來る。時に諸侯爭つて之を延く。西に歸るに及び。往て板倉侯に別る。侯曰く。子明君に仕へ。言聽かれ計從はる。吾徐に之を籌るに。子其終を善くせんと欲せば。則ち早く仕を致し。田里に屏處し。今より後復東來すること勿れ。復世事をい

ふこと勿れ。これ功成り身退くの義なりと。蕃山拜謝して去る。然れども眷遇の渥なる。俄に骸骨を乞ふを得ず。且命を奉じて又復江戸に來る。是時既に事を共にするものと隙あり。蕃山自ら安ぜず。乃ち岡山を辭して京に到る。而して貴紳之を候し。門常に市を爲す。是に於て去つて明石に棲遲す。明石侯本蕃山を師とし尊び。禮遇甚だ厚し。後侯封を古河に移さる。蕃山從つて之に移る。未だ幾くならず。遂に言を以て罪を大府に獲。乃ち古河に幽せらる。

年少き時體貌充肥。自らおもへらく。武夫の職一旦緩急あらば。甲を被り兵を持し。馳驅奔走爲さゞる所なし。而して豐肥斯の如し。甚だ之を艱とす。稟受に由るといへども。亦或は安佚の致す所と。これより苦を攻め淡を食ふ。日夜武事これ講ず。或は曠野に出でゝ鳥銃を放ち。或は山村に行つて民家に投ず。其宿直に當るや。木兵を裯笥に藏し。僚友寢に就いて後。獨り竊に空庭に出で。槍劒の法

を演ず。或は深夜屋に上り。火を禦ぐを習ふ。是の如きもの十餘年。身軀稍瘦削す。

蕃山。釋元政と友とし善し。梵語の通じ難きもの。必ず元政に就て之を解す。是を以て元政の坐。縱に佛教を破らず。但常に歎じて曰く。今世の僧多く行無し。設し釋迦をして見せしめば。則ちそれ之を何とか謂はん。吾儒の道亦然り。孔子をして今の所謂儒者を見せしめば。豈慨歎せざる有らんや。

蕃山樂を好む。時々小倉少將と。伶人三四人を拉して。元政の稱心菴に至る。蕃山は琵琶を皷し。少將は琴を彈じ。元政は倭歌を咏じ。各々以て興を遣る。奥田嘉甫が三角集。渾不似に記していふ「丁卯春遊伊留好問君第殆一月矣。其老川口丈好古之士也。出一琵琶告曰。此了海熊澤子物也。名曰濱庇。余接而見之。則漆光退蝕。古雅可愛。蓋宋元間物矣。叩其所以則曰。主母妙閣孺人出納氏賜焉。孺人大藏大

輔職直女。熊澤氏出也。琵琶乃傳自其妣云。吁先生昔在備前州。唱新建學。有經濟志。凜々高風可欽也。則手澤所存。誰不敬慕。況主母賜乎。

按蔣揆長安客話載。渾不似如琵琶。小槽圓腹如半瓶榼。相傳昭君琵琶制。使胡人重造。而其形小。昭君笑曰。渾不似。遂以名。元史以爲火不思。今以爲胡揆思。皆相傳之訛。因憶。先生洽聞。其命名必非取之和歌而已。濱庇古訓二義。一曰沙嘴崩壞。或曰舟篷簷。拾遺作濱庇。予謂。此得非兼取於沙嘴崩壞。渾不似昔之義乎。其與茗壺名飛鳥川同意矣。九京如可起。則先生當微笑稱善哉。

蕃山之學は藤樹より出づ。然れども執見同じからず。其集義和書に。藤樹を議するもの少からず。西川某集義和書顯非二卷を著し。其藤樹を毀るを辨ず。

物徂徠。藪震菴に與ふる書にいふ。問を承く熊澤集書。不佞未だ其書を見ず。曾て其人太だ聰明。蓋百年來儒者の巨擘なり。人才は則ち

熊澤。學問は則ち仁齋。餘子は碌々。數ふるに足らざるなりと。湯淺常山。亟々蕃山を稱して曰く。其經濟老子より出づ。地を鑿ち銅錢を取るを以て。是ならずとなす。蓋し漢の貢禹に本く。大抵熊澤氏の說。迂濶に似たり。然りといへども。年後驗多きを以て之を視れば。實に世儒及ぶ所に非ざるなり。其幽囚數十年。面に憂色なく。人當世の事を問ふあれば。默然答へず。即ち笙を索めて而して之を吹く。

蕃山の履歷は。門人巨勢直幹實錄を記す。外裔草加定環行狀を述ぶ。岡山の菱川大觀傳を作る。而して皆言ふ名伯繼と。字を載せず。所謂了介其字か。又皆言ふ。食地和氣郡寺口邑を改めて。蕃山と名づく。蓋し義を倭歌の端山蕃山の什に取るなり。其仕を致し京に寓せし時。蕃山を以て姓となす。乃ち男右七姓蕃山を承くと。此言によれば。蕃山必しも其別號にあらず。人之を號稱するなり。或は曰

く。其古河に處る筑波山に近し。故に蕃山と號すと。

又一說に曰く。新古今集に載する。源重之が倭歌に曰く「筑波山は山しげ山しげゝれどおもひいるにはさはらざりけり」王陽明が立志の說。此歌意に符す。しげ山は蕃山なり。故に以て號となす。

蕃山疾を以て古河に沒す。元祿辛未八月十七日也。其生れし元和己未を距る。春秋七十三。古河大堤邑鮭延寺に葬る。人の其墓に展する者。今尙絕えずといふ。

明石船別れの段

和田海の。浪の面てる月影も。明石の浦の泊り船。風待つ種のつれ〳〵を。慰め得て阿曾次郎。艫先に立出で月かげに。四方を見はらす氣晴しの。田葉粉の煙吹なびく。船路の旅ぞ物淋し。そばにかゝりし大船は。秋月弓之助が歸國の乘船。乘人も水主も船草臥。前後もしらぬ高鼾。娘深雪は只一人。目さへも合はぬ戀人を。思ひこがれてうつ〳〵と。戀に心を筑紫琴せめて慰むよすがもと。かきならしたる糸しらべ。露のひぬまの朝顏に。照す日影のつれなさに。テ合點の行かぬアノ諷。過つる宇治の螢狩に。秋月の娘深雪が扇に。某がゝいてあたへし朝顏の唱歌。聲さへ深雪に生寫し。ハテいぶかしさよと見上れば。あなたも見下すかき立の。顏はまさしく「深雪殿ではないか。ヤア阿曾次

增補生寫朝顏話　明石船別れの段

「和田海」　わたつみと假名をふりたれど、わたつみと讀むが正し、海の意なれど、もと海神の稱なり、

「月影も明石の浦」　とかけたり、明石の浦は播州明石郡明石町海濱の總稱にして、明石の濱又明石潟ともいひ、古來有名の勝地にして、月の名所なり、順德院「明石潟あまの苫屋の煙にもしばしばくもる秋の夜の月」

「水主」　船頭のこと、船頭をかこといふは、日本紀應神の卷に「鹿子水門」とあるがもとなりと、

「目さへも合はぬ戀人」　とかけたり、

「戀に心を筑紫（盡し）琴」琴を筑紫琴と呼ぶは、宇多天皇の御宇、筑紫の石川色子の傳へし故なりと、前にいへり、

「露のひぬ間云々」　熊澤蕃山の作にして、今も琴唄にうたへり、

「宇治の螢狩」　山城宇治は螢の名所、

「何國」　は何處の當字、淨曲には皆かく書けり、

「抱き月の夜」　とかけ「影も隔てぬ比翼鳥」とつゞけたり、比翼鳥は雌雄各一翼を有し、相比して飛び、須臾も離るゝ事なしといふ、委しくは前にいへり

郎樣。逢たかつたと。我を忘れて乘うづるを。抱きとりて口に手をあて。「テ聲が高い深雪殿。思もよらぬ今の對面。何故に此所に。さればいな　宇治でお別れ申してより。モ片時忘れず泣暮す內，國元に騷動起り。父母共に俄の旅立。所詮逢ふ事叶はぬかと。なんぼうかなしふ思ふたに。こゝで逢ふたは盡せぬ緣。どふぞ此身を何國へも。連れて退いてたまはれと。ひつたり抱き月の夜の。影もへだてぬ比翼鳥。放れがたなき風情なり。阿曾次郎も心を察し。おゝ嬉しいそなたの志。忘れはおかぬ去ながら。そなたを今連退いては。某が武士道立たず。殊に此度伯父の賴みにて。遁れぬ主用猶以て。女を同道しがたき入譯。有る緣ならば添ふ時節も有らふ。かうして居ては人の咎め。サアちやつと元の船へ乘つてたも。ヱヽそりや聞えませぬ阿曾次郎樣。添はれる時節も有らふとは。當座遁れの捨詞。お氣に入ら

「添はれぬ時の云々」　此塲合婦人紋切形の語、

「盡未來」　いつまでもの意、佛典の語、

「武士の詞に二言はない」　これ武士の武士たる所以、

ずば打明けて。つゝまずそれといふてたべ。もしもおまへに添ふ事の。ならぬ時には淵川へ。此身をなげ死まする。ふたゝび外の夫迎へ。せぬを誓ひし身のけつばく。さらばと斗り水底へ。すでに飛んと立上るを。あはて驚き抱きとめ。「コレ待つた早まるまい。イヱ〳〵放して殺して下さんせ。アヽぜひもなし。それ程迄思ひつめた娘心。見殺にしてどふせられふ。不義徒と世の人口。そしらばそしれつれて退く。コレ盡未來迄女房ぞや。ヱヽ嬉しうござんす忝ない。そんなら願ひを叶へて下さんすか。ヲヽ武士の詞に二言はない。去ながら此儘につれて退かば親達の。もしや海川へも身を投たかと。お歎きあらんは定の物。委しい樣子をつい一筆。ヲヽよふいふて下さんした。私もさう思ふて居ますが。どうぞ料紙をかして下さんせ。ヲヽ心得しと懷紙。腰をさぐつて南無三寶。「そなたを抱留める拍子。海へ何や

「矢立」　もと矢立の硯といひて、箙の中に入れて、軍陣に用ふるものなるが、後には旅行などに携ふる、文具の稱となれり、詳しくは前に解す、

「船へ投込む扇の別れ」　趣向面白し、秋扇の歎なくんばあらず、

「跡白浪を隔ての船」　とかけいひて「つながぬ縁ぞ」とつゞけたり、

ら落せし水音。旅矢立をはめてのけた。マヽどふしたらよからふぞ。ヲヽそれなら待つて下さんせ。二親始め付々迄。旅草臥の寢入ばな。そつと元船へいんで。一筆書置してきませう。ヲヽそれがよかろふ。ガコレかならず物音させて。親達の目が覺ぬよふ。心得ましたと立上がれば。阿曾次郎は肩車。あなたの船へ乘移す。音に目覺す船頭共。「ヲヽ地風が吹出した。錠を上げよ。帆を卷けと。騷ぎ出せば。なう悲しやとあせる内。船は次第に遠ざかる。コハ何とせんかとせんと。あせるはづみに阿曾次郎が。船へ投込む扇の別れ。跡白浪をへだての船。つながぬ縁ぞ「是非もなさ。

摩耶が嶽の段

「冬されば人目も草も云々」

古今集「山里は冬ぞさびしさまさりけり人目も草もかれぬとおもへば」新古今集「冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯にさびしき」此二首より書けるなるべし、冬されば冬になれば

「みかき守衛士には云々」

詞花集「御垣守衛士のたく火の夜はもゐ晝は消ゐつゝ物をこそ思へ」より書き、前後にかゝれり、戀歌にて其意は、禁裏を守る衛士の焚く火の如く、夜はもゐたち晝は消ゐ入りて焦れ思ふといふこと、これをうらうへに晝も消ゐざるといへり、衛士は、昔諸國の軍團の中より京に召され、年毎に交

摩耶が嶽の段

冬されば。人目も草も枯果て。のこるも淋しき軒の松。枝吹ならす雪嵐。いとゞ寒氣ぞまさりける。納戸を出づる浮洲の仁三。さむさしのぎと圍爐裏のそば。榾打くべて御かき守。衛士にはあらぬ焚火より。戀ゆゑもゆる胸の火の。晝も消えざる物思ひ。娘千里は母親に。心奥よりしのび出で。「ヲヽ仁三郎。いつもどりやつた。夕べはきつい大雪で。うちに居てさへ寢ぐるしさ。モウわしやそなたのことを。案じてばかり居たわいなと。ことばをしほにより添へば。色をふくみし雪の梅。山の奥さへ浮世なれ。「ヲヽ干さとさま。それはよふ案じて下さりました。がこゝへきてまだ新まいのこの私を。しなつこらしいふて下さりますので。かげながら悅んで居ますわいな。しかし夜かせぐ爰

番して、朝廷をまもる（即ち御逗守）者、夜はかゞり火をたけり、これにて明なり、

「心奥（置）より忍び出」　とかけたり、

「色を含みし雪の梅」　よく書きたり「山の奥さへ浮世なれ」深山櫻も時來れば、花咲く戀の世の中かな、

「新まい」　新參者をいふ語、古米に對せしなるべし

「しなつこらしく」　やさしく、親切に、

「よい鳥」　こは、待ぶせて居るを網をはるにたとへていへる語なるべし、

「寢鳥を取るはきつい罪」　身の不自由につけ入りて、ものをうたむるを、罪の最も深きものとす、佛者の敎へなり、

「入譯を白（知）齒娘」　と

の商買。雨の降るばんや。雪の夜でなければ。コレよい鳥はかゝりませぬ。ムヽアノ夜さりでも鳥をとるのかや。エヽお前もマア素人の娘か何ぞのやうに。コレ鳥といふはナ人。アヽイヤやつぱり鳥じや。ハヽヽヽヽ何が其鳥めが。雨や雪が降ると聲山立て人を呼んでも。イヤサ人を見ても。よふ働かぬので。モ取よいといふ事と。聞いて千里は打しほれ。いかに世渡るたつき迚。寢鳥を取るはきつい罪。もふ是からはそんなこと。止めてほしいと入譯を。白齒娘の氣も弱く。耳を押へて差うつむく。

「ハヽヽヽヽ氣の弱は。何ぼ其樣にいやがらしやつても。寢鳥は愚猪狼より。恐しい事をする。コレ智樣をとらねばならぬぞへ。マちつと嗜んだがよござりますと。いふ顏じつと打詠め。

「エヽいやらしいそんな事聞とふない。私が好の殿御といふは。ナコレ仁三郎。日外やかゝ樣が。連れて戻らしやんした女中樣。

かけたり、「殿御」は婦人よりいふ夫の尊稱、殿は貴人の居所の稱、直に其名を呼ぶを憚りていふなり、「思ひます鏡」とかけたり、ます鏡は眞澄鏡の略十寸鏡と書くは假字にて、其大さにあらず、前にいへり、「可愛いと思はれたさの化粧水」史記豫讓傳に「士爲二知レ己者一死。女爲二説レ己者一容」近松の句に「誰が爲めとてべにかれつけうぞ」「詞さへ灘(無)の鹽燒」とかけ「下燃にこがれ」とつゞけたり、いはで心に思ひこがれ居るをいふ、鹽を燒くに藻鹽木をたくより書けり「海士(有をかく)衣」前の緣をうけて書き「涙に袖の濡文も」とつゞけたり、

アノ子を賴んで文の數。返事のないはそりや聞えぬ。モ今更いふも耻しけれど。人里遠き此内へ。初めておじやつた其時から。いとしらしうてきつとして。明暮思ひますかゞみ。紅白粉もどふぞして。そなたの心に可愛いと。思はれたさの化粧水。何といひ寄る詞さへ。灘の鹽燒下燃に。こがれ暮らして海士衣。涙に筆の濡ぶみも。戀のいろはの手習に。袖につくてふ住吉の。神の御影を合はす手も。嬉しい逢ふ瀨を求塚。生田のもりの幾度か。運ぶ心をちよつとでも。汲んでくれたがよいわいなと。男の膝に取付いて。あからむ顏は夕日照る。摩耶紅梅の色ざかり。花も耻らふ風情なり。「イヤモ此樣な見るかげもない者を。それほどまでに。思ふて下さりますは嬉しいけれど。お前は主なりわしは家來。いかに商賣がらじや迚。主の娘を盜み。其主の娘御と忍び逢ふは。わしや親方へあんまりと。有樣は遠慮し

て居ましたが。眞實思ふて下さるなら。いかにもどふなとしませふ。ガコレお前にちつと無心がある。といふは外の事でもない。アノかみ樣が大事にしていやしやる。女の病を治す守。そつと見せて下さりませぬか。ヲヽそれは安い事なれど。アノお守は二重箱に入れて錠をおろし。鍵はかゝ樣が持つて居やしやんすれば。首尾を見合せ見せふ程に。コレちよつと奥の間へ。ハテそふじやと云て書中に。エヽマアコレ。ちよつとおじやいのと。無理に手をとる笹栗の。我から落ちて草の露。濡に行く身ぞわりなけれ。折から坂道いつきせき。駕を舁せて輪拔吉兵衛。遠慮會釋も荒くれもの。雪踏ちらし門口より。「婆樣内にか。ちよつと逢ふと。わめけば納戸を立出づる。老女は邊見廻して。それと見るより落付顔。「ヲヽ誰かと思へば輪拔殿。大きな聲で何事ぞ。イヤ何事でもない。此中百兩に直を極めて。預つてい

海士衣は濡れたる者、殷富門院大輔「みせばやな小島の海士の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず」濡ぶみは艶書をいふ、「濡ぶみ」をうけて「戀のいろはの手習ひ」といへり、初戀のふみをいふ、「袖につくてふ住吉の」いろはの手習の句をうけ、住に墨をよせて書けるなるべし、古歌にてもあるか、思ひあたらず、「嬉しい逢ふ瀬を求塚」とかけたり、求塚は攝州莵原郡にありて、其數三つあり、一は御影村、一は住吉村、一は都賀濱村、其故事は別記を見よ、「生田の森の幾度か」調あり、生田の森は三の宮停車場の北四五町、生田神社の後にあり、生田の戰に梶

原景季が、折りて箙にさせりといふ箙の梅、今なほ殘れり、此事は後にいふべし「あからむ顔は夕日照る云々」　よくいひたり、摩耶紅梅といふものありや知らず、恐くば摩耶が嶽ゆゑかくかけるなるべし。「あけくれ思ひます鏡」よりこゝまでは段中の名文なり、かけ詞と縁の語とに、注意して味ふべし、

「主の娘を盗む」　商賈が泥坊、

「女の病を治す守」　此守は、天竺の薬婆が持ちしといふ薬王樹なり、薬王樹の注を見よ、

「笹栗の我から落ちて云々」　よくいひたり、味ひふかし、さゝ栗は小栗にて、笹と書くは假字なり、栗は尻割れて我れから落つるもの

んだ代呂物。なだめても透しても。只めろ〳〵とほえる斗り。勤奉公はいやじやとどふばり。間がな透がな逃支度。イヤモ顔に似合ぬしぶとい女郎。入込の内に取逃しては。こつちの大損。事のない内代呂物戻すと。小腕取つて引出すは。世に秋月が娘の深雪。泣はらしたる目の内に。溜る涙の玉の緒の。絶えず重ぬる憂思ひ。其儘庭に泣居たり。「エヽ又しても〳〵。云事聞かぬばいた女郎。コレ吉兵衛殿。折檻して又相談せう。替りには不足なれど。夕べ手まへた小女らめ。行口が有なら頼みますと。庭の小屋より以前の小娘。縄付の儘荒氣なく。引立て出て見せければ。輪抜じろ〳〵打ながめ。「ムヽ年は往ねどまんざらでもない代呂物。相談は後にして。マア預つて逝ましよと。駕へほり込み先に立ち。泣入る深雪を白眼付け。むだ骨折したどう女郎と。つぶやき〳〵立歸る。後に老女が尖り聲「エヽ何所へや

水の出端の色盛り、我れから落ちてぬるゝ、かくの如き娘も、世に多からむ、

「めろ〳〵とほゐる」　めそ〳〵と泣く、

「しぶとい」　のしは強むる爲めの添字、

「世に秋（飽）月が娘の深（身）雪」とかけたり、

「涙の玉の緒」　とかけ「絶ねず重なる」とつゞけたり玉の緒は命、

「ばいた女郎」　ばいたは賤妓の稱、女を罵る語に用ふ、

「手まへた」　とらへた、手に入れた、

「どう女郎」　は胴張女郎の略、

「大枚」　は多額の金にいふ語、もと餅銀より出たりと、前にいへり、

「艾いらずの一つ灸」　こ

つてもほり戻される。しぶとい子やの。小瀬川で身を投ふとして。死ぬる命を助けた上。大まい拾兩といふ金迄入れ。けふ迄養ふた義理を忘れ。奉公いやがる恩しらずめ。賤しう育たぬやつと思ひ。手ぬるふすれば付上る。アノ爰な。糟賣女め。アヽコリヤもふそろ〳〵と。痛い療治をせにやならぬわいのと。燒返つたる圍爐裏の鐵橋。片手に握つて目先へ突付け。サア艾いらずの一つ灸。其美しい顏へすよふか。サアそれは。頰がまちを突拔ふか。アヽコレ申し。どふぞ御堪忍。サア夫程に悲しくば。丸山へ賣られて行けと。云れて深雪は涙聲。ノヲ丸山とやらは聞及ぶ。唐土船の港とやら。情なや唐國の。人に肌身を汚さるゝ。君傾城の憂勤。是斗りは御了簡。「ムヽそんなら日向へ奉公に。アヽコレ申し日向とは。夫よりも遙に遠き。日の本の果と聞けば猶悲しい。どうぞ都へ只の奉公。水仕の勤めもいと

れ痛い療治、「唐國の人に肌身を云々」露をだにいとふやまとの女耶花ふるアメリカに袖はぬらさじと詠みし女耶あり、「君傾城」　前に解す、

「捺落に沈む」　地獄に沈む、捺落は地獄の梵語、前に解せり、「涙は胸に陸(滿)奥」　とかけ「安達が原の黒塚云々」とつゞけたり、平兼盛「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか」なほ、安達が原一つ家の段を見よ

ひはしませぬ。お情お慈悲と斗りにて。只手を合はせ泣居たる。「ホ、、、、ヱ、味い事いふわろじやわいのふ。水仕にやつては金にならぬわいの。コレよい子ぢや程に。思返しゞやと思ふて。ナコレ此婆々に設けさして下さいの。サアそれは。但し此鐵橋が喰たいか。アヽコレ申し。いやか〳〵。なんのいやと申しませふ〳〵〳〵。サア賣られて行くか。サアそれは。サア〳〵〳〵。いやなら殺すがどうじやゝい。サアどうじや。返答せい女らめと。訇る聲は嚙付く如く。肝にこたへて此世から。捺落に沈む憂思ひ。悲しさ剛さ恐ろしさ。涙は胸に陸奥の。安達が原の黒づかに。籠れる鬼の呵責にも。増さる責苦に堪兼て。逃行く衿髪引戻し。邪見の老の皺腕に。引ずり廻し責めせつてふ。見兼て千里は走り出で。「ヱヽコレかゝ樣。餘りぢや〳〵〳〵。餘りじやわいの。いとしほなげに此女中を。

「賣せつてふ」　むごく賣めさいなむをいふ、
「いとしほなげに」　かあいさうに、

「詮方もあきれはてたる」とかけだり、

「まぶな仕事」　意外の儲け仕事をいふ

情らしう助けたの。イヤ命の親のといはしやんしても。君傾城に賣ふとは。よふ胴慾にいはれた事。賣らいでならぬ事ならば。かはりに私を賣つてたべと。縋り留めるをふり放し。「コレ娘。エヽそなたの知つた事じやない。そつちへ退いていや〳〵。アヽイヤ〳〵。何ぼうでも此子は賣さぬ。私を〳〵と爭ふを。エヽ面倒なと突退けて。かよはき深雪をちよう〳〵〳〵。燒鐵橋の續け打ち。衣類も骨身もこげくだけ。アツト一聲反返り。其儘庭に倒れ伏す。ノウいとしやと泣入る千里。老女も今更詮方も。軻れ果たる折こそ有れ。麓の方より手下の眼太。息を切つて欠來り。コレ〳〵お頭。「大名の金飛脚。此麓で追取り卷き。まぶな仕事と仲間の者。汗水かけども手强い奴。どうやらこつちが覺束ない。早ふ加勢といひ捨て。飛が如くに引返す。聞より老女はびつくり仰天。浮洲は居ぬかといふ内も。老のいら立ち

「力足鼈（踏）をさして」とかけたり。

「息のかゝつた」目にとまつた、手に入つたといふに同じ

「藝州岸戸」も面白し、

傍へなる。心に覺の一腰かい込み。裾はせ打つてかけ出づるを。ノウ悲しやと留むる娘。引退け〳〵力足。麓をさして走り行く。後に娘はうろ〳〵と。あなたこなたを氣遣ふ内。一間を出づる浮洲の仁三。千里は見るより。「ヲヽよい所へ仁三郎樣。何やら事が起つたと。かゝ樣は今麓へ。ガマア差當つて此女中を。どふぞ助ける仕樣はないかいな。サア氣の毒は氣の毒じやが。頭が息のかゝつた此子。いふて外に何にも。ヲヽソレ〳〵。幸ひ頭の留守の間に。今の守を。サア〳〵早ふ。アイと返事も女房顔。千里は納戸へ欠けり行く。浮洲は深雪を抱かゝへ。胸撫でおろせば手に障る。守袋の中改め。「ムヽ藝州岸戸の家中。秋月弓之助が娘深雪。ムヽと心に一思案。手早に納むる程もなく。娘は守の箱携へ。いそ〳〵として立出づる「サア〳〵どうやら斯やら取て來た。かゝ樣の戻りやしやんせぬ其中に。早ふ〳〵

と手に渡せば。箱追取つてうや〳〵しく。深雪が額に押當れば。守の奇特忽に息吹返し邊を詠め。「ヤア〳〵お前は娘御。ヲヽ氣が付たかへ。アイ。アヽ嬉しや〳〵。これ幸ひかゝさまは留守なれば。此間に早ふ行しやんせと。聞いて深雪は飛立つ斗り。嬉し涙にくれ居たる。「コレ〳〵女中。此坂を左へ取れば。御影へ出づる近道。頭の戻らぬ其内に。サアちやつ〳〵とに手を合はせ。アヽ忝ふござんする。死でも御恩は忘れじと。膝もわな〳〵立兼ぬる。見兼ねて千里はかい〴〵しく。いたはる情を力草。漸々遁れ落ちて行く。浮洲は守に目も放さず。何思けん有合ふ鉋橋取より早く守の箱。はつしと碎けば驚く千里。見向もやらず錦の袋。中より出づる狀取上げ。「ムヽ扨こそ〳〵。山岡玄番の内通の密書。又此守こそ。大内家の重寶藥王樹。扨は主の老女といふは。大友の殘黨。謀反人の同類よなと。聞いて千里は何とい

「御影」は攝州莵原郡にあり、

「山岡玄番云々」老婆と内通して、藥王樹を盜ましめし、大内家の奸臣なり、次解を見よ、

「藥王樹云々」此老婆、

朝廷の御使玉橋の局と稱して、大内家の重寶、天竺薯蕷が所持の藥王樹を、奪ひ取りし事、前に見にたり、

「おこと」　そなた、

「正體涙」　かけ詞の紋切形、

「便なき」　せんなき、

はしやんす。「アノかゝ樣を謀反人とはへ。ホヽ先年玉橋の局と僞り。大内家へ入込み藥王樹を。かたり取りしは此家の老女。緣につれたるおことなれば。妹脊の緣も是限りと。詞尖にいひ放し。一間の内へ欠入つたり。娘は悲しさハアはつと。其まゝそこに泣倒れ。正體涙の折からに。斯とはしらず主の老女。心も足もいきせきと。我家の内へ欠戻り。破れたる箱を見て惚り。ヤアコリヤ〳〵娘。大切なる守の箱。何者が此仕業。サア〳〵子細があらふ。コリヤどうじや〳〵と問詰められ。隱し持つたる懷劍を咽にがはと突立てたり。老女は惚り其手に縋り。コリヤ娘何故の此最期と。抱きかゝへて介抱に。娘は苦しき息を繼ぎ。ノウかゝ樣。堪忍して下さんせ。語るも便なき事ながら。戀の媒賴んだる。義理を思ふて最前の。「女中を助けんと。仁三郎樣の差圖にまかせ。大事の守を取出し。戴かせば忽に。息吹

返す即座の奇特。幸ひ此場を落せしが。思ひも寄らず仁三郎樣。守の箱を打碎き。中に添へたる狀を見て。情なやお前をば。謀反人の同類とて。折角結んだ妹脊の緣。切放されし其悲しさ。迚も添れぬ惡緣と。思ひ切つても切られぬ困果。斯成事も大切な。寶を失ふ斗りかは。大事を人にしらせたる。云譯なさの此最期と。語るを聞いて老女荒妙。眼いからし聲ふるはし。「ムヽ扨は浮洲の仁三といひしは。古主の仇たる大内家の。廻し者で有つたよな。エヽそれともしらず氣を赦し。よふ〳〵手に入る寶を奪はれ。現在娘を殺せしも。元の根ざしはアノ二才め。イデ摑み殺して腹いんと。身繕ひして荒々敷。一間の障子引明くれば。内にすつくと浮洲の仁三。以前の姿引かへて。進賢の冠羅綾の唐服。寶を守護して立つたるは。股をくゞりし韓信が。大元帥の位につき。拜賀を請し勢ひに。あれし老女も氣を呑れ。

「妹脊の緣」　夫婦の緣、

「二才」　若者を罵る語、青二才とも毛二才ともいふ後に解すべし、

「腹いん」　腹いやさん、

「進賢の冠」　後に圖にて示すべし。

「綾羅」　あやうすぎぬ、即ち美服をいふ

「股をくゞりし韓信か云々」　韓信は漢の高祖につかへ三傑の一人にして、兵を用ふる事神の如く、武功よく及ぶものなし、若かりしとき耻を忍びて、少年の股をくゞりしが、後天下定りて楚王に封ぜらる、此事は後に委しくいふべし「大元帥の云々」は、總大將となりて、よろこびを受けたるといふ意にて、書けるなるべし、

「只茫然たるばかりなり」といひて、直に「強氣の荒妙高笑ひ」とつゞけたる所たぼごとめきたり、

「隨臣」　近臣の意か、

只忙然たる斗りなり。強氣の荒妙高笑ひ。「ムヽハヽムヽハヽヽヽヽ。ヤア納過たる汝が振舞。娘の敵寶の盗賊。サア觀念せよと詰寄れば。ちつ共動ぜずはつたとねめつけ。「ヤア盗賊とは案外なり。とくより入込む某こそ。大内の隨臣。駒澤次郎左衛門が一子。同苗三郎春次とは我事なり。我幼年の比父に勘當請け。成人にしたがひて先非を悔み。大明國へ押渡り。彼地の醫官と迄成りしか共。只日本の父慕しく。仕を辭して歸朝せしに。父は早此世を去り。家督治郎右衛門は在鎌倉と。聞くと其儘對面とげ。何角の密談。夫より直樣寶の詮義。思ひ合せば近ごろ。多々羅の濱で怪しき老女。慥に藥王樹の盗賊。住家は摩耶と聞しゆゑ。大友の殘黨浮洲の仁三と僞り。此家へ入込み今日只今。紛失せし藥王樹を奪返せしも。娘千里が志。難面我に操を立て。生害せし貞心貞女。謀反の餘類と言ながら。過分至極と落涙を。

「二昔」　十年十二年、又十七年をも一昔といふ、

「大内義隆」　にらいものを引出せり、義隆は義興の長子、臣陶晴賢の爲めに攻められ、長州深川大寧寺に自殺せし人、

「小倉」　豐前企救郡にある市街、

「水の手きつて」　水ぎれをいふ、

聞いて老女は物をも言はず。持たる脇差腹にぐつと突立つれば。ノウ何故の御最期と。取付き歎く手負の顏。打詠め涙を浮め。「ヱ、是非もなき御運の末。誠御身は我子にあらず。御主君大友宗鎭樣の忘筐。菊姫君でござるはいの。ヱ、。ヲ、御合點の行ぬは御尤々々。ア、おもひ出せば二昔。御父大友宗鎭樣。足利の天下を押領せんと。謀反の旗を上げ給ひ討手遲しと待つ所に。案に違はず大内義隆。手勢すぐつて三千餘騎。豐前の國へ攻下り。小倉の城を取圍み。息をも繼ず揉立つる。味方も爰を破られじと。矢種惜まず差詰め引詰め。射出す矢先は雨霰。篠を亂して降る如く。矢庭に城下は死骸の山。初度の軍は討勝しが。其後數度の合戰に。大將始め數多の軍兵。水の手切つて落城す。最期の際に宗鎭樣。わらはを近く招き寄せ。「其方何卒姫を伴ひ落延びて。命ながらへ守育て。成人の後は尼共なし。父

「毒蛇の口」　よく用ふる語、間々佛書に見ゐたり、

「盛りの花をむざ〳〵と」よく用ふる句、

が菩提を吊はせよと。主命辭する所なく。二方の御身を抱き。毒蛇の口を切拔けて。漸く城を落延しぞや。再び御世に出さん物と。海賊人買の惡業も。まさかの時の軍用金。又玉橋の局と僞り。藥王樹を奪取しは。大内家を滅亡させ。二つには祈禱に事を寄せ。媚よき女を見置ては。手下にいひつけ。拘引し。君傾城に賣渡せし。其の罪科が報ひ〳〵て姫君の。御身の仇と成つたるは。皆わらはがなせし業。赦してたべと取付いて。悔歎けば菊姫も。いとゞ涙にむせ返り。「ノウ自ら迚も此年月。育られたる恩義をば。仇になしたる身の徒。そなたの最期も自らゆゑこらへてたもと斗りにて。手を合したるわび涙。歎けば老女は猶せきあげ。「ヲヽよふ云ふて下さつた。翌日をも知れぬ老の身の。死ぬるは元より覺期のまへ。それに引かへ姫君の。戀こがれたる其人に。一日片時添はしもせず。盛りの花をむざ〳〵

「歎きも白雪」　とかけたり、
「欠來る關助」　關助はいつもぜきたり、
「狸婆々」　惡婆を罵る語、
「ひろげ」　しろげ、

と。無常の風にちらすかと。主從手に手を取かはし。わつと斗りにむせ返れば。心を察し春次も。不便と見やる兩眼に。たばしる涙はら〳〵〳〵。ふり積む雪も一時に。解けて流れて谷川の。水も淵なす如くなり。かゝる歎きも白雪の。道を蹴立て欠來る關助。庭先へ踊り入り。「ヤア我を欺き山路に迷はせ。討んと斗りし狸婆。天罰報ふてくたばつたか。拘引たる深雪樣。何國へやつた。サア眞直に白狀ひろげ。何と〳〵と詰寄れば。三郎聲かけ。先待たれよ。我こそ駒澤了庵が一子三郎春次なり。とくより此家へ入込んで。始終の子細は皆聞いた。御邊が尋ぬる。深雪といふは。我兄治郎左衛門と。兼ねて緣邊の契約有る事。某兼ねて聞及ぶ。最前守りに書付け有つて、秋月が娘とは察したるゆゑ。此家の娘千里といひ合せ。都をさして落せしと。聞いて關助小踊し。「ハヽ有難し忝なし。お禮は重ねて心もせけ

ば。早お暇と欠行く向ふへ。芦柄傳藏飛で出で。「ヤア聞いたく。浮洲の仁三と僞つて。藥王樹を奪ひし樣子。山岡殿へ注進と。逸足出して欠行くを。エイと打たる小柄の手裏劍。たじろぐ所を關助付入り。拔手も見せず。から竹割「ホヽ潔よしく。山岡玄番が逆意の企。疾より夫と知たれ共。紛失したる靈符の尊像。奪返す迄荒立がたし。此密書をおとりにして。玄番を亡す我術。必ず堅固で關助と。勇み立つたる其有樣。手負の老女は聲を上げ。「ヲヽ適々三郎樣。只いたはしきは菊姫君。最期に婆が一つの願ひ。此世の緣は薄く共。未來を結ぶ夫婦の盃。聞屆てたべ春次樣。「ホヽ切成る老女が願ひに任せ。盡未來迄替らぬ夫婦。半座を分けて待たれよと。詞に嬉しく二人の手負。手を合したる悅び涙。「ホヽ其媒は此關助と。心を汲取るかいげ杓。是や末期の水盃。冥途の旅へ嫁入の。儀式をまねぶ三々九度。苦

「から竹割」　竹の幹を割る如く、眞二つにするをいふ、

「此世の緣は云々」　これもよく用ふる句、

「盡未來」　いつまでも

「半座を分けて待たれよ」　蓮の臺（極樂の）の半分をいふ、八犬傳に「蓮の臺の雲半座分けて云々」夫婦は一蓮托生。

「心を汲取るかいげ杓」　と

いひ「これや末期の水盃」とつゞけたり、かいげは手の一つある水手桶、末期には水を飲ますもの、水盃は生別れ死別れの時にする盃、

「まれぶ」　まなぶ、まねる、

「三三九度」　前にいへり

「笑顔は娑婆の色直し」　婚禮の時、色直しといふ式あり、前に解せり、

「雪の白髪の尉ならで云々」　友白髪まで添とげすして、姥も共に添ひて冥途へ旅立つをいふ、婚禮の嶋臺に、高砂の尉と姥とを作りつく、

介添は嫁につき添ふ女、

「彌陀の淨土へ犬(往ぬ)張子」　とかけたり、犬張子は産の時に用ふる具にして、嫁の持ち行くものなり、委しくは後にいふべし、前後皆

緣の語にて書きたれば味ふべし、

「血しほの紅にそめてやる」　犬張子をうけて書き、自害せしをいふ、

「野邊の送り火」　送り火は死者を家より送り出す時、門にたく火、

「草葉の露の玉の輿」　とかけたり、あはれはかなし、此段尾の文は隨文骨折りて書けるなるべし、頗るたくみに見ゆたり、

しき中にもにつこりと。笑顔は娑婆の色直し。雪の白髪の尉ならで。姥もあへなく介添の。彌陀の淨土へ犬張子。血汐の紅に染てやる。野邊の送り火消果し。草葉の露の玉の輿。哀れはかなき契りなり。

濱松小屋の段

「思ふ事まゝならぬこそ云々」　思ふ事まゝならぬこそ浮世なりけれ、といふ歌にてもありて書けるならん、しかし勅撰集には見ゆ、江戸の文人の作なるべし、

「かこち言」　なげきこと

「目かいさへ泣つぶしたる」とかけたり、

「我身の上にふる涙の雨」　緣の語、うけて「晴れ間なく」といへり、

「玉の緒の切れもはてざる」　命の絶ゆざるをいふ、うけて「三昧の糸」といひ「露命をつなぐ」とつゞけたり、緣の語味ふべし、

「よすが」　よりどころ、本より、「心の闇路たどり來る」よくいひたり、

濱松小屋の段

思ふ事。儘ならぬこそ浮世とは。誰いにしへの詫言。今は我身の上にふる。涙の雨のはれ間なく。哀れやみゆきは數々の。うさ重つて目かいさへ。泣潰したる盲目の。力と賴む物とては。わづかに細き竹の杖。有るにかひなき玉の緒の切れもはてざる三昧の糸。露命をつなぐよすがにと。脊にわいがけしほ〳〵と。心の闇路たどりくる。跡に大勢里童。てん手に竹ぎれふり廻し。アレ〳〵朝顔の乞食目くら。たゝけ〳〵。打てよ〳〵と取廻はす。詞「アヽコレ〳〵。目の見えぬ者を。其やうにはせぬものじやわいなア。どれも〳〵よいお子さまや。今度よい物が有つたら上ふぞへ。エヽいやじやはい。乞食に誰が物貰ふもんで。ナア次郎坊。ヲヽそふじや〳〵。あたぎたない乞食の物。もらふ

「下主」　下種、下司、下衆など書く、賤しき者の稱、「わんばく」　わらは（童）の音便、わつばの轉訛なりと、腕白など書くは當字なり、「いつもの土手で芝居事」子供のよくするわざ、「道草」　もと馬が路傍の草を喰ひて、進まぬより出でたる語なりと、「あら尊と云々」　御詠歌に「あら尊と導き給へ觀音寺遠き國より運ぶあゆみを」はこぶをはるノ〳〵とかけたり、觀音寺は四國順禮の札所、前にいへり、「淺香は淺からぬ」調あり「身にぞ笈摺」　とかけたり、笈摺の事は前に解せり、「うき身やつれ笠」　とかけ「露のやどり」とつゞけたり、名句といふべし、

ものかい。そんな事ぬかしたら。ユリヤ斯じやと惣々が。竹で打やら石打やら。育も下主のわんばく共。よつてかゝつてさいなまれ。詞「アヽコレ〳〵。モウふたゝび言やしませぬ。こらへてくだされ誤つたと。土にひれふしわびければ。詞「ヲヽ泣いて誤るから。堪忍してやろ。サア皆こい。いつもの土手で芝居ごと。五郎よ治郎よと呼つれて。道ぐさしながら走り行く。跡に深雪はわつと泣き。ヱヽ淺ましやなさけなや。詞「誰有ふ岸戸の家老。秋月弓之助が娘共云れし身が。いかに落ぶれたればとて。筋目もない里の子に。乞食よ非人と打叩れ。あやまりましたはなに事と。身を抱しめてどふと伏し。かこち涙ぞいぢらしき。あら尊と。導きたまへ觀音寺。遠き國よりはる〳〵と。乳人淺香はあさからぬ。歎きも身にぞ笈摺の。深雪の行衛尋ねんと。思ひ立つたる順禮も。辛苦にうき身やつれ笠。露の舍りも取か

「いふ物ごしからつまはづれ」　いふ樣子からそぶりといふ程の意、ものごしはもと隔てゝ見たる樣をいふなるべし、

「目かいの見ぬお人に」　なりかたちにては尋ねられじ、故に「もし聞きはなされぬか」と問ふ、

ねて。杖を力に歩み寄り。詞「コレ〳〵女中。卒爾ながらチトお尋ね申したいと。音のふ聲に泣顔隠し。ヲヽコレハ〻マア。どなたかは存じませぬが。私は目かいの見えぬもの。ガ〻マア何事のお尋ねぞと。いふ物ごしからつまはづれ。どふやら尋ねる其人に。似たと思へど形かたち。これは非人ことに盲目。心の迷ひと思ひ返し。詞「ホヽヽヽヽ。ヲヽわしとした事が。麁相なめかいの見えぬお人に。問ふ事は異なものなれど。もし此街道を。年の比は十六七。媚かたち人にすぐれ。やしき育の大振袖。供をもつれず只一人。通られし樣子をば。もし聞はなされぬかと。いふは正しく我身のうへと。胸さわぎしが待しばし。世の中に似た聲の人。似た事のなきに有らずと思ひ返し。詞「ヲヽそれはマア笑止な事や。往來もしげき此街道。女中の一人旅は。いくたりといふかぎりなし。左樣にお尋なされては。中々しれふやう

「藝州福岡」　も面白し、

「面ぶせ」　面目なきをいふ、面目あるを面起しといふに對す、

「くろまして」　くらまして、

「正躰泣居たる」　かけ詞の紋切形、

もなし。ガマア國はいづく。名は何と申しますへ。サレバイノ。國は藝州福岡。名は深雪樣。といふはいよ〳〵乳母淺香。ヤレなつかしやといひたさも。落ぶれ果し今の身を。われと名乘も面ぶせ。殊にそれぞといふならば。つれて逝れて父母に。どの顏さげてま見ゆべき。罪深き事ながら。僞すかして歸さんと。猶しも聲をくろまして。詞ヲヽ成程。慥そんな噂も聞いたれども。女中は國を出てより。樣々のうきめにあい。やう〳〵のがれ此邊までは來られしが。どふした事か四五日前に。淵川へ身を投げて。死なしやんしたと人のうはさ。たとへどのやうに尋ねても。もふ逢ふ事は成ますまいと。聞いて淺香は。詞ヤア〳〵。何其女中は身を投げて。ハアはつとばかりに身を打ふし。前後正躰泣居たる。深雪もともに悲しさの。涙隱して傍に寄り。詞コレ申し女中樣。悲しいはお道理ながら。老少不定の世の習

「定り事」　前生よりきまりたる事、
「佛」　死人をいふ、
「怪我」　前に解せり、
「さぐり〳〵て入相の」　かけ詞の紋切形、

「位牌」　もと儒家の木主を、佛家のかり用ひたるものなりと、前に解せり、
「順禮」　の事は前に解せり、

ひ。定り事とあきらめて。早ふ國へお歸りなされ。跡吊ふておあ上なさるが佛の爲。海山かけし長の旅。隨分怪我のないやうにと。云つゝ立つてかけ小家へ。さぐり〳〵て入相の。鐘にあはれを添へにける。跡に淺香はうつとりと。涙ながらの一人言。詞ェヽコレ申し。聞えませぬぞへ深雪樣。家出なされし其時も。一言明かして下さつたら。仕樣もやうも有らふ物。おいとしや奥樣は。お前の事を苦にやんで。明ても暮ても泣て斗り。果は重き病の床。死ぬる今端の際迄も。どふぞ尋ねて連歸り。せめて位牌に無事な顏を。遇してくれよと私への遺言。詞それゆゑ忌の明をも待たず。國々廻る順禮も。お前にあはふばつかりじやに。なぜ死んでは下さんした。わしやお位牌へ云譯を。何とせふぞと身をもだへ。恨むる人は眼のまへに。有りともしらぬくどき泣。聞くに深雪は身も世もあられず。袖をかみしめ耳おさ

「菩提のため」　追福の爲めといふ程の意、菩提の事は前に解せり、

「札所」　順禮の廻る寺を札所といふ、札をうつ故なり、

「おさらばと夕(言)月」　とかけたり、

「今いふたは皆僞り云々」　以下深雪がわび言、淺香がかこち言、身にしみて覺ゆ、注意して讀むべし、

へ。泣聲立てじと喰しばり。こらへ〳〵し苦しさは。骨もくだくる斗りにて。泣よりも猶つらかりし。亂るゝ心を押しづめ。淺香は涕の顏を上げ。詞我ながら愚痴のいたり。いつ迄云ふても返らぬ事。此上は菩提のため。打殘りの札所を廻り。早ふ國へ歸りませふ。そふじや〳〵と立上り。小屋の戸口へさし寄つて。イヤ申し女中樣。いかいお世話でござりました。もふおさらばと夕月にわかれを告げて行過ぎしが。何か心に點頭て。木蔭に忍び窺ふ共。しらぬ目しいの悲しさに。思はず小家を轉び出で。乳母の行衞はそなたぞと。見えぬながらに延上り。詞コレイノコレ淺香。今云たは皆僞り。尋ぬる深雪はわしじやはいのふ。聲を聞いた其時は。飛立つ樣に有つたれ共な。淺ましい此形で。ドウマア顏が合されふ。とは言ながらわしが身を。能く〳〵大事と思へばこそ。海山こえて憂苦勞。廻り合ひはあひ

「約束事」　前生よりきまりたる事、佛家の語、

「目が潰れいで」　俗に親に不孝すれば、目がつぶれるといへり、

ながら。胴欲にもよそ〳〵しふ。いふて逝した心の内。詞マヽヽどの様に有らふぞいの。只何事も是迄の。約束ごとゝ諦めて。堪忍してたも〳〵や。取分て悲しいは。是程不孝な此妾を。やつぱり子じやと思し召し。身の徒を苦にやんで。お果なされた母様の。死目に合はぬのみならず。御命日さへ露しらず。はかない事がヱヽマ有ろかいのふ。思へば〳〵淺ましや。親々の罰ばかりでも。目が潰れいで何とせふ。赦してたべと斗りにて。こらへ〳〵し溜涙。わつと叫て身を投伏し。前後正體泣しづむ。立聞く淺香も忍び兼。わつと一聲泣出せば。扨はそこにと深雪が驚き。こけつ轉びつ逃行くを。すがりとゞめて聲ふるはし。詞「コレマア〳〵待つて下さんせいのふ。姿形はかはつても。一目にも見ちがへね共。名乘かけても中々に。明さぬ氣質と知つたゆゑ。餘所事に云なして。木かげに隱れて始終の樣子。立聞

したも盡きせぬ緣。去ながら。此年月骨身を碎き。漸尋ね逢ふたもの。心強ふ逝そふとは。そりや胴よくじや〳〵。エヽ聞えませぬはいなア。其恨は理りながら。今も今とていふ通り。身の徒で此やうに。落ぶれ果し形かたち。どふマアそれと名乘れふ。わしが心の悲しさを思ひやつて。必ず呵つてたもるな。誤たとすがり歎けば。詞ヲヽ何のマア呵りませふ。たとへどの樣にお成なされても。廻りあふたがわしや嬉しい。とはいふ物のこれはまた。あんまりな落ぶれやう。日比の辛苦が思ひやられて。わしや〳〵此胸が。裂るやうにござりますわいのふ。シタガコレ。お氣づかひなされますな。私が親古部三郎兵衛と云ふ人。小夜の中山のほとりとやらに。ながらへて居さんすとの事。肌身放さぬ守刀。それを證據に廻り逢ひ。阿曾次郎樣の有家を尋ね。きつとお逢せ申しましよが。何を云ふても爰は街道。宿有る方へ

「小夜の中山」遠州佐野郡にあり、日坂より金谷へ踰ゆる峻しき山道、夜泣石と無間の鐘とを以て聞ゆ、

「物ぐさし」　うさんぐさいといふに同じ、
「摩耶の婆々に云々」　摩耶が嶽の段を見よ、
「亂れてかぐれに」　乞食となりて、盲人となれるをいふ、
「人賣商」　これ人間の悪魔、俗に鬼といふ、
「鰹かき」　なまくら刀をいふ、
「ぼろその下つた亂れ」　つどれを着た乞食、
「賣れて絹のべゞ」　女郎をいふ、王建が句に「當レ窓

急がんと。泣入る深雪を勞はりて。立上る折こそ有れ。夜道ぼか〳〵わな拔吉兵衛。よい事がなと蚤取まなこ。二人がそぶり物ぐさしと。傍へ立寄り提灯の。火かげに深雪が顔打詠め。詞ヨウわりやいつぞや。摩耶のばゞに百兩で。直をきめた娘。いつの間に亂れてかぐれに成りおつたぞい。しかし醫者にかけたら治らぬ事も有るまい。何分元手いらずの勝負物。ドレ拾ふてやろと手を取るを。淺香は引退け氣色をかへ。詞ヤア女と思ひ慮外仕やると赦しはせじと杖追取り。仕込みし刀拔かくる。其手を押へて。詞ムヽハヽハヽヽヽ。こりやゝい。わな拔の吉兵衛と云ふてな。日本國を股にかける人賣商。鰹かきひねくり廻しても。びく共する男じやないは。ぼろその下つた亂せふより。賣られて絹のべゞ着いと。てうける詞聞かねて。詞イヤ推參な勾引。見事賣なら賣つて見やと。拔放して切り込む刀。さしつ

却羨青樓倡、十指不レ動衣盈レ箱」

「勾引」　女などを欺き盗みて賣る惡者、別記を見よ、

「百年目」　のがれぬ場合にいふ語、

「何と詮方並木原」　とかけたり、

たりと身をかはし。もふ百年めとわな拔も。同じく旅指拔放し。觀念せよと切結ぶ。深雪はあせれど盲目の。何と詮方並木原。二人は打合ふ月明り。爰をせんどといどみあふ。いかゞはしけんわな拔が。石につまづき眞逆樣。轉ぶを得たりと起しも立てず。肩脊も分かぬめつた切。さしもの惡もの七轉八倒。のた打廻つて死したるは。心地よくこそ見えにけり。淺香はしつかと。とゞめの刀。詞「サア〳〵嬉しや深雪樣。惡者はしとめましたと。云ふ内よりも心のたるみ。其儘そこに倒れ伏す。深雪はこはゞ〳〵さぐり寄り。いたはる手先にしたふ血。詞「ヤア〳〵〳〵。そなたも手疵負やつたか。なふ悲しやと抱かゝへ。淺香いのふ〳〵と。聲をかぎりに呼生れば。息吹かへし目を開き。詞「ヲヽ深雪さま。お身に怪我はなかりしか。イヤ〳〵。わしは何共せぬが。そなたの手疵が氣遣ひな。氣を確かにもつてたもと。取付き歎

けば。アヽコレ聲が高い。詞「わたしはほんのかすり手。氣づかふ事はござりませぬ。誰も見ぬ中サアお出と。かたなを納めみゆきが背に。負すもなみだふる三味線の。いつかむかしにかへらふ尾。いとゞもつるゝ心をば。てんじかへても手疵のいたみ。もうもくならぬ我身さへ。杖を力に立上り。女心もはりつめし。弓張月の夜半のかね。つくす忠義の一すじ道。ともなひてこそ急ぎ行く。

「なみだもふる三味線」とかけ「いつか背にかへらふ尾」とつゞけたり「いとゞもつるゝ」「てんじかへても」皆三味線の緣の語、かへらふ尾は三味線の棹の先の、そり反りたる所、歸るをかけたり、てんじは天柱と書く、今てんじんといへり、三味線の棹のさきの、糸をまく所、轉じをかけたり、「盲目ならぬ我身さへ杖を力に」あはれなり、「張つめし、弓張月の夜半の鐘、つくす忠義の一筋道」かけ詞と緣の語とにて書下せり、深く味ふべし、

笑藥の段

「行空の雲の足より」　緣の語にて「雲助が足並」の句にかむらせたるなり、

「傳馬」　昔道中の驛々にて、公用の役に出す駄馬、

「五十三次打つゞく」　東海道の往來繁き樣一寸よくいひたり、昔江戸より京に至る、其驛次五十三あり、

「おじやれが髮の島田の宿」とかけたり、島田は駿河志太郡にあり、大井川の東岸にありて、金谷と相對す、おじやれは旅人に淫をひさぐ旅店の下婢の稱、おじやれと招き迎ふるよりの名なるべし、又島田髷は此宿より出でたるならん、

「名うて」　評判の意

「名さへ戎屋德右衛門」　其有福なるを見る、ゑびすは、

笑藥の段

行く空の。雲の足より雲助が。足並早き東海道。傳馬人足。歩荷物。吹付け行くたばこさへ。五十三次打つゞく。中に取分け賑はしき。おじやれが髮の島田の宿。所名うての內證よし。名さへ戎屋德右衛門。しにせも廣き十間口。店は關札講印。かけ渡したる緩簾も。風にひらめき吹付ける。繁昌類ひなかりけり。せはしい中にもおじやれ共。何がな油と寄こぞり。何とおなべ。此頃旦那樣の世話にさしやんす。朝がほといふ目くら。ありやマア惜しい器量じやないかいのふ。併こちの旦那樣が。身に引かけての深切は。どふやらくさい者じやぞや。ヲヽ何のいのふ。何ぼこま付けても提灯で餅。埒の明かぬ事じやわいの。夫はそふと。けふお泊りのお侍樣。一人のおかたは。意地の惡そふな

商賣の神にて、七福神の一、別記を見よ、

「しこせ」　古き店、

「關札講印」　關所札講社札などをいふ、

「何がな油と」　油を賣るなり、主人など見ぬ所にてなまけあそぶをいふ、

「くさいもの」　あやしいもの、

「こまつけても」　なつけすかしても、

「提灯で餅」　搗くべからず、埒明かず、

「埒の明かぬ」　此語、春日明神の祭典より出づと、前にいへり、

「一つに寄れば男沙汰」　今も昔もかはらざるべし、多少教育ある女學生なども、其友達の嫁入するあれば、聟を見せよと迫り、見たる上に打寄りて、顔かたちの

顔じやが。最一人のお方はよい男。ノウ小よし殿。そふじやないかいのと。一つに寄れば男沙汰。いづくの里も色ぞかし。かゝる折から奥の間より。立出づる萩の祐仙。イヤコレ〳〵女中。奥のお客は武家方そふなが。印の紋は大内桐。定めて山口の家中衆ならん。名は何といひますぞ。ハイ慥か大内の御近習駒澤樣。今お一人は岩代樣とやら聞ました。ムヽ成程。そふで有らふ。イヤ大義ながら其方奥へいて。岩代樣に萩の祐仙と申す者。ちと内々にて。御目にかゝりたいといふてくれまいか。ハイ〳〵夫はお安い御用。ドレ〳〵呼まして上ませふと。二人は立つて入にけり。斯としらせに岩代多喜太。一間の内より立出づれば。夫と見るより頭を下げ。コレハ〳〵岩代樣。先以て御堅勝。ヤコリヤ珍らしい萩の祐仙。某に逢ひたいとは。いか成事ぞ。サレバ〳〵。先達ての御狀には。新參の駒澤が諫言にて。殿には御

本心になられ。運八殿の最期のよし。則ち玄蕃樣よりの此御狀と。渡せば請取り一見し。ヲヽ大義々々。身共迚も何角に付けて。邪魔に成るは駒澤め。何とぞ密に害せんと。昨日街道にて笆久造といへる浪人を連歸り。委細の工み申付け。早速奥の下家へ忍ばせ置いた。ヤア夫は味し〳〵。ガもし其手でいかぬ時は。下拙が手せいの。コヽヽコレ此しびれ藥。薄茶に交ぜて呑す時は。一夜が間は死人同然。ムン夫こそ幸ひ屈竟。併小しやく者の駒澤め。心みなくてはくらふまい。ヲット其お氣遣ひは御無用〳〵。此丸藥は則ち解藥。是を先へ呑みおかば。少しも醉はざる大妙藥。ガ時に申さぬ事は聞えませぬが。首尾よふ參れば。御褒美はつゝしりと。いたゞきたふござります。ヲヽサ〳〵。そこにぬかりはちつ共ないと。懷中より金壹包取出し。事成就の其上では。いつかどのほふびなれ共。先是は當座の印

批評、必ず善き所は棚に上げて、惡しき所のみの棚おろしとは、驚き入つたり、これが女の命とは、氣樂なもの、

「大内桐」　五三の桐をいふ、大内義隆、後柏原天皇御即位の資を献じ、菊桐の紋章を賜ふ、

「御堅勝」　おまめ、

「最期」　臨終の意より、轉じて死をいふ、

「薄茶」　抹茶の薄きもの、濃茶に對す、立方飲方等皆異なれり、

「てつがい」　手はづ

「ふくかげん」　茶の風味をいふ、

「しゝらしん」　氣もなく知らぬ樣をいふ俗語、

と差出せば。押戴き。コレハ〳〵忝ない。シテ駒澤はいづれの間に。ヲヽサ彼は先刻公用に付。村役人方へうせたれば。此間に件の妙藥。某は奥の間にて。山岡殿への書面をしたゝめん。其方はてつがい致して。後より來やれと。いひつゝ立つて岩代は。一間へこそは入りにける。後に祐仙一人ゐみ。味いぞ〳〵。當座の褒美先十兩。さらば是から藥のしかけと。云つゝあたり見廻して。件の藥を湯の中へ。そつとほり込み蓋びつしやり。かぶして置いて駒澤が。戻り次第に振立て。我等が先へふくかげん。解藥の力でしゝらしん。駒澤めは立まちに。ぐにや〳〵〳〵と藥の功能。こいつはよつぽどゐい。味いは〳〵〳〵と。悅び勇む其所へ。奥より臭せき下女おなべ。申し〳〵。奥のお客がお待ちかね。早ふ〳〵とせり立つる。聲に胸り祐仙は。そしらぬ顏で奥に入る。始終窺ひ德右衛門。一間を出でゝ後打詠

「笑藥」　しびれ藥もいかゞなれど、笑藥あらば求めたし、調法なもの、

「燈す火のきらを餝りて」とつゞけたり、綺羅を餝るは、衣服の美なるをも、容儀をとゝのふるをも、威光のあるをもいふ、

「羽織」　はふり（放の字を書く、上に放り着るゆゑ）の轉にて、羽織と書くは當字なりと、前にいへり、

「野袴」　裾に廣きへりを取りたる袴にて、武士などの旅行に着せしもの、

め。最前から聞いていれば。何やら怪しいアノ藥。駒澤樣へ申し上ふか。アイヤ〳〵。夫では返つてあたりさはり。どふぞ能い思案が。有そふな物じやが。ヲヽソレ。昨日松原で買てきた此笑藥。此湯をかへて。ヲヽそふじや〳〵。マア〳〵かふして置いてまさかの時は。ヲツトよし〳〵。と心で點頭き德右衛門勝手へこそは入にけり。早夕暮のいそがしく。膳部のはこび寢道具を。間毎々々に燈す火の。きらを錺つて立歸る。駒澤治良左工門春雄。旅中ながらも武士の。行義崩さぬ羽織野袴。家來引連れ立歸る。待まうけたる岩代多喜太。一間の內より步み出で。コレハ〳〵駒澤氏。お早いお歸り。要用は相濟ましたか。いかにも〳〵。殿さま御歸國先ぶれの手筈。庄屋代官に萬事申付け。思はぬ延引。嘸御待兼ね。アヽ何の〳〵。旅草臥のおいとひもなく。宿々の欠引。イヤモ御苦勞に存ずる。エヽ拙者も

「庄屋代官」　いづれも前に解せり、

「くたぶれ」　くたびれの轉にて、くた(腐)をはたらかせたる語なりと、草臥と書くは、詩經の古點に、跋踄をくさぶしと讀みたるに起るといふ、

「入魂」　れんごろにするをいふ、

「道中にても茶箱を持參し」　茶人は多く茶箱を持して旅行せり、

「いたいた」　いたした、

何がなと存ずる所に。國元にて入魂の醫者萩の祐仙と申す者。當宿へ泊り合ひ。先刻はからず對面致せしに。こやつ殊の外茶好きにて。道中にても茶箱を持參し。相樂しみ居るとの事。貴殿にもお好みの道。何と一ぷく呑んでおやりなされまいか。ハアそれは風流なる心がけ。併ながら我も人もたび草臥。所望致すも何とやら。ハテ扨いらぬ御遠慮。薄茶一ぷく所望いたせば迚。かれも好の道でござれば。何の草臥をいとひませふ。ひらに一ぷくお付合下されいと。おのが工みの押付し。無理にすゝむる其所へ。一間を出づる萩の祐仙。斯と見るより心のゑみ。さとられまじとそらとぼけ。コレハ〳〵岩代樣。見苦しい座敷へ御入來。殊にあなた樣は。ヲヽサ是こそ。先刻咄しいたいた駒澤氏。イヤモ文字武藝はいふに及ばず。何一つ拔目はなけれど。生得御遠慮深いお人。去共元來茶の道には御執心。幸ひ是

に白湯もたぎり有る。先刻咄しの薄茶一ぷく。サヽ所望だ〳〵。ハヽコレハ〳〵。中々あなた方へ。上ます樣な茶ではござりませねど。御所望とは身の面目。苦しからずば何ぶく成りと。召上られ下されと。追從たら〳〵立上り。茶箱取出し毒藥の。工みの裏をかゝれし共。しらぬ手前のしかつべらしく。ふり立て差出せば。岩代多喜太詞を正し。イザ駒澤氏と。取次ぐ所へ。ヤレ先しばらくと德右衛門。恐れながらと座敷に出で。憚りながら旦那樣。いかゞはしき申事ながら。數代御出入の殿樣の。御家來たるあなた方。私方で煮焚の物は。此度に限らず。吟味に吟味致した上。差上ませねば。千に一つ麁相がござりました時は。此德右衛門めが越度。泊り合せしあなたのお茶。サア御如在の有らふ樣はなけれど。めつたにはナア申しと。目顏でしらせば岩代多喜太。ヤアいらざるうぬらがかばい立て。身が入魂

「しかつべらしく」尤もらしく、しかありつべきらしくの略にて、鹿爪など書くは當字なりと、

「越度」前に解せり、

「如在」前に解せり、

「きつば廻せば」　刀に手をかけ、をどしつくるをいふ、

「詞をつがふ」　約束をいふ、

「薄茶雫も殘らず」　こゝは何氣なく書けるやうなれど、茶は一滴も殘らず飲

の萩の祐仙。毒藥でも仕込有らふかと。疑ふての申し條か。アイヤ全く左樣ではござりませねど。ムン然らば何故差留た。駒澤殿の手前といひ。サア今一言いふて見よ。まつ二つに打放すと。きつば廻せば祐仙押留め。アイヤ先々おまちなされ。ヱヽ貴公樣の御立腹は御尤なれど。德右衛門の申す所も。又一理有る。ヤアかう致そ。下拙めが毒見仕り。駒澤氏へ差上ませふ。何と德右衛門。夫で云分は有るまいの。イヤモ御自分に毒味なされる程。慥な事はこざりませぬ。ヲヽそふ有らふ〳〵。其替り何事もない時は。其分では濟さぬが合點か。イヤモ其上は。是非に及びませぬ。御存分になされませ。ヲヽ面白い〳〵。きつと詞をつがふたぞよ。ドレ毒味をと茶碗取上げ。そつと解藥を先へ呑み。さあらぬ體にて件の薄茶。雫も殘さず呑ほして。サア見たか德右衛門。此通りじや。サ是で別條が有るか。德右衛門

み、終に音さするが禮なりとぞ、

「イヤ〳〵おかしくないぞ云々」これより笑藥の功能見ゆ、

どふだ。ハイ。ヤモ私が麁相。眞平御免下さりませふ。ヤ何じや。御免下されい。御免下されいも氣が強いわい。ヤイ德右衛門。戎屋德右衛門。ヤア戎德め。サア約束じや。夫へ。それへ〳〵。直れ〳〵。ムヽハヽヽヽハヽヽヽヽ。イヤ〳〵。おかしくないぞ〳〵〳〵。エヘヽヽヽヽ。何じやしらぬがむせふにおかしく成つてきたわい。ハアハヽヽヽヽ。ヲホヽヽヽヽ。コリヤ〳〵祐仙。笑ふて斗り居らずと。早く駒澤殿へ差上げてよかろふ。ハヽヽヽヽハヽヽヽヽ。成程々〳〵。只今。只今差上げます。ハヽヽヽヽ。暫く〳〵お待下され。ホヽヽヽヽヲホヽヽヽヽ。ハレめんよふな。笑ふまいと思ふ程。ハヽヽヽヽホヽヽヽヽ。アヽコリヤたまらぬわい。ハヽヽヽヽハヽヽヽヽ。ヤイ〳〵たわけ者め。おかしくもない事をげら〳〵笑ひ。身共は格別。駒澤殿へぶ禮であらふぞ。アハヽヽヽヽウヽヽヽヽ。イヤ〳〵。左

「笑癪」かゝる病あるか知らず、

「腹の立つ程おかしい」とは面白し、

様にお腹は立てられな。拙者も笑ふまいと存ずれど。何か腹の底からわき出る様に。アハヽヽヽヽホヽヽヽ。アヽ苦しい〳〵〳〵。ハヽヽヽヽ。イヤ〳〵〳〵。もふ〳〵笑はんぞ〳〵。笑はんといふたらモウわらわん。おれも男じや。何の其。ちよこざいな。アハヽヽヽヽ。どつこい。ムハヽヽヽヽ。ヤア〳〵コリヤ〳〵。亭主〳〵。この邊に醫者はないか。アノ醫者が醫者を頼むは。どふかこふ卑怯な事なれど。同商賣は相互ひじや。コリヤなんでも。笑癪といふ物かいな。アハヽヽヽヽウヽヽヽヽ。コリヤ〳〵〳〵徳右衛門。どふぞ醫者を呼んで來てくれい。腹が立つ程おかしいわい。ハヽヽヽヽハヽヽヽヽ。いま〳〵しいわい。ハヽヽヽヽ。コリヤたまらぬ。アハヽヽヽヽ。腹がよれるとすりかへた。藥とはいざしらず。果は茶箱も蹴ちらかし。笑ひ入つてぞ正體なき。姿にあきれ岩代多喜太。はかる戎屋徳

「手は見せぬ」直に切放すといふ意、拔く手は見せぬの略なるべし、

「あやちなく」わけ分らぬをいふ、あやなくなどの語より、作れる俗語なるべし、

「ぶつてう面」ふくれ面をいふ別記を見よ、

「跡へ心を奥の間」かけ詞の紋切形

右衛門。おかしさ隱す斗りなり。短氣の岩代ぐつとせき上げ。ヤア大たわけの萩野祐仙。笑ひやまずば手は見せぬと。力身返れば恟りながら。手を合してもとまらぬ笑ひ。アヽめつそふな〳〵。ホヽヽヽ。どふぞ御了簡々々々。ムヽヽヽハヽヽヽヽ。と詫る詞もあやちなく。笑ひ藥の利目共。しらぬ祐仙息はづませ。轉つ笑ひつ。ハヽヽヽヽ。逃げてゆく。案に相違の岩代は。靭れ果たるぶつてふ顏。ヱヽ樣々の馬鹿者にかゝり。湯に入るを忘れた。ヤイ亭主め。うぬよく邪魔を。ヱヽきり〳〵風呂へ案内ひろげと。夫共いひ得ずむしやくしや腹。席を蹴立て廊下口。後に心を奥の間の。我座敷へと駒澤も。座を立つてこそ入にけり。

宿屋の段

「何國にもしばしば旅云々」かゝる歌ありや知らず古今集「世の中はいづれかさしてわがならんゆきとまるをぞ宿とさだむる」この意に似たり、果してこれより書けるか、

「徒然わぶる假の宿、夜の襖の云々」　旅宿のつれづれにして、物さびしき樣よく寫したり、

「先年山城の宇治にて云々」宇治の螢狩に契を結び、駒澤は扇に朝顏の唱歌を書き、深雪は短册に和歌を認め、取かはして別れしなり、

「明石にて船がゝりせし云々」明石別れの段を見よ、

「何者が認ひつたへて云々」

宿屋の段

何國にも。暫しは旅と綴りけん。昔の人の筆の跡。徒然佗る假の宿。夜の襖の透洩れて。風に瞬く灯火の。影も淋しき奥の間へ。立歸る次郎左衛門。何心無く坐を占て。不圖目に付く衝立の。張交の歌讀下し。詞テ心得ぬ。此はりまぜの地紙の歌は。先年山城の宇治にて秋月の娘。深雪が扇に某が。又逢までの筐にと。書いて與へし朝顏の歌。其後圖らず明石にて。船掛りせし其砌。琴に合して深雪が節付。折節思はぬ互の出船。飽かぬ別れを悲しみて。女の手自ら我船へ。抛込し此扇。然るに今又此家にて。思はずも此はりまぜ。ア何者が諷ひ傳へて。はからず東の驛路に。見るも不思議と獨言。其折からの忍ばれて。詠め入たる時しも有れ。襖押開け德右衛門。小腰屈めて入來れば。

他郷にて我が詩歌を見る、己に其感深し、まして此事情あるに於てをや、作意頗る妙、

「どの樣な科人が云々」龜の甲より年の功、注意の至れるを見る、

「中國」　山陽道の稱、山陰道と南海道の間なればいふとぞ、

此方は扇押隱し。詞ヲヽ亭主。先刻は扨々嚴い働き。危き難を遁れしも。全く其方が志。サヽ是へ〳〵。ハヽ冥加に餘る御詞。ヱヽ最前此方へ參る砌。何か三人密々咄し。合點行かずと忍び聞けば。麻脾れ藥を茶に交て。彼方樣へ差上んとの。アヽコリヤ。サア恐ろしい巧み。ヱヽ憎さも憎し。直に申し上ふとは存じたれど。夫ではどの樣な科人が。出來うも知れぬと存じ。ヘヽ幸ひ。先日慰に求めました笑ひ藥。ヤコレ幸ひと。しびれ藥と取替たを。知らずに呑んだ先刻の時宜。此後とても旦那樣。御油斷は成ませぬぞへ。ホヽ其儀は某も疾く承知致した。マ夫は格別。此衝立に有る朝顔の唱歌は。何人の手跡。何いふ事から御身が手に入しぞ。ヱヽ夫でござりますか。其歌に付て。ア哀な咄し。ヱヽ元は中國邊。歷々の娘そふなが。何やら尋ねる人が有るとて。親元を家出し。夫より方々と流浪致し。果はとふと

「濱松」　遠州敷智郡にあり、

「獨ぼし」　只一人なるをいふ、一人ぼつち、

「いぢらしがり」　かあいさうがり、

「琴三味」　琴貴の段に詳しく解せり、

「知らぬ佛氣德右衛門」　といへり諺に「知らぬが佛」

ふ目を泣潰し。跡の月までは濱松邊に。其歌を諷ふて袖乞。所に又國元から。所縁の女子が尋ねて來て逢ましたが。其女も程無ふ病死。夫から又獨ぼし。此邊まで其歌を謠ふて歩行ましたが。何が盲目でこそあれ。器量は美し。聲はよし。見る程の者がいぢらしがり。朝顔々々と言ふて其歌を。知らぬ者はござりませぬ。私も餘りの不便さに。此宿に足を止させ。今では宿屋々々の御客の伽。何とマア不仕合な者も。有る者でござりますと。涙片手の物語も。心に犇々答ゆる駒澤。若言交せし我妻かと。轟く胸を押鎭め。ムヽ夫は扨哀な咄し。身も今宵は何とやら物淋しい。欝散の爲め其女を。呼寄する事は成まいか。イヤモ何が扨お安い事。只今呼に遣はしましよ。御慰に琴か三味。ムヽ何分宜に賴み入ると。云ふは子細の有そとも。知らぬ佛氣德右衛門。尻輕にこそ立て行く。跡へ相役岩代多喜太。のさ〳〵

「解けても解けやらぬ前垂かけ」調ありかけたり、

「茶箱も持参いたすまい」ひしと身に應ふ、

「減らず口」まけ惜みの詞をいふ、

と坐に直り。詞ヤ駒澤氏。嘸御退屈でござらふ。コレハ〳〵岩代氏。殊の外御早い事でござると。上べは解ても解やらぬ。前垂掛の下女お鍋。次の間に手を問へ。申し〳〵。只今朝顔殿が見えました。是へ通しましよかいな。ナニ朝顔とは何者。アイヤ。此道中で琴三味を彈き。旅の徒然を慰むる瞽女とやら。拙者も何か物淋しうこざれば。ちと琴でも聞ふと存じ。亭主を頼み呼寄ましてござる。アイヤ夫や止に成れい。トハ又何故な。サレバサ。先刻身共が知音たる萩の祐仙。同席如何と云れた貴殿。乞食をば坐敷へは。通されまいがな。ハテ高の知れた盲目女。まん更怪しい。ナソレ。茶箱も持参致すまいと。しつぺい返しにぎつくりと。言句に詰れど減ず口。詞左程御所望ならば兎も角も。併座敷へは叶はぬ。庭へ呼出し。琴なと三味なと彈し召れて。早く此場を追返されよと。飽まで意地持つ執拗者。

「むさんなるかな秋月の云々」　名文なり、身にしみて覺ゆ「娘深雪は身に積る」みと身調あり、雪と積る絲の語「數の重りて」調あり「塒失ふ目無鳥」家を離れて盲目となれるをいふ「淺香はもろく朝露と」調あり「消殘りたる」朝露をうけて書く「捨も椽(得ぬ)先」かけたり「足元も危き木曾の丸木橋云々」盲人の危き足元に、さぐりよる樣見るが如し、木曾のかけ橋とて、信州西筑摩郡木曾山中にあり、これをいふなるべし。「おはもじ」　おはづかし、何文字といふは婦人の語なる事、前に委しく解せり、「顔も深(見)雪か馴の果」豈涙を催さざるを得んや、

寄ず障らず駒澤が。差圖にお鍋は心得て。朝顔殿召まする。朝顔殿々々と呼立る。むさんなるかな秋月の。娘深雪は身に積る。歎きの數の重りて。塒失ふ目無鳥。杖柱とも賴みてし。淺香は脆く朝露と。消殘りたる身一つを。遁に捨も椽先の。飛石探る足元も。危ふき木曾の丸木橋。渡り苦しき風情にて。漸〳〵坐して手をつかへ。詞召ましたは此お坐敷でござりますか。拙い調も御笑ひ種。おはもじ樣やと會釋する。顔も深雪が馴の果。不便の者やとせぐり來る。涙呑込み扣へ居る。岩代は夫とも知ず。詞ヤア見苦しい其形で。我々が目通りへうせたは。聞及んだ朝顔めな。エヽ急々立てうせ居らふ。アイヤ〳〵岩代氏。そふもぎどうに仰せられな。此方に呼寄たればこそ。思ひ掛無ふ。アイヤ思掛無ふ來た者を。叱るは武士の情に非ず。コリヤ〳〵女。大義ながら其朝顔とやらの歌。サヽ早く謠ふて聞せいと。望む

「もきどう」　邪見又すげなくの意、沒義道無義道など書けど、いづ。「此方に呼寄せたればこそ云々」　情け深きを見る、「思ひがけなふ」　のいひ直し頗る味あり、「望む心は千萬無量」　よく利きたり、情緒の溢るゝを見る、「焦るゝ夫のあるぞとも」　あばれいたはし。「戀故心つくし琴云々」　金玉の文なり、深く味ふべし。心づくしをつくし琴とかけたり、心づくしは辛苦するをいふ、筑紫琴は普通の琴をいふ、寛平年中筑紫の石川色子が、傳へしよりの稱なりとぞ「誰かは憂きを斗爲巾の」　問ひを斗爲巾とかけたり、斗爲巾は、琴の絃の十一十二十三の稱、俗に

心は千萬無量。知らぬ岩代頻脹らし。詞「扨々駒澤氏には。イヤモ酷い御執心。コリヤ〳〵盲女。何成とも。エヽ諷へ〳〵。サヽ早く〳〵。ハイ〳〵〳〵。諷ひまするでござりますと。焦るヽ夫のあるぞとも。知らぬ盲の探り手に。戀故心盡し琴。誰かは憂を斗爲吟の。糸より細き指先に。指爪さへも八ッ橋の。窶れ果たる身を嘲ち。涙に曇る爪調べ。歌「露の干ぬ間の。朝顔を。照す日影の面無に。哀れ一むら雨の。はら〳〵と。降かし。詞「ムヽ夫を慕ふ音律の。我々が身にも思ひ遣れて。思はずも感涙致した。のふ岩代殿。如何樣琴といひ器量といひ。イヤモ中々感心仕る。イヤナニ朝顔とやら。そこは定めて冷るで有らふ。身どもが旁で今一曲。サア〳〵所望だ〳〵。アイヤ岩代殿。最許して御遣成れい。去とては駒澤氏。身どもが望を止さつしやるは。ソリヤ意地の悪いと申す者。イヤそふではござらねど。

彼も定て勞れませふと存じて。ハヽア然らば曲は止にして。コリヤ〳〵女。汝もはらからの非人でも有まい。身の上話しも又一興。話して聞せ。サヽ如何だ〳〵。ハイ〳〵能ふ問ふて下さります。御詞にあまへ。御話し申すも耻しながら。元私は中國生れ。樣子有つて都の住居。一年宇治の螢狩に。焦れそめたる戀人と。語らふ間さへ夏の夜の。短い契りの本意無い別れ。所尋ぬる便りさへ　思ふに任せぬ國の迎ひ。詞親々に誘はれ。涙花の浦を船出して。身を盡したる憂思ひ。泣いて明石の風待に。偶逢は逢ながら。面無き嵐に吹分られ。國へ歸れば父母の。詞思ひも寄らぬ夫定め。立る操を破らじと。屋敷を拔けて數々の。憂目を凌ぎ都路へ。登つて聞けば其人は。東の旅と聞く悲しさ。又も都を迷ひ出で。何時かは巡り逢坂の。關路を跡に近江路や。美濃尾張さへ定無く。戀し〳〵に目を泣潰し。物の文

巾を吟と書けり「糸より細き指先に」斗爲巾をうけて書く「指す爪さへも八つ橋の」琴を彈くに琴爪あり、八ツ橋は琴の名、普通の琴よりそり高き者なりとぞ、恐くは琴の板を、八つ橋に見たてゝいへるにはあらざるか、著者其道にくらし「やつれ果てたる」　八つ橋の調をうけて書く、「露の干ぬ間の云々」　熊澤蕃山が作れる今樣歌なり今も琴唄にうたへり、「そこは定めて冷ねるで有らふ」　岩代親切男となる、「一年宇治の螢狩に云々」　淨瑠璃界に噴々たる名文、今更評するが野暮なるべし讀みて其妙を味へ給へ「語らふ間さへ夏(無)の夜」「泣て明石の風待」とかけたり、明石の段を見よ「何時かは

廻り逢坂の」とかけたり、逢坂は近江國滋賀郡にありて、昔京より東へ通ふ要路、關所を置けり、故に「關路を跡に近江路や」といへり、近江に逢ふをかけたり　美濃尾張さへ定なく」美濃尾張に身の終りをかけたり、近江より美濃尾張に至る、これ順路「物のあいろも水鳥の」水に見ずをかけたり　あいろは字の如く文色にて物のけぢめ色合をいふ「陸にさまよふ」水鳥をうけて書く、所をはなれて、さまよひくるしむ樣、あはれにいひたり、此名文句のはじめを、丸本には「元禄は中國生れ、樣子あつて上方住居、すぎし卯月の中空に、都の辰巳字治の船、こがれよるべの螢狩に」としたり、頗る味ひあり、以下は同じ、

色も水鳥の。陸にさまよふ悲しさは。何の世如何なる報ひにて。重ね〳〵の歎きの數。憐み給へとばかりにて。聲を忍て歎きける。詞「テ扨哀れな話。併男日旱も無い世界に。ヱヽ氣の狹い女だな。イヤもふ。しゆんだ話で氣が滅入つた。寐酒でも給べ氣を晴そふ。イヤナニ女。暇を吳る立歸れ。ハイ〳〵有難ふございます。左樣なれば御客樣。最御暇申します。ヲ朝顏とやら大義で有つた。初めて聞た身の上話し。若其夫が聞ならば。嘸滿足に思ふで有らふ。ノウ岩代殿。左樣々々〳〵。ハヽア是はヤア御深切な御詞。有難ふ存じますと。杖探り取り立ながら。虫が知らすか何とやら。耳に殘りし情の詞。名殘惜さに泣く〳〵も。心は跡に探り行く。折しも奥より若侍。詞「最早餘程深更に及び候ふ。御兩所ともにはや御休み。如何樣明日は正七つの出立。イザ駒澤氏。御休成れぬか。イヤ。拙者は今暫し用事もござれ

「しゆんだ話し」　沈んだ語、
「めいつた」　氣のしをるゝをいふ、
「若其夫が聞くならば」　千萬無量の情を含んで、目をしばだゝきつゝいふ樣見るが如し、
「心は跡に探り行く」　此情ある詞、心殘らざるを得ず、
「正七つ」　正四時（こゝは午前）
「心を跡に奥の間の」　かけ詞の紋切形、

ば。御搆ひ無く御先へ。左樣なれば御先へ臥らふ。御免下されふと。立上りしが胸に一物。心を跡に奥の間へ。伴はれてぞ入にける。行く間遲しと駒澤は。手を鳴して女を呼び。詞「ユリヤ〳〵。徳右衛門に急々對面し度。呼で吳やれと云付け遣。旅硯の墨摺流し。以前の扇押開いて。何か書付け用意の金子。藥の包取認る程も無く。廊下傳ひに來かゝる亭主。夫と見るより手を支へ。詞「只今召ましたは。何の御用でござります。ヲヽ徳右衛門。折入つて賴み度は。先刻の朝顔と云ふ女。今一應呼寄せて給るまいか。ハイ畏りましてはござりますが。彼は直に清水と申す方へ參りました。御用事ならば呼には遣はしませふが。アヽどふで今夜はお間には。ムヽハテ殘念至極。身は正七つの出立。マ能く〳〵緣の。ヱヽ何と御意成れます。アイヤナニ徳右衛門。今の女に謝禮の爲。此三品を其方に。確りと預置く間。

「大明國秘法の目藥」此秘法今に傳はらざるは惜むべし「甲子」の生れば種々の藥に用ひらる、調法なるもの、（治郎左衛門の兄は、大明國の醫官なりしに注意せよ、摩耶ヶ嶽の段を見よ）

「心そぐはぬ」心の合はぬをいふ、

「そぐはぬ下され物」此そぐはぬは不相應の意、

朝顔が參らば渡して吳やれ。ハイ〳〵。ヲヽコリヤマア。夥しいお金。其上結構な女子扇。お藥までも。ヲヽサ其藥は大明國秘法の目藥。甲子の年に出生せし。男子の生血を取つて服すれば。如何なる眼病も即坐に平癒。朝顔に渡して吳やれ。コレハ〳〵何から何まで。お心を籠られた下され物。參り次第相渡し。悅ばしますでござりましよと。請取る折しも時計の七つ。詞ムヽアリヤ最七つの刻限と。數ふる内に岩代多喜太。裝束改め旅出立。同勢引連れ立出て。詞イザ駒澤氏出立仕らふと。勸る詞に治郎左衛門。衣服繕ひ立出れば。見送る亭主が暇乞。心そぐはぬ駒澤岩代。打連れてこそ出て行く。跡見送つて德右衛門。詞ハアヽ同じ侍でも黑白の違ひ。意地くね惡い岩代に引替。情深い駒澤殿。アヽ通の侍じやな。ヤ夫はそふと朝顔に。今夜の禮にはそぐはぬ下され物。ハテ何ぞ樣子の有そな事と。思案の

折から。深雪は何か氣に掛り。座敷仕廻ふてうと〳〵と。又立返る切戸の内。德右衛門目早に見て。詞「ヲヽ朝顔か遲かつた。宵の御客樣が。最一度呼に遣てくれいと仰しやつたれど。清水へ往たと聞た故。御斷り申したれば。今の先お立成れた。併しマア悅びや。大枚のお金と扇。又結搆な目藥。我身に遣つて吳いと。お預け成れたわいの。是はマア〳〵冥加に餘る事。お禮申さいで殘り多い。ガ申し〳〵旦那樣。此扇に。何ぞ書いてはござりませぬか。ちよつと見て下さりませ。ヲヽドレ〳〵。エヽ。金地に一輪朝顔。露の干ぬ間が書いて有る。裏に宮城阿曾次郎事。駒澤次郎左衛門と書いて有るぞや。エヽ。アノ宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衛門と其扇に。ヲイノ、ヘヽア。はつとばかりに俄の仰天。詞「エヽ知なんだ知なんだ。知なんだわいな。道理で能ふ似たお聲と思ふたが。そんなら矢つ張阿曾次郎樣で有

「エヽ知らなんだ〳〵」驚くも尤も、悔むも尤も、

「街道一の大井川」といへり、駿河遠江兩國の間を流るゝ大河にして、昔は蓮臺越しにせし難所なり「箱根八里は馬でも越すが越すにこされぬ大井川」

「はたゝ神」雷をいふ、もとはたゝく神にて、霹靂などゝ書き、はげしき雷の

つたか。申し〳〵旦那樣。其お客樣は。何時お立成れたへ。ヲヽ今の先の事じやが。我身は又お馴染か。ヱヽ馴染所か。年月尋ぬる夫でござんすわいな。斯いふ内も心が急く。追付いて只た一言と。行んとするを引止め。詞「アヽコレ〳〵〳〵。マア〳〵〳〵待や〳〵。ヱヽ折惡ふ雨も降出し。此暗いに一人は危い〳〵。イヱ〳〵〳〵。假令死でもいとひはせぬ。サヽヽヽヽ。それはそふでも盲の身で。危い〳〵。イヤ〳〵放して〳〵と。突退け。刎退け。杖を力に降る雨も。いつかな壓はぬ女の念力。跡を慕ふて追て行く。名に高き。街道一の大井川。篠を亂して降雨に。打交り鳴るはたゝ神。漲り落る水音は。物凄くも又すさましき。夫を慕ふ念力に。道の難所も見えぬ目も。厭はぬ深雪が倒つ轉びつ。漸爰に川の傍。詞ノウ川越達。駒澤治郎左衛門樣といふ御侍。最川をお越成れたか。未か聞して〳〵と。云ふ聲さへも

こと、

「道の難所も見ぬ目も」鹿を逐ふの獵夫は山を見ず、

「見ぬ目に空を睨んで」人悅ぶも天、悲しむも天、恨むも天なり、天何ぞ多く仰がるゝや、

「天道樣聞にませぬ云々」これも有名の歎き、よくいひたりよく書きたり「思へば此身は先の世で」以下最も身にしみて覺ゆ、

「石になつたる松浦潟云々」宣化天皇の御宇、大伴狹手彦なるもの、詔を奉じて任那（朝鮮の國名）に赴く、船發するに臨み、狹手彦と契りたる媛子、肥前松浦潟の佐用姫別れを悲み、山に上

息切の。聲に川越口々に。詞ヲヽ其侍は今の先渡つたが。俄の大水で川は止つた。笑止々々とばかりにて。皆散々に行過ぐる。詞ヤアナニ川が止つた。ハヽア。悲しやと張詰し。力も落ちて伏轉び。前後不覺に泣けるが。又起上つて見えぬ目に。空を睨んで。詞天道樣。ヱヽ聞えませぬ〳〵〳〵わいな。此年月の艱難辛苦も。何卒最一度其人に。逢して給べと片時も。祈らぬ間とては無い者を。今日に限つて此大雨。川止とは！〳〵。ヱヽ何事ぞいの。思へば此身は先の世で。如何なる事の罪せしぞ。扨も〳〵味氣無や。焦れ〳〵た其人に。逢ふても知らぬ盲目の。此目は如何なる惡業ぞや。夫の跡を戀慕ひ。石に成つたる松浦潟。領巾振山の悲しみも。身に比べては數ならず。三千世界を尋ねても。斯な因果が又と世に。有るべきかはと口說立て。拳を握り身を震はし。流涕焦れ歎しは。餘所の見目も哀れなり。

りてひれ（婦人の衣の名）を振りて之を招き、其魂化して石となれりといふ、後世其山をひれ振る山と呼び、化したる石今にのこれりとぞ、此佐用姫の事は、萬葉集肥前風土記を始め、童蒙抄袖中抄などに載せたるが石になりしといふ事は見にず、これには齋藤彦麿の説あり、又似たる支那の故事もあり、後に委しくいふべし、

「三千世界」　前に解せり、

「未來で添ふを樂みに云々」　これも名文句、切なる心根よくうつしたり、

「弘誓の船に法の道」　三途の川をうけて書き「船に乘る」を法の道とかけ、道をうけて「急がんものと」とつゞけたり、何たる名句ぞ、深く味ふべし、弘誓の船と

やゝ有つて起直り。詞ヲヽそふじやく。とても添れぬ身の業因。此川水の増りしは。所詮死との事成べし。未來で添ふを樂に。爰を三途の川と定め。弘誓の船に法の道。急がん物と泣々も。夫を戀し小石の數。袖や袂に拾ひ込み。南無阿彌陀佛の聲諸とも。既に飛んず其所へ。ヤレお待成れ深雪樣と。聲に恟りけしとむ内。駈來る關助德右衛門。慌てし儘の徒跣足。斯と見より抱き留め。マア〳〵御待成れませ。イヤ〳〵誰かは知らねど。放して〳〵。マア〳〵待つしやれ朝顔殿。ヲヽ私も。此方樣の身が氣遣ひさに走つて來た。コレ。關助殿とやらが見えたぞや。ハヽア下郎めでござります。マア〳〵〳〵。氣をお靜め成れませと。無理に手を取り抱退くれば。詞ムヽそふ云ふ聲は關助か。ハヽア。エヽ遲かつた〳〵〳〵わいの。此年月艱難して。尋ね焦れた阿曾次郎樣に。折角逢たに盲の悲しさ。夫とも

は、五濁の此世に迷ひ居る一切衆生を救ひて、極樂に往生させんとの佛の誓ひをいふ、法の道は佛の道をいふ、

「夫を戀し小石の數」　調あり、

「けしとむ」　躊躇の意、

「かけ來る關助」　關助は名の如く、いつもせきたり、

「島田」　前段にいへり

「坂東順禮」　坂東三十三ケ所順禮をいふ、

「中山の邊には云々」　濱松の段を見よ、

知ず別れたれど。何やらお聲が氣に掛り。戻つて聞けばやつぱり其人。儕やれ追付ふと。跡追て來れば此川留め。エヽ如何爲ふぞいのふ〳〵〳〵。ヲヽお道理だ〳〵〳〵。拙者めも彼方樣の。行衛を尋づね廻る内。一昨日の夜の夢に。淺香殿に逢ひ。則彼方樣は島田の宿。戎屋德右衛門樣にござると。云しやると思へば目が覺。シヤ何でも不思議と。夜を日に繼いで參つた甲斐有つて。既の事に危い所を。ヤレ〳〵嬉しや。下郎めがお目に掛る上は。お氣遣成れますな。駒澤樣に添せ申す。併し淺香殿は坂東順禮と成つて。東海道へ尋ねて見へる筈。ガ御逢成れましたかな。サレバイノ。其淺香に跡の月。濱松で廻り逢たが。其夜惡者に出逢ひ數ケ所の手疵。死る今端に私を呼。中山の邊には私が產の親。古部三郎兵衛と云ふ人有り。此守刀を證據に尋行き。秋月弓之助が娘と。名乘て逢へと云敎へ。可愛や終に死

やつたわいの。ムヽスリヤ淺香殿には最期とや。ホイはつとばかり驚く内。始終聞居る德右衛門。詞「ムヽ夫なら御前は。秋月弓之助樣の御息女樣。又淺香と云ふは我娘で有つたか。ハヽア私事は其尋ね成るゝ。古部三郎兵衛と申す者。則彼方樣の祖父。秋月兵部樣には三代相恩。若氣の誤奥女中と忍び合ひ。お手打に成る所を。弓之助樣に助けられ。女諸とも國を立退き。產落せしは女の子。貧苦の中に育つる中。二つの年に母は病死。男の手で育も成らず。伯母が方へ。此短刀を添へて養子に遣しが。廻り〳〵て思はずも。親が命を助けられし。秋月樣へ御奉公。死でも忠義を忘れず導き居たか。ヲヽ出かし居つたな。此上は深雪樣へ。三郎兵衛が御土產と。件の短刀拔放し。腹にぐつと突立れば。驚く人々女房は。コレ〳〵。何で此方は此最期。死んでお役に立かいのと。縋り歎けば。詞ヤア歎な女房。最前駒

「三代相恩」　三代仕ふれば其恩重し、故にこれより譜代恩顧の臣と稱す、

澤樣の物語り。唐土傳來の目藥。甲子の年の男子の。生血にて服する時は。如何なる眼病も。即坐に平癒との事。某甲子の生れなれば。我血汐を以て。件の藥に調合し。早く彼方へ御進め申せ。サヽ早く〳〵。實もと關助用意の水呑取出し。手負の血汐受留め〳〵。泣入る深雪が懷の。妙藥取出し差寄すれば。深雪受取り我夫の。情に餘る賜と。押戴き〳〵。只一口に呑干ば。不思議や忽ち兩眼開き。蟻の這まで見え透にぞ。深雪が嬉しさ人々も。悅び合ぞ道理也。詞「アヽ嬉しや。最早此世に望み無し。何れも去ばと刀引廻し。笛の緒を刎切つて。名のみ流るゝ大井川。水の泡とぞ成にけり。跡や枕に取縋り。わつとばかりに泣く女房。露の干ぬ間の朝顏も。開し此目は盲龜の浮木優曇華の。花に增りし夫の賜二つには。我れ故此世に無き人かと。取付き歎くを關助が。諫に亡骸手舁の輿。早明渡る雞の聲。山田の惠

「用意の水呑」　昔用意の爲め、水呑を腰につけしなり、

「情に餘る賜」　拜謝感泣見るが如し、

「蟻の這ふ迄」　よく見ゆるたとへに用ふる語、

「笛のくさり」　のど笛、即ち氣管、

「名のみ流るゝ大井川」　といひ「水の泡」とつゞけたり、

「跡や枕に」　足の方や頭の方、

「朝顏も開きし此目は」　といひて「盲龜の浮木」とつ

ゞけたり、盲龜の浮木は稀有の悦びにいふ語、もと佛典より出でたり、前に解せり、

「優曇華」　天竺にありて、三千年に一度花開くといふ樹、これも稀有の悦びにいふ語、前に解せり、

「山田の惠み彌まさり云々」　此朝顔日記は、山田案山子の作なるより書く、總解を見よ、

彌增り。重れる朝顔物語。末の世までも著るし。

戀娘昔八丈　城木屋の段

總解

此淨瑠璃は。松貫四吉田角丸兩人の作にして。安永四年九月廿五日。江戸外記座の興行に上し。五年二月中村座にて演ぜしといふ。こは白子屋お熊なるもの。享保十一年十一月七日其夫を殺し。仝十二年二月二十五日。引廻しの上死刑に處せられたる事蹟を。仕組めるものにて。城木屋の段丈八の語に。

アヽ白い子じや。白子じや。アリヤ城木屋じやない。白子屋のお駒じや。

といへるも。そをほのめかせしなり。

江戸日本橋の通りに。八百八町に知れ渡れるしにせの吳服店。白木屋あれば。それに心づきて。白子屋を城木屋として。材木店とし。

お熊はあまりやさしき名にもあらねば。お駒としたるなるべし。しかして表題を。戀娘昔八丈。番頭の名を丈八などしたるは。吳服屋なるを思ひよせたるにもあらん。委しき事は。東京移住の後ならでは。取しらべ得ず。

戀娘昔八丈
城木屋の段

「いふも更なる」　いふ迄もなく、
「人の心も國がらに」　江戸は天下の膝元、人の心も廣く國亦廣し「自然と廣き武藏野の」とつゞけ「月日も繁く立つゞく家居」といへり、武藏野は、江戸をかけて數ヶ國に亘れる、廣き原野にして月の名所、されば和歌にも「夕立の空より廣き」とよみ「草より出でゝ(月)草に入る」と詠ぜり、これにて明かなり、
「百萬石も痃癖も」　貴きも賤きもの意。百萬石は大なる大名、痃癖は按摩と見てよし、前に解せり、
「金のなる木の植所」　繁花の樣よくいひたり「金の

城木屋の段

いふもさらなる繁花の地。人の心も國がらに。自然と廣き武藏野の。月日もしげく立つゞく。家居隙なく諸國から。入込む人と出る人と。出家侍諸商人。百萬石も肩癖も。蹉跎たる繁昌は。金の生る木の植所。角引廻す家立や。所久しく住馴れて。人の思はく身躰も。堅い商賣城木屋と。門に印の杉ならで。軒に並ぶる材木は。幾年經りし仕にせなり。主庄兵衛は日外より。引籠つたる目の病ひ。店を預かる丈八が。もたれかゝつた帳箱に物躰付ける番頭顏。詞「コリヤ小僧よ。通り町の尾張屋へ往て。けさの小割と貫十挺の代金。只今遣はされませと。此書附持つて請取つて來い。又芝居へ這入つて居るな。アイ〳〵合點と云捨て。とつかは急ぎ走り行く。跡には一人丈八が。めつたむし

なる木」は搖錢樹といふ、三國志に見ゆたる、邴原の故事より出でたりと、後にいふべし、

「門に印の杉ならで」　城木屋をうけて書く、大和の三輪明神に印の杉あり、古今集に見ゆたる「我庵は三輪の山本戀しくばとむらひ來ませ杉たてる門」の歌を三輪明神の詠と云るより起る、委くは妹脊山に云べし。

「仕にせ」　ふるき店、

「小割、貫き」　引割りし木の名、

「脂首傾け思案顔」　よくいひたり、

「思ひ内にあれば色々」　といへり、論語に「思ひ中にあれば外にあらはる」とあるより書く、

「思ふに別れ思はずも」　調あり、

やうに飲む煙草。がん首傾け思案顔。思ひ内にあれば。色々勝る憂思ひ。屋敷の勤いつしかに。思ふに別れ思はずも。呼返されし親の内。今宵の事の氣にかゝり。若其人の來よかしと。表の方へ立出る。姿ちらりとお駒樣〳〵。詞申しちよつとこちらへお出なされませ。アヽ今夜は聟樣がお出じやげにござりますな。へヽヽヽ。嘸お嬉しうござりませうな。アヽほんにやれ〳〵あたおめでたい。アヽあたいま〳〵しい事でござりますわい。アノまあほんに嬉しそふな顔わいの。エヽ丈八の何いやる。わしやそんなこと聞たふない。耳が穢らはしい。聞えませぬは父樣かゝ樣。わしが心にどの樣な。義理約束が有ふやら。間談合も有る事か。事を好みしなされかた。斯云ふ事を露程も。しらせたい聞せたい。どふせうぞいのどふせふと。目には涙の玉あられ。我身に請けて丈八が。首筋元からじいはじは。じは〳〵

「お出じやけに」　お出じやさうに、
「わしが心にどの樣な云々」　箱根靈驗記に「わしが心にどの樣な、深い望みがあらうやら、たつた一言どふせうと云々」
「涙の玉あられ我身にうけて」　ありがたくうぬぼるゝ樣、面白くいひたり、
「吾は包むとおもへども云々」　包めど外に顯るゝをいふ、古今集に「花すゝきわれこそ下におもひしか穗に出て人にむすばれにけり」
「申し〳〵地藏樣へ云々」　親類付合の賴み方、頗る上出來、
「心中立」　は相手に心の信を立つるをいふ、委しくは前に解せり、

〳〵。詞ハア、われは包むと思へども。ほに顯はれしか。ヘエ是はしたり。マ面目ない。詞是迄も幾度か。モウ云はふか〳〵と。口迄はぞろ〳〵出たけれど。云出しかねてをりました。どふぞお前に夢になと。しらせたいと思ふから。詞マア〳〵番頭樣共云れる身が。コレ淺草の地藏樣へ。七日が間はだしまいりを致しましたはい。ヤ申し〳〵地藏樣エ。わたしが因果でございます。何卒此戀叶ひます樣に。たつた一度でよございます。ガ又モ。少々は半分でも堪忍致しますると。一心かけて願ふたら。サア地藏樣の御利生といふ物は。イヤモウとんともあらそはれぬ物じや。おまへ樣が私にそれ程心中立。今夜の聟がいやじやとは。コレ嬉しいぞへ忝いぞへ。コレわたしやさつきにから。手を合して拜んで斗りをりますはいな。ヱヽ何のこつちやぞいの。なんのそなたにあほらしい。わしが立るはついこゝら

「やつばりおれじやく」 うぬ惚の底知れず、

「ないもせぬ」 ありもせぬ、

「商賣の杉丸太が云々」 何の事やら、

「きよとい」 けうとい、俗に豪氣といふに同じ、

「白子屋のお駒じや」 總解にいへる如く、白子屋お熊の事を、有名なる白木屋に當てゝ書けるなればこゝにほのめかせるなり、

「手譽め、自惚れ」 語面白し、

「仕かたしすまし顔」 調あり、

「業藝は實に剃刀の刃を渡る才三」 剃刀の刃を渡る

に。エヽついこゝらに〳〵。エヽやつばりおれじや〳〵。おれより外に誰も男はないもせぬ物。コレ年來日頃云こそせね。お前の顔を見る度に。商賣の杉丸太が。イヤモほんにマ。朝から晩迄立續じやわい。夫に又近所の若い者の噂にも。アノ城木屋の娘はきよとい物じや。あいつはマア脊はすらりと高し。器量はよし。色はくつきりと白し。アー白い子じや。白子じや。アリヤ城木屋じやない。白子屋のお駒じやと云やんすぞへ。マお前それ程に仇名する評判娘。そつちからも氣が有るとは。エヽ忝い有難いと。めつたむせふに嬉しがり。手譽うぬ惚れ有頂天。詞「丈八殿〳〵。おかみ樣が召ますと。呼立られて。詞「ヲイ〳〵。エヽとんをモどんな事では有るわい。コレお駒樣。まだ云殘した事が有る。後に〳〵と目と仕かた。しすまし顔で走り入る。お駒も胸へさしのぼる。癪を押へて奥へ行く。業藝は。實に剃刀

如きあぶなき髪結のすぎはひと、刄を渡る如き才あるとをかれて書く、此語あり

「月代」　代は白の假字にて、月白と書くが正しといふ、剃りたる跡月の如く、圓く白きゆゑの稱なり、さかやきとよむは逆息（さかいき）の轉にて、逆上の息をぬく意なりと、

の刄を渡る。才三も今は主親に。捨られ果し髪結の。一日所定らず。忙がしそふにちよこ〳〵走り。下女のお菊が手に持つた。三方拭〳〵。詞「コレ髪結殿。小僧殿を呼にやつたに。つい來てくれたがよいわいな。サア直にさんじませふと存じましたが。お向ふの稚の月代。何が彼例の髪おしみ。漸〳〵しまふてたつた今。ハアそふして旦那には。どつちへぞ。お出なされますのでこざりますかへ。イヤどこへも往きやなされぬが。今夜こちのお駒樣に。聟樣が這入ゆゑ。大抵忙がしい事じやない。エヽ。ナヽ何とおつしやります。今夜内かたのお駒樣に聟樣が。アノそりやお前ほんかへ。ヲヽ此人わいの。何の其やうに。恟りする事が有るぞいの。ヤほんにお駒樣もこな樣に。顔が直してもらひたい。早ふ呼んで來てくれといふてゞあつた。ドレしらしませふと入にけり。見送る才三が思案顔。詞「ハテ合點の行かぬ。是

「世話」の語は、もとせばしのせはに當てたる借字なりと、

「世の中の變り易いは人心」古今集に「色見にでうつらふものは世の中の人の心の花にぞありける」白氏文集に「行路難不レ在レ水不レ在レ山、祇在二人情反覆間一」

「譯も涙に綾もなき」無闇に泣くをいふ、

迄のお駒が深切。浪人の身を色々と。世話してくれた心ざし。それに今夜の聟入は。ハア、こりやとふから。性根がくさつて有るわい。ヱヽそふいふ事とは夢にもしらず。だまされたが口惜しい。もふ此上は破れかぶれ。いふて〳〵云やぶらふか。アいや〳〵〳〵。大事をかゝへた我身の上。アヽ兎にも角にも世の中の。かはり安いは人心。ハテどふがなとゝつ置つ。胸はもや〳〵立つ居つ。お駒は下女がしらせをば。聞と心は飛立ど。そらさぬ顔に一間より。詞「ヲヽ髪結殿。さつきにから待かねて居たわいのと。跡先見廻し。詞「才三様。ヘェ逢たかつた〳〵。逢たかつたと取すがる。譯も涙にあやもなき。取て突退けにらみ付け。詞「何じや逢たかつた。何のまあ己がおれに逢たかろ。今夜聟のくる事も。何も角も聞て居る。云譯も何も聞ぬぞ。見さげ果た畜生め。犬め狐め狸め。よふ人を妖したな。物をいふも

「戀のいろは」　初戀の艷書（ふみ）をいふ「戀のいろはの色はじめ」

「そつと私し（渡し）が心では」　とかけたり、

「天神樣」　の愛樹は梅、故に此神に願をかくる者は梅を斷つ、菅原傳授の總解を見よ、

「しらせまし」　しらせ申し、

「たゝいて腹が云々」　おぼこ娘の情よく見ゑたり、阿波の鳴門揚屋の段に「たゝいてお腹がいるかいな」

穢らはしいと。胸ぐら取つて引しやなぐり。踏づ擲いつ突飛し。にらみ付たる目に涙。お駒は顏をふり上げて。詞思ひがけない今宵の樣子。聞しやんしたら腹が立と。嘸憎からふ去ながら。そりや聞えませぬ才三樣。お前とわしが其中は。きのふやけふの事かいな。屋敷に勤た其中に。ふつと見初めて恥かしい。戀のいろはをたもとから。そつとわたしが心では。天神樣へ願かけて。梅を一生斷たぞへ。其お蔭やら嬉しい返事。二世も三世も先の世かけて。誓ひし中じやないかいな。今宵の事をしらせまし。問談合もせふ物と。待かねて居る物を。餘りむごい愛相づかし。擲いて腹がいるならば。心任せにした上で。もふ堪忍をしてやると。いふて堪能させてたべと。男の膝に縋付き。餘所を憚る忍び泣き。眞實見えていぢらしゝ。才三も今さら手持なく。詞そふいふ事で有らふとは。おれも思ふて居たれども。

今夜聟がくると聞き。腹の立たもそなたが可愛さ。我迚も此樣に。姿をやつし苦勞をするも。紛失の茶入をば。尋ね出したい斗り。といふて。何所を尋る當途もなし。それ故にそこ爰と。所をかゆる町髪結。何から何迄そなたの世話。眞實な氣はしつて居る。ヤもふ堪忍してたもこらへてたも。コレ人が見りや惡い。ヤサ泣顏仕やんな。泣きやんなと。背撫按れば娘氣の。そんなら疑ひ晴たかへ。ヲヽ嬉しやと抱付き。わりなき中ぞ睦じき。奥の障子をそろ〳〵と。探り出たる親庄兵衛。詞「藤七殿〳〵。來てじやないか。ヲヽ太儀々々。アヽ晩にはちつと客も有り。月代が刺てもらひたい。ソレ娘よ湯を取つて來てくれと。何氣なければ氣味惡く。うぢ〳〵もぢ〳〵手盥に。汲でくる間に刺刀を。合す目と目に見えわかぬ。親は白髪の月代と。俱に氣をもむ顏と顏。云たい事も口なしの。離れがたなき二人が心。詞「サア

「腹の立つもそなたが可愛さ」 憎くて叱る者はない

「泣きやんなと背撫でさすれば」 すれて泣かせて機嫌を取るは、戀のならひ、

「剃刀を合す目と目云々」 緣の語とかけ詞とにて書下せり、注意すれば自ら味ひ得べし、口なしの實は、かれても離れぬもの、

「ろく〳〵に」　滿足に、ろくはまろく(圓)のまた省きたる語なる由、前にいへり、

「お手討と極つた」　不義はお家の御法度、

「娘に我れを娶合せて」　此以下伊達娘戀緋鹿子（八百屋お七）に似たり、恐くはそれを本にて書けるなるべし、川柳に「仕合で娘の供もした亭主」

マア〳〵髭もよいわ。あたまはどふなとたばねて下され。ヤコリヤ娘よ。ついでながら。ちよつといふて聞す事が有る。コヽ爰へこい〳〵。扨マアろく〳〵に得心もさせず。今夜の聟入。親がいの無理我儘と。定めて恨んでも居やうし。又若い者の事じやによつて。ヱなんぞ斯う。そこらに。むつちやくちや〳〵とした事も有る物じや。けれど爰をよふ。ヤ髪結殿。こな様も傍に居るふせうじや。ちつとの間じやと思ふて聞て下され。元わしも腹からの町人でもない。去おやしきに勤て居たが。若い時の前後なし。色と酒とにつかひ果し。お手討に極つたを。御主人の若旦那御誕生のお祝ひに。奥様が命乞で。何事なふお暇下され。トントモ。それからほう〳〵流浪の中。縁でがな此家へ手代奉公。前の親旦那が。不便をくはへて下さつて。ヤ何コリヤ。跡をやる男の子迚もなければ。幸ひ娘にわれを娶合し。

「位牌所」　家をいふ、

「身を粉に碎いて」　粉骨碎身、

「内瞳」　眼病の名、前にいへり、

「左り前」　不運になるをいふ、

「分限」　は丸持をいふ、前にいへり、

「諸埒も付いた」　方をつけるをいふ、

此家督を讓る程に。隨分商ひ精出して。位牌所を潰さぬやふに。又娘が事賴むぞよと。他人のおれに身上を。ぽつかりとくださつた大恩。アノそちが母は女房とはいひながら。マヽおれが爲には。アリヤ大事のお主樣じや。おのれやれ遺言の通り。家に疵は付まいと。身を粉に碎いて精出しても。サア時の天災は遁れぬ。此前の大火事にころりと丸燒。あつちこつちする中に。引負にあびかけにはとられ。其上五年前からナ。コレ目を煩ひ。とう〳〵内瞳といふ物に成て。何から何迄左まへ。問屋の仕切も不埒に成り。ア是はマどふせふぞいと思ふた所。アノ今夜くる喜藏と云ふは。元はしらぬが近年の出來分限。講釋場でつい近付に成てから。念比にしてくれて。マヽ問屋の諸埒も付たがよいと。金ほり出してくれた其時は。アヽ若い人じやが。テモ深切な人も有ば有るものじや。マ何角はしらず忝いと。悅んで

「のつぴき」　のきひきの音便、

「いら立の催促」　いらだちての催促、

「親旦那のお位牌へ」　これ町家に於て最もかたき義。

「水の流れと人の行く末」　如何になり行くか分らぬをいふ語、前にいへり、

居るやさき。おれを竊に内へ呼でな。斯身を入れて世話するも外ではない。そちの娘お駒を女房にもらひたいと。のつ引ならぬいひかた。いやと云や金戻せと云じやわい。モどふも仕やうもなく。マヽヽ心得たと突延し。一寸遁れにだまして置いて。其内にはおのれやれ。金濟してと。思ふに任せぬ世間のふけい氣。此月の差入から。金を戻せといら立の催促。エ何のべちに。いつそ此家屋敷諸道具も賣代なし。親子三人着のまゝ。出て行ふとは思ふたが。サ爰をよふ聞いてくれ。あの女房を路頭に迷はしては。過行れた親旦那のお位牌へ。どふも顔が逢されぬ。マせつない所じやぞい。サ其せつない所じや程に。聞分けてコリヤ娘。此親が手を合す。ヨ。どふぞ今夜の所を。機嫌よふすなをに。盃してくれいヨ。ヨ　最前ちらりと二人の樣子。サ聞たでもなし。又聞ぬでもない。水の流れと人の行く末。お歴々

「お歴々」　身分ある者をいふ、歴ばきはだちあらはるゝ意、これより出でしなるべし、

「からまる胸」　百千筋をうけて書く、

「いらへもないじやくり」とかけたり、

「一言が百千萬の憂思ひ」いふにいはれぬなるべし、

のお方でも。賤しい業をするも。コリヤ辛抱一ッじや。皆おりやよふ飲込でゐる。いやじや有らふ。いやじや有らふと察して居るが。爰又一番親が頼みじや。ヨコリヤ娘。どふぞ辛抱してくれと。義理と恩愛百千筋。からまる胸の白髪の親父。耻も厭はず見えね目に。餘る涙の勞はしさ。娘は始終聞に付け。勿體ないとは思へども。思ひ切れぬ身の因果。何といらへもないじやくり。才三郎も俱涙。詞「事を分けておつしやる事。一ッは親御へ御孝行。お前様の心の内はナ。呑込んでをります程に。マアあいとおつしやりませ。サア〳〵申し。サヽヽヽ。アイ〳〵と一言が。百千萬の憂思ひ。身をふるはして。むせび泣き。詞「ナヽ〳〵。よふ得心してくれたな。イヤモ嬉しい〳〵。アヽ何コレ藤七殿。こな様もいかい世話でごんす。コリヤ娘よ。親や夫の爲には。勤奉公さへするじやないか。ハテ此金の濟迄の事じ

「先第一朝は持起されて云々」　八百屋お七に「朝も飯の出來るまで寢て云々、小遣も湯水撒く樣云々、まだ肝心はコレ、毎晩背中向けて寢さへすりや云々」これより書けるなるべし、後に出す同段を見よ、

「八百屋お七の狂言」　後に出すべし、

やと思ふてな。盃さへしてしまふたら。夫からはわれが身持次第じや。先第一朝は持起されて。晝時分に起て朝飯を喰。夜は又大勢人寄して。時ともなふ夜をふかし。聟めが云をる事をつべこべ〳〵と口ごたへ。小遣ひ錢は湯水つかふ樣に。どつとゝまきちらし。ソレ忘れても。針やなど手に取なよ。ぼろそ引ずらふがだんないわ。見ぬ顏して居い。そして肝心はあのそれ毎晩々々。ドゝどんな事しをるなら。ぶちのめして置け。おゐどつき付てあちら向て寢りや。なんぼ惚た男でも。愛想つかすは知れた事。合點が往たか。ヨ。毎年する八百屋お七の狂言。二親が片意地から。あつたら娘を火付にして。今の世迄もうき名を流す。アリヤアレ娘子斗りへの見せしめじやない。世間の偏屈な親々にも。手本にせいとの見せしめじやわい。是を思へばお七が親の久兵衛も。定めて何ぞ深い義理。アゝその身にな

「心を思ひやむ（遣）」目より云々」目の縁の語とかけ詞とにて、面白く書下せり味ふべし、諺に「やむ目より見る目」其當人より傍に見て居る者のつらきないふ「うはべには見ねれど見ゆる云々」よくいへり、内瞳は外よりは異常見ねれど、見ねざる眼病、

「無理勿體のむれくそ髷」調あり、むれくそ髷といふは知らず、御教示を乞ふ。

「花聟風のつく（付）だや」とかけたり、いづれ佃島のしろものなるべし、

「此祝言が調はれば云々」

「斯申せば云々」と蹙くりかへして、金の光を鼻にかくる處つらにくし、

らねばしれぬが浮世。髪結殿太儀。娘後にとしほ〳〵と。心を思ひやむ目より。見るめいたはしうはべには。見えねど見ゆる子故の闇。親の心の内瞳やみ。とぼ〳〵奥へ入にけり。見送る目さへ泣はれて。物をも云ず二人とも。抱合ふたる俱涙。理りせめて哀れ成り。表にしげき雪踏の音。人こそ有れと耳に口。後に〳〵と兩人は。奥と勝手へ別れ入る。早黄昏の店さし時。暮ぬ中より箱提燈。立派に出立で細身の脇指。無理勿體のむれくそ髷。花聟風のつくだや喜藏。丁稚が案内に主の庄兵衛。目は不自由でも覺の店。探り出迎ふ饗應ぶり。詞「ヤ是は〳〵舅殿。嘸今晩はお取込でござりませふ。ヤ扨先何角の義。御得心下されれ我等も大慶。此祝言が調はねば。いやながらお取かへ申した金の催促。それでは折角取續いた。此城木屋の家を。潰してしまふよふな物じや。彼是と氣の毒に存じたが。ヤア〳〵今晩の

「萬代不易」　いつまでもうごきなきをいふ、六韜五音に「萬代不易五行之神道之常也」

「互の底に一力味」　喜藏は金、庄兵衛は娘を以て、

内祝言で。物事が丸ふ行くと申す物。斯申せばマ何とやらいかゞなれど。仲人も金。金ずくめにして參る拙者。ア斯申せばいかゞなれど。此城木屋の内には。ちと過た聟樣。ヘヽイヤ。斯申せばいかゞなれど。此喜藏が聟になれば。城木屋の身代は萬代不易といふ物じや。そふではこざりませぬか舅殿と。扇子ばち〳〵身をふかす。むつとはすれど。詞コレハ〳〵叮嚀な御挨拶。そなたからおつしやらいでも。しれて有る借用金。併金の貸かりは相對。金で娘はしんぜぬぞや。とサヽヽいへば物事に角が立つ。マア〳〵夫はほつておいて。座敷へござつて娘やかゝにも。いか樣左樣に致さふと。互の底に一力身。イザ御案内と勝手から。出る手代の丈八が。詞マア聟といふは。コリヤ〳〵〳〵。サヽヽヽコリヤ。いかにも聟は此喜藏。何にもいふな〳〵。ハアこりや何でござりますか。アノ爰なお手代かな。

「呑込みのよさそうな」いふなゝをうけての謎、

「何にもいふ事はない」「何もいふな」喜藏頗るおそれたり、

いかにもこちの番頭。丈八といふ者でござる。ムヽいかさま呑込のよさそふな。サヽヽヽ。コリヤ〳〵〳〵。如何樣呑込のよさそふなお手代殿。ムじやが。マヽヽヽかはつた所であふたなア。ヤア聟殿。何といはしやる。アイヤかはつた〳〵。サ舅殿にかはつて。今から此喜藏が。此内の旦那樣じや。サ此内の旦那じやによつて。是からはおれが見をかけて。つかふてやるは。旦那へ手代が始めての目見え。コリヤ是を祝儀にしつかりと。渡して置くと。内懷から取出す。ふくさ包を手に渡し。詞ソレ祝儀じや。納めておけ。アイヤこれ〳〵聟殿。何も心づかひさつしやるな。丈八ソレよふお禮をいやれ。アヽいや〳〵。禮も何にもいふ事はない。ナ何にもいふな。後にゆるりと舅殿。マア奥へ往て。いかにも〳〵。サア〳〵ごされと打つれて。一間へこそは入にけれ。是送る手代が小首を傾け。詞ハテ扨めんよふ

な。アノ喜藏めは去年の春。吉原で茶入を騙つた仲間内。いつの間にやら。ムテモマアゐらい出世をひろいだな。夫はそふと此包んだ者は。こりやマア何じや知ぬて。ヤアこりや是其時騙つた凱歌の茶入。ムヽマヽ是をおれに渡したは。あいつが素性をいふてくれなと賴の心。ムヽそいつは。マヽいふてくれな。ら云てはやるまい。云ずにおれがだまつて居ると。アノ娘をあいつが女房に。ヤこいつはつぼじや。ハアヽこりやマア〳〵どふしたがよからふぞ。いつそ此茶入の事代官所へ。訴人せふか。イヤ〳〵。マア〳〵おれが身からしてあやが拔ぬわい。こいつはどふぞ能い思案が有そふな者じやが。ヲ夫よ。アノ娘を連れて爰をついとするが上分別。そふじや〳〵と打諾き。暖簾押上げ入にけり。奥は今宵の稀人と。勝手はゞた〳〵膳拵へ。笑ひの聲もつらき身に。傍り見廻し娘のお駒。詞「最前父樣の。事を

「云はずにおれが默つて云々」　丈八戀と欲との二道に迷ふ、

「壺じや」　失敗の時、又罪をかむる時などにいふ、京坂地方の俗語、

「あやが拔けぬ」　身の科になるをいふ、

「ついとする」　かけおちする、

「稀人」　客、まらうど、

「殿御」　前に解せり、

「戀と情と恩愛の云々」可なりに歎けり、

「涙黄になる八丈の」これ黄八丈「振り」は振袖、降りをふくむ、

分てのお詞。娘の私に勿體ない。手を合してのお賴み。才三樣の詞といひ。あいと口ではいふ者の。眞實底からいとしさの。殿御に別れそもやそも。祝言がなる物かいなア。とはいひながら是迄も。一日の孝もなく。大恩有る父樣の。事を分けてのお賴を。背けば不孝背かねば。モ可愛殿御へ道立ず。所詮此身を捨るのが。皆樣への申し譯。お名殘おしいは才三樣。もゝとせ千とせの御壽名過ぎ。必々先の世の。其先の世の末迄も。お見捨なされて下さんすな。又一ッには母樣の。わしが死だと聞てなら。嘸や恟りさしやんせう。一人娘を是迄に。朝な夕なのいつくしみ。お歎かくる不孝の罪。お赦しなされて下さんせ。名殘おしやと奥の方。勝手の方をながめやり。戀と情と恩愛に。三すぢ四筋に落かゝる。涙黄になる八丈の。振の袂のあやもなき。詞「娘〳〵どこに居やると。行燈提げて母の聲。アイ〳〵爰にも

「うすぐもる顏の時雨の云々」　一寸よくいへり、

「家の娘故自由にすると云々」　大阪の町家などにては、家付の娘なりとて威を振ひ、親も之を當り前の事として、敢て咎めぬは往々見聞する所なり、これ親の心得違ひにして、頗るいまはし、速に家庭を改めて可なり、

「こゝばかりに日は云々」　何處にも住み得るをいふ、

うすぐもる。顏の時雨を押包む。詞ヲヽ是はしたり。マくらい所にたゞ一人。何をして居やるぞいの。イヤコレお駒やさつきには。親父殿がいはしやるのを。立聞して聞て居たが。ヲヽよふ得心をしやつたのふ。屋敷の勤めの其内に。何やかやもや〳〵と。譯の有る事も知つて居る。そなたを產だ親じやもの。夫程の事しらいでは。先のお方はお歷々。今の落目を貢ぎやるも。女の操出かしやつた。アしたが。昔氣質な庄兵衛殿。聞きやる通り元は此家の奉公人。わしは家の娘故。自由にすると思はれては。エヽどふも濟ぬ。定めてつらい悲しい。いつそ死でしまはふと。ナ若い氣では思ふ事もある物じやが。そりやわがみ短氣でござらふぞや。コレ爰ばつかりに日はてるまいし。何國の浦へも身を忍び。思ふ人と添とげるが。マ眞實誠といふ者ぞ。必々どんな事して。憂目を見せてたもんなや。同じ思ひをかけ

「同じ思ひをかけるなら云々」これ何ともいはれぬ親の慈悲。

「疼癖」は肩のこりをいふ、

「後へ親の裏表包む慈愛に云々」味ひあり、慈愛の鍵を包む、後に明なり、

「しめぢが原のさしもぐさ」しめ〳〵の調をうけて書く新古今集に清水觀音の御歌とて「なほたのめしめぢが原のさしもぐさわれ世の中

るなら。達者で健でながらへて。思ひをかけるが親孝行。詞「合點が往たか呑込んだか。是さへ合點が往たならば。わしが案じは少しもない。ア丶とんともふ宵から何やかや。氣あつかひでつう肩がはつて。アイタ丶丶丶。ヲ丶痛やの〳〵。エ丶そりや申し。お前早肩癖とやらじやござんせぬか。アノお醫者樣でも呼ましよか。ア丶いや〳〵。コレそれ程大そふな事でもござらぬ。こりや灸したらついなをる。ヤ太儀ながらそんならそなた。一ッついすゑてたもらぬか。アイ私でも大事なか、ヲ丶大事ない〳〵。ソレそこのかけ硯に艾が有ふ。アイと取出す其際に。帶くつろげて着物を。後へ親のうらおもて。包む慈哀の有がたさ。娘はなみだしめ〳〵と。標茅が原のさしもぐさ。詞「サア申し母樣。よふござんすか。ヲ丶夫跡の付て有る所へ。どこでも大事ないすゑてたも。コレ娘や。今わがみの一生のかはきりじや程に。必

にあらんかぎりは」さしもぐさ（灸）をすうるにあたりて、母の慈悲を觀音の慈悲に比して、此詠を引く、頗る上出來、

「けれう」　よしんば、

「ふところ子」　世間見ずの子をいふ、毛吹草に「外しらぬ雉子や山のふところ子」

「今迄のやうに子供の氣では云々」　娘の嫁する時など母必ずこれをいふべし、

「印籠」　もと印を入るゝ

くよ〳〵思ふて。煩はぬ樣に。ヲヽアッ〳〵〳〵。ヲヽあつ。ヤほんにわしが前にさげて居た。鍵の入た巾着。アイこちらへ廻てござんす。ヲヽよし〳〵。けれう娘なりやこそ大事なけれ。其巾着は金戸棚の鍵。それさへありや。ナ路銀は自由といふ樣な物じや。斯して灸をすへて居ると。後では何をするやら。一ツも知れぬ。ヲヽアッ〳〵。ヲヽあつ。此あつい中に其鍵をば。エヽほんにマヽどんな子では有るわいの。又逢ふて一言賴みたい人も有れど。それではどふも世間が濟ぬ。もしも誰ぞに逢つたら。世間見ずのふところ子。何も角もたらぬがち。惡い所は了簡して。見捨てやつて下さるなと。よふマ賴んだといふてたも。詞「今迄のやうに。子供の氣では濟ぬぞよ。水もくんだり飯も焚たり。夫の出這入諸事萬事。むつまじうくらしてたも。」詞「これ此印籠には氣つけもあり。黑丸子も入てある。忘てもく。

もの、今薬籠の稱となる、委しくは前にいへり、
「黒丸子」　薬の名、
「いぶり」　すれるをいふ
「きずい」　氣隨と書く、氣まゝに同じ、
「涙もあつき情のやいと云々」　母が情のいさめの、身にしみ渡るを、すうるやいとにかけていふ、段中の名文なり、味ふべし、
「袋にもあまる涙」　ありがた涙何に包まん、

毒なものやなどくやんなや。今迄母にあまへたやうに。いぶりおこして氣ずいもの。我まゝ者と見はなされ。うろたへてくれるなと。するの末迄つど〳〵に。殘る方なき母親の。涙もあつき情のやいと。するる我身にしみ通り。有がたいとも忝いとも。いふに云れず後から。伏拜み〳〵。いたゞく腰の袋にも。あまる涙ぞ道理なる。詞「ヤ、もふよいぞや。何から何迄合點がいたそふなで。嬉しい〳〵。わしが替りに門へ出て。コレ山見ておじやと詞數。云ぬは胸に一ばいの。涙かくしてふりかへり。見かへりながら入る姿。何にも申し上ませぬ。忝い有がたい。母のお慈悲と伏拜む。始終を聞て立出づる。詞「ヤア才三樣か。今の樣子を殘らず聞た。只忝い母の恩。サイナわたしも死ふと迄。思ひ詰たをお情で。此鍵迄下さんした。サア〳〵早ふ此内を。イヤ〳〵。此分では連れて退れぬ。子細は斯と耳に口。詞「ヱ、

そんならあの喜藏といふは。シイ。コリヤ聲が高い。慥に茶入の盜賊と。思へどかはる形格好。うかつには詮義もならぬ。幸そなた奥へ往て。色にかこつけ懷中に。詮義の種も有るならば。夫をひそかに合點か。お家の爲おれがため。偏に賴むと餘義なき詞。何事もみなお前が大切。成程急度詮義の種。ヲヽ我ひそかにうかゞはん。かならずぬかるな合點と。才三は勝手へ身を忍ぶ。奥からぬつと丈八が。詞「お駒樣〳〵。ヲイ〳〵〳〵。モヽヽヽさつきにから。逢たふて〳〵ならなんだ。幸あたりに人はなし。コレ此隙に連れて退き。野の末山の奥でなと。二人ひつそりくらしましよ。おまへを女房にするならば。たとへからだは括られて。引まはしにあふ迚も。だんない〳〵大事ない。ヱヽ此人わいの。なにいやる。わしやどつこへも行く事いや。ムヽウ何じや。何所へも行く事いやじや。ハアヽそんならやつ

「野の末山の奥云々」　俗諺に「主と二人でくらすなら、たとへ山中一軒家云々」

「引まはし」　昔罪人は、市中を引まはして刑に處す、

「旦しう」　は旦那、旦しう何しうなどいふしうは、尾州侯紀州侯などいふ州にて、もと至極の敬辭なりといふ、

「跡腹やまぬ」　跡のいたみにならぬをいふ、産より出でたる語か、

「のまんすな」「のみ込み」相應す、

「女の操をば捨てゝ」　身をけがす積りにて行くをいふ、

ばり此内で。おれを旦しうにする氣じやの。ムヽそんなら待んせ仕やうがある。いつそ聟めをころりといはせ。誰憚からずおまへと女夫。エヽコレ何をきよろ〳〵しなますぞ。かうなれば〳〵。今奥へいて何氣なう。マア寢所へいて盃事。其酒に毒を入れ。あいつをころりとやりさへすりや。跡腹やまぬといふものじや。一走り生藥屋で。何でも毒を買ふて來る。それを必ずかん鍋へ。忘れておまへ飲まんすな。どりやいてこよふと。表の方。一人のみこみかけり行く。何をいふのも氣はそゞろ。夫の爲めと帶引しめ。心をかため奥の方。行くは女の操をば。すてゝ一間へ入りにけり。

鈴が森の段

「名にふりし鈴ヶ森」　名にふりしは古くより名に立つ、鈴にふるといふ縁の語

鈴ヶ森は品川と大森との間にありて、昔罪人の仕置場

今屠牛所となる、

「穢の役人」　仕置の役人をいふ、

「哀れ見に寄る諸見物」　よくいひたり、これ程哀れな見ものはなし、皆泣きに寄るなり、

「以上四度見たが云々」　美人は罪人になりても此德あり、以上は〳〵ての意、

「丙午じやあるまいし云々」　丙午の女は其夫を殺すといへるより書く、別記を見よ、

「間女房」　間男に對す

鈴が森の段

急ぎ行く。人の身の捨所とや名にふりし。鈴が森の仕置場所。青竹にて矢來を構へ。邊りに閃く拔身の槍。穢の役人馳違ひ。科人今やと待懸しは。此世からなる地獄の責。忌はしくも又恐ろしゝ。あはれ見による諸見物。彼處や此處に立集り。詞「ナント此科人も。最う來さうなものじや。俺は牢屋を引出すと直に。通町へ駈拔け。夫から河岸へ廻つて。以上四度見たが。扨美しい娘。彼をころりとやるといふは。可惜らものじや無かいの。イヤ〳〵。何程顏は美しうても。心が鬼じや。丙午じや有るまいし。男を殺すといふ事が。何處の國にかあるものじや。アイヤ〳〵。爾う一圖に云はしやんな。女が男を殺すとは。モよく〳〵堪忍の成らぬ譯。間女房事であらうも知れぬと。噂とりど

「水の茶屋」　此茶屋ありしなるべし、明治生れには分られば、問合せて委しく記すべし。

「子を思ふ闇より闇に云々」　只さへ盲人の庄兵衛が、子故の闇に迷ふもかなし、

「現ともなく走るとも夢路なを」　よく書きたり、誰れの親も此心地なるべし、

り口々に。餘り待つたで寒なつた。サ水の茶屋で一杯せう。サア〳〵ござれと打連れて。皆々彼處へ走行く。子を思ふ。闇より闇に目も分かず。只さへ暗き父親の。手を引き妻も諸共に。涙に見えぬ道筋を。現とも無く走るとも。夢路を歩む心地して。やう〳〵彼處へ辿り着き。見れば嚴しき竹垣に。さも恐ろしき拔身の槍。あれで我子を殺すかと。思へば氣も消え心消え。わつと斗りに泣出す。詞「コレ〳〵嗚。此處がモウ鈴が森か。今の和女の泣聲は。モウお駒は殺されたか。コレ〳〵早う聞して下されと。云ふもうろ〳〵急切つて。問へば女房が涙聲。詞「イエ〳〵。未だ娘は來やせぬけれど。嚴しい攝を見るに付け。可愛い娘を殺すかと。思へば胸も張裂く苦み。私は身も世もあられぬと。歎けばいとゞ父親は。詞「ヲヽ道理じや〳〵〳〵はやい。今朝も門を引れると聞いた時。駈出て逢たうは思ふたれど。近

「お宗旨の彌陀如來」　只一心に一向にといへるを見れば、一向宗（門徒）なり、次解を見よ、

「雜行じやと思召し」　一向宗は彌陀一向專念の宗旨にして、他の神佛を信ずるを雜行といふ、改悔文に「諸の雜行雜志自力の心をふり捨てよ、阿彌陀如來此度の

所の衆に留られて。内で泣いて斗り居た。今日が親子一世の別れ。切て最後の暇乞。又一ッには娘めが。云たい事も有るならば。聞いて迷が霽して遣りたさ。お主の爲とは云ながら。花のやうな子を殺す。俺が心を推量しや。詞「おりやまだ以前のお主へは。忠義とも思はふが。和女は嘸や悲しうて。此庄兵衛が憎かろう。堪忍してたもコレ女房共。日頃念じ奉る。お宗旨の彌陀如來。只一心に一向に。賴を懸ける驗には。此世から助けるとの。誓は嘘か僞りか。詞「這樣事知つたら。あらゆる神や佛樣。御信心申したら。些とは利生も有らうもの。外の佛へ願懸けたら。雜行じやと思し召し。娘を救ふて下さるまいと。如來樣ばつかり。念じて居たのが悔しい。未來は奈落へ落つるとも。娘が命助けたい。詞「何卒娘を助けて下され。南無如來樣殿奴。恁う云ふがお腹が立たば。何卒娘が助るやう。お慈悲じや願上ま

我等が一大事の後生、御助け候へと一心一向に云々」「奈落」は地獄の梵語、前に解せり、「南無如來樣殿め」此場合此愚痴出づべし、これ情の極、「待つ甲斐も情けない」とかけたり、「病煩ひで殺してさへ云々」病死は定業、尙然り、まして非業に於てをや、哀の又哀悲の又悲、「蝶よ花よと撫し子」最愛の子といふ意、蝶よ花よは、女子を愛育するにいふ語、今は男女に通じて用ふるものゝ如し、又撫子を愛子にたとへたる歌文多し、「氣もそゞろ」有頂天、「正體も涙先立つ」とかけたり、

すと。愚に歸つたる親心。母は猶更正體無く。才三殿が盜まれし茶入とやらが出るならば。助る筋も有らうかと。夫ばつかりを樂みに。今日よ翌よと待つ効も。情無い今日の今。死ぬる娘が心の中。思遣つて可憐しい。病煩ひで殺してさへ。子を先だてる親の身は。悲しうて成らぬもの。蝶よ花よと撫でし子を。科人にして殺すとは。よく〳〵前世の因果かと。狂氣の如く身を悶え。夫婦手に手を執交し。絶入り消入る憂涙。餘所の見る目も哀なり。折もざわ〳〵諸見物。そりや科人がモウ爰へ。そりや〳〵來るわと立騒ぐ。聞くに二人は氣も漫ろ。ヤア最う娘が引れて來るかと。立上つては撞と伏し。起きては轉び正體も。涙先だつ斗りなり。跡をおひ〳〵下女男。詞ヤア旦那樣。おかみ樣。歎きはお道理去ながら。お怪我が有つては猶大事。マア〳〵お出と手を引いて。暫く傍に介抱す。思ふ事叶はねばこそ

「戀と義理との諸手綱」よくいひたり、諸手綱の語下のお駒にかゝる、「かゝる憂身の縛り繩」かゝる、縛り繩、緣の語、「屠所の羊の歩」　死に近き行く歩みをいふ、佛典より出でたる語、前に解せり「觀念」　あきらめの意、

「心でかゝる身の罪科」心最もおそるべし「傀儡師胸にかけたる人形箱佛出さうと鬼を出さうと」

「御見物樣何れも樣云々」此倫理の說法は、釜淵雙級巴釜入の段より書けるなるべし、同段に「御見物樣いづれも樣、親殺しも人達へ

憂事の。戀と義理との諸手綱。不愍やお駒は夫の爲。斯る憂身の縛り繩。顏差入れる懷を。洩れて流るゝ涙ばし。首に懸けたる水晶の。珠數の數さへ消えて行く。屠所の羊の歩より。果敢無き身ぞと觀念し。力無く〳〵引れ來る。代官堤彌平次。お駒に向ひ。詞「最前屋敷にて。役人中申し渡されし如く。仔細ありとは云乍ら。假にも夫を殺したる科は遁れず。重き刑にも執行るべきを。お上のお慈悲を以て。死罪に仰付らるゝ。難有く存じ奉れと。云渡せば顏を上げ。詞「何事も皆私が。心でかゝる身の罪科。露些少もお上へ對し。お怨は御座りませぬ。有難う存じますと。覺悟極めし健氣さを。不愍と見遣る諸役人。涙紛らす斗りなり。お駒は顏を振上げて。詞「御見物樣孰れも樣。夫を殺す大罪人。嘸憎い奴大膽者。淫奔娘と皆樣の。お憎しみも有ろうけれど。云ふに云れぬ譯有つて。夫殺しの科人と。死恥曝す

云々、面々我身を手本ぞと云々」第五篇に出でたれば見合すべし、

「此世からなる劔の山」刑場に刄の錆となるをいふ、劔の山の事は前にいへり、「二世の契り」「一世と限る」夫婦は二世親子は一世

「娘が顔も嘸痩せたであらう」此場合此あどなき語を吐く親心、あはれ身にしみて覺ゆ、

身の因果。不愍と覺し一片の。御回向頼み上まする。詞「世上の娘御様方は。此駒を見懲めと。親の許さぬ淫奔など。必ず〳〵遊ばすなェ。可愛い夫へ義理立てれば。兩親に歎きを懸け。又親々に從へば。云交した夫へ立たず。果は恁うした淺ましい。此世からなる劔の山。身を切裂れ浮恥を。曝すも定まる因緣づく。約束事と諦めても。二世の契の其人と。一世と限る兩親の。若しや群集の其中に。見えはせぬかと伸上り。伸上りても竹垣の。透間隱れの人群に。目も泣腫れて見え分かぬ。心を思ひ諸見物。濡れぬ袂は無りけり。群集押分け兩親は。竹垣に取付き縋り。詞「コレ〳〵〳〵お駒や。父様も此母も。親子一世の暇乞じやもの。來て居いで可いものかいなう〳〵。コレ〳〵嗚。嘸や此頃の憂苦勞。娘が顔も嘸痩せたで有ろう。何の様にして居る事じや。エヽ顔が一目見たいわいやい。見たいわいやい〳〵。

「目の見えぬが羨ましい云々」　歌祭文野崎の段に「そなたは見えぬが、いつそまし、傍でまじ〳〵見て居る心」。

「お顔が目先にちら〳〵と」　嗚呼戀こゝに至るか、

「前生の敵」　子は三界の首かせ、

「其樣に殊勝らしい云々」　これ親の情、

イヤ〳〵わしやこな樣の。目の見えぬのが羨ましい。みすぼらしい娘が形。見て居る母が此胸は。裂けるわいのと揑と伏し。前後不覺に取亂す。母樣父樣。よう來て下さんした。わしや逢ひたかつた〳〵〳〵。あいたかつたわいな。ヲヽ逢たい筈。道理じや〳〵。親父殿や此母より。猶だ和女が逢たう思やる。アヽこれ〳〵母樣。最う云ふて下さんすな。聞く程戀しい床しいお人の。お顔が目前にちら〳〵と。かたとき片時離れぬわいな〳〵。妾が恁ういふ心から。お年寄れたお二人へ。這樣歎きを懸まする。必ず〳〵泣かずとも。娘でも何でも無い。アリヤ前生の敵じや。憎い奴不孝者と。念斷つて弗つりと。歎を止めて下さんすが。少しは冥土の罪亡し。詞「妾が死んだ其跡でも。必ずくよ〳〵思ふて。煩ふて下さんすなェ。ソレ〳〵其樣に殊勝しい。孝行な事云ふてたもるもの。くよ〳〵思はいでかいのう。

「私が事は是非もなし云々」戀人への遺言頗る用意周到

「淺ましい形を見やしやんしたら云々」戀のおぼこ娘、死後まで此懸念はあるべし、

「音は濱邊に打寄れる云々」鈴が森は濱邊、

思はいでかいのう〳〵。何の跡に片時も生きて居られう。二人ながら追付け未來で逢ふわいのう。アヽこれ〳〵申し。其樣に仰しやる程。妾が身に罪が重る。申し母樣。今のお人が見えたなら。私が事は是非も無し。何卒寶を詮義して。御出世なさるを冥途から。樂んで居ますと。よう云ふて下さんせェ。又彼のお方も若い身の上。何時迄も獨身でも濟まぬ程に。似合な事も有るならば。奥樣を持せまして。其お人をお前方の。眞實の娘じやと。思ふて折々問ひ訪れ。懇にして上まして。詞まだ其上氣に懸るは。私が死んだ跡にても。彼のお人が爰へ來て。淺ましい形を見やしやんしたら。ひよつと愛想が。盡きやうかと。わしや夫ばつかりが悲しいと。今死ぬる身の今迄も。おぼこ娘のあどなさを。思遣りつゝ兩親は。前後正體打倒れ。せき上げ〳〵叫び泣く。音は濱邊に打寄する。波に波增す涙なり。果し

「手向草」の草をうけて折りといひ千草之介といへり、

「疾く〳〵」をうけて解けてといひ、結びし戀娘とつゞけたり「重れ〳〵て黄(着)八丈」とかけ「昔語り」とつゞけたり、これ戀娘昔八丈の表題、

は有らじと、下僕共。時刻移ると引立つる。二人の親は竹垣に。隔てられたる親子の別れ。見物群集は口々に。宗旨々々の手向草。折もこそ有れ千草之介。丈八に繩を懸け。才三郎に引立させ。群集押分け矢來の内。詞「御預の茶入の盗賊。喜藏に紛れ無き由。此丈八が白狀故。再び茶入も我手に入る。喜藏丈八兩人は。我家來才三郎が親の敵。御上へ委細申し上げ。お駒が命の赦免狀。御披見あれと差出せば。彌平次取つて押披き。詞「成程々々。紛無き赦しの趣。親の敵とあるからは。喜藏丈八兩人は。御家來才三の心任せ。お駒は直に兩親へ。御赦免なるぞとありければ。はつと斗りに庄兵衛夫婦。夢に夢見し心地して。悅び涙ぞ道理なる。お駒が繩目疾く〳〵と。解けて結びし戀娘。千代も變らぬ御贔負を。重ね〳〵て黄八丈。昔語を今爰に。傳へ〳〵し筆の跡。座元頭取惣座中。作者を始め一樣に。評判願奉る。

花雲佐倉曙

總解

宗五郎については。緣起類をはじめ。種々なる傳說口碑もあるやうなれども。何分遠隔の地なれば。取調べ心にまかせず。追て東京へ移住の後。詳しく記する所あるべし。其直訴も。將軍家なりといひ。領主堀田侯なりといひ。處刑も。磔刑なりといひ。斬罪なりといひ。一身にとゞまれりといひ。妻子に及べりといひ。其場所も年月も。まち〳〵にて。相違する所あるが如し。兎も角も左に人名辭書の全文を引き置けるが。之によれば。願意もとほらず。世間にて思ふ程の事もなかりしやうにて。古今の大義民に對し。聊氣の毒の感あれば。他日其功績を錄して。面目を一新せしめん事を期せり。されど神社佛閣の緣起をはじめ。坊間の實錄類は。大方作事にして。

信すべきもの少し。

木内宗吾は義民なり。下總公津村の人。農を業とし。代々百餘村の割元名主を勤め。家亦富めり。寛永十九年堀田正盛。下總佐倉城に封ぜられ。十三萬石を賜はる。元來關東の地たる。群雄久しく割據せしを以て。其國其郡に依りて。租稅課役の方一定せず。甲信は武田氏。豆相は北條氏。常陸は佐竹氏。安房に里見氏。二總に千葉氏等ありて。孰れも其遺制を存し。自ら其土地固着の慣習と爲れり。故に天正十八年。家康關東に入部するや。伊奈熊藏等に命じて。租稅の總額を撿覈せしむ。然れども之を精密に行はんには。忽ち人心の動搖を來し。却て紛擾を招くの基なるを察し。且つ新領主をして。務めて懷柔の策を施し。人心を收攬せしめんが爲め。撿地を嚴にせず。悉く舊慣に據る事とせり。其後大政を掌握するに及び。始めて全國總撿地を行ひ。慶長六年より同十六年に至りて竣る。於此貢租課役の方法を一定し。

四公六民の常率を作り。關東諸國は慶長八年を以て。左の如く定められたり。

條々

一年貢米升の事　當納より一俵に付。三斗七升に相納事。

一年貢米一俵に付。口米こぼれとも。二升宛可相納事。

一錢方は永四百文の積に付。同三文づゝの口錢可收納事。

然るに。此口米こぼれ米とも。一俵に付二升づゝの增目と。永四百文の高に對して。永三文づゝの口錢は。從來になき新法なるが上に。撿地以後は。田地の區劃に制を立て。貢租定免を定めたるが故に。何れの郡村も貢納を增加し。夫役を課せらるゝものあるに至り。人民の困難一方ならず。爲めに快く貢納するものなく。幕府も亦殆んど其處置に窮し居たれど。此時大阪に豐臣氏ありて。天下の人心未だ全く德川氏に歸せず。故に暫く貢米の未進を寬假し。後には未進は一

の慣例となりたるが。大阪の役ありて後。幕府天下統一の實を得たりしより。是に始めて諸法度秩序を得。上下の分界正しく。百事其則を超えざりき。而して堀田正盛下總に入部するや。領内の事總べて同一の處置を爲し。前領主の制度は之を用ゐず。新政に法りて着々舊套を改めたり。然るに遺制に泥み居る農民は。頗る此施政に。不滿を抱くに至れり。即ち

第一　貢米桝目の事

幕府に於ては。慶長八年の定めに依り。年貢米は三斗七升。俵に口米こぼれ米とも。二升宛の定めなりしが。其土地の狀況に依りて。四斗俵或は四斗以上をも許されしかば。佐倉は大躰四斗俵なるに。口米こぼれ米とも。二升づゝにて納め來りしを。堀田家にては。そは元來の定なり。百姓の勝手に升目を減じたるにて。不都合の至りなりと。四斗俵の口米こぼれ米とも。二升は三斗七升に對し

たるなれば。殘り三升に對して。右の割合にて增米を入るべし。

第二　撿地の事

幕府新たに。國繪圖を調製するに際するや。堀田家にても領邑撿の爲め。役人を出したるが。前領主土井大炊頭利勝。新田開拓を奬勵し。次に石川主殿頭忠總。松平紀伊守家信等。相替りて所領せしも。新田の貢納を問はず。百性は作り取りの隱田となし居たるを。堀田家は悉く之れが撿地を行ひ。鍬下年期を計算して。直に夫々貢租を割當て。且田圃の制法を正うせり。

第三　貢租怠納の事

從來の代官又は領主が。怠納者に對し。嚴重なる拷問を爲すが如き事を爲さず。嚴しく說諭を加へ。納期猶豫の後。再び怠納せしものは。直に之を捕へ。手鎖を卸して村預となし。其者の資產を沒收し。猶足らざる所は。一村に課して辨償せしむる事となせり。

以上の三個條に反對し。貢租は愈々怠納するに至れり。然るに寛永十九年は。前年凶作の爲め。關東諸國大飢饉となり。三月より五月に至るまで。幕府に於て料所の人民。困窮に陷れるものを賑救し。堀田家も亦大に救濟の方法を講じたりしも。如何せん領民は以上の三事を決行せられ。飢饉後に於ける貢納の延滯。益々多くして。之れが處分の嚴重なりし爲め。所在農民囂々其制度を批難し。領主の苛酷を鳴らして已まず。一揆漸く起らんとするの狀態に迫れり。此時宗吾は領主の新制度を。敢て不可とせざりしかど。增米と貢租怠納處分は。徒に百姓を苦むもの。殊に怠納者の未進額を。村中に辨償せしむるが如きは。實に爲すに忍びざる事となし。如何にもして之れが取消しを願はんと思ひしかど。貢租收納を完了せざれば。理に於て不可なりと。我が割元内なる村々人民の怠納は。悉く之を辨償し。又居村の怠納者は。代償して滯る所なく納付せしかば。爲めに尠から

ぬ資産を失ひたり。宗吾は此の如く人民の疾苦を救ひ。大に爲す所あらんとせしも。他の割元名主等は。毫も顧る所なく。領主の掟を勵行せしより。憤怨の聲喧しく。所在不穩の狀を呈せり。各村名主等。之を見て大に驚き。相共に一同相談合して。怠納處分の沙汰止みを。領主へ出願せん事を圖り。宗吾又之に賛同し。各支配の代官へ出願せしに。其許否を聽かざるに。早くも貢租收納の期となりしかば。人民の周章一方ならず。怠納高村方辨償割付に就きて。復も異口同音に其不當不法を唱へて。頗る紛擾を極めたり。宗吾之を憐み。再び割元内怠納者に代りて。悉く辨償せしかば。家産全く傾き。殆んど朝夕を支へ難き境遇に陷れり。然れども現に百餘村。高四萬石の人民を救ひしことなれば。心毫も之を憂へず。只管願書の裁許を待居たりしに。他の村民等は遂に蜂起して。先づ割元名主の許に押掛けたり。宗吾之を制して。懇々利害を說きて。靜かに願書の許可を待つべきを

諭し。更に各村名主に謀り。百方奔走せしも。農民の憤怨抑ふべからず。辨償割付と。增米俵詰差許しの義とを出願せんと。一同志を決して佐倉へ押寄せんと犇めけり。農民强訴の報。支配代官所に達するや。此は容易ならぬ大事と。直ちに吏員を派して旨を諭し。總代を以て穩便に願立つべしと諭しければ。農民漸く之を承服し。宗吾及び高野村三郎兵衛。千葉町忠藏。瀧澤村太郎兵衛。下勝田村重右衛門。小泉村半十郎等。六人を選出して佐倉に出だし。一同途中より歸村して。一と先靜穩に歸するに至れり。宗吾外五人の村總代佐倉に至るや。郡方役所へ召し出だされ。農民强訴の次弟を訊問せられ。且つ之に同意したるの故を以て。鄉宿預となり。願の趣は追つて沙汰すべき旨言渡され。鄉宿久右衛門へ預けらる。是正保元年十二月の事なり。總代六人は鄉宿にあり。聽許の如何を。一日千秋の思ひして待ち居たりしが。翌年に及ぶも何等の沙汰なかりしかば。宗吾以爲らく。

此は畢竟城代家老に於て願書を握り潰し民意末だ江戸に在る領主の許に達せざるならん(當時堀田正盛は老中職たり)如かず領主に直訴せんにはと竊に其決心を他の五名に打ち明け家人に遺言して窃に直訴の準備を爲たるが五人の名主等兎に角一應の沙汰を待ちたる上にすべしと強て宗吾をして暫らく思ひ止まらしめしが同年二月下旬に至り鄉宿久右衛門より「各々方の願の趣は聞屆なかるべし」との噂を耳にせりと聞くや宗吾は最早躊躇すべき時にあらずと直訴を主張し一同之に加擔したれど郡方役所預けの身なれば濫に出府するは上を輕んずる恐ありとて宗吾は自ら進んで直訴の事たる余の主張なれば我一人江戸に出でゝ爲す所あらん若果す事能はざりし時は請ふ諸君を勞せんと其夜密に鄉宿を立出で江戸へ赴きぬ宗吾江戸に出で先づ町宿に落着き而して直訴せんとせしかど領主堀田の上邸は御城近く殊に役邸のこ

となれば。雜人としては憚りあり。如何せんと心を痛めけるが。其頃將軍家光田獵を好み。堀田正盛之に隨ふ事屢にして。淺草諏訪町の。堀田家下邸に立寄らるゝことあるを聞き。斯かる好機に乘じて。事をなさんと決心し居たる折しも。三月四日隅田川筋。御鷹野ありとの町觸に接せしかば。宗吾の喜び一方ならず。機逸すべからずと。其內情を探りしに。斯かるときは正盛は早朝より下邸に到り。將軍御成に就いての指揮を爲すとの事より。軈て其日堀田家下邸の邊を徘徊し。樣子如何にと窺ひ居たるに。此日や將軍立寄のことも事已みたるにや。正盛の來れる狀態なかりしかば。失望落膽せしも。御成は辰の口より舟にて。隅田川筋へ成らせらるゝ都合なりとの事を耳にし。遺憾一方ならず。熱淚に咽びつゝ。領主の邸外を去らんとせし時。俄に辻番の役人町方の役人など。右往左往に奔走し。通行人を差止めしかば。宗吾は此は御成にやと。傍人に尋ねたりしに。然り。今

日不意に加賀守(堀田)下邸へ。立寄らるゝなりと語り居たる際。正盛は將軍を迎へん爲め。馬を早めて來蒐りたるを認むるや。宗吾は懸命の場合。正盛の馬側に進み出で「御願申す御願申す」と高聲に呼びて。用意の直訴狀を手に捧げ。大地に平伏せり。正盛隨行の士は。此狂人よ。何物ぞと直に取押へて。宗吾を堀田家受持の辻番へ引据ゑたり。斯くて堀田家よりは將軍還御の後。辻番所より宗吾を引取り。强訴の一條を訊ねしに。怠納代償口米輕減の願意採納を歎願せしかば。直に口供書及願書を正盛の許に達し。正盛は追て沙汰すべき事を以てし。宗吾は其身强訴に與みし。吟味中なるに出奔して。剩へ越訴をなしたるものなれば。佐倉に護送して獄に繫ぎ。又各村々の事情を。一々調査せしめたる後。左の如き裁許を與へたり。

一　新田撿地の事。

百姓共難澁を申出づると雖。何時までも無撿地となし置くべき

にあらざれば。取り上ぐべきにあらず。

二　こぼれ米增詰の事。

既に御料所收納米に於ても。何時しか古き御定の格をはづせしとあれば。今更佐倉領に限りて。之を改正せんも如何なれば。一般仕來りの通にすべし。

三　年貢怠納者村方代償の儀。

百姓どもの手前にとりて。聊の割付にて。爾かも相互に助け合ふ儀なれば。村内和熟の基ともなるべしとの處置なるに。反りて難澁とありて强訴にも及ぶ上は。是亦一般仕來の通り申付べし。

此くの如き次第にて。百姓の願意一も貫徹せざりき。而して宗吾は「公津村名主宗吾事。二ヶ年の間配下百姓の年貢怠納を代償したる段。其志尤も奇特の至りなり」との沙汰を蒙りたり。然れども此は内々の事にて。表面は「宗吾事領主の捉を取用ゐず。私の取計を致す段。

其罪一。村々百姓强訴を企て候に。取鎭め方もこれあるべき所。名主役の身として之に與し。右總代として佐倉表へ罷出候段。其罪二。右强訴一件願向吟味中。宿預けの所出奔致し。剩へ御府内をも憚らず罷出で。其上越訴に及び候段。其罪三。是皆公儀御法度に背き。上を輕んじたる仕方。重々不屆の至りなれば。嚴科に處すべきなれど。百姓手前の難澁相救ひ度と。一圖に存じ詰候より。右樣心得違を重ね候儀不便の事なれば死罪に申付け。妻並に女子は御法の通り。奴(とは一戸を搆ふる事能はざる賤民)申付べきなれど。宗吾事兼々奇特の仕方もこれあるに付。憐愍を以て親戚のものへ。引渡し遣はすべし。又宗吾が所持の田地畑地は。闕所申付。家財は妻並女子どもへ取らすべし。扨强訴に與みせし外五人の名主共儀。百姓ども難澁を申立騷立候とも。取しづめ方もこれあるべき所。其儀なく共々騷立候上に。强訴總代と相成。右一件吟味中宿預けの内。宗吾缺落致し候義を

も存付かず。重々不埒の至りなれば。急度申付べきなれど。憐愍を以て重き追放に申付くべし」と言渡され。玆に一件落着し。軈て夫々處刑せられたるは。正保二年八月なり。宗吾此くの如く重刑に處せられたるは。單り一村一家の故にあらず。特に其身大法には悖れりと雖も。奇特なる行爲を行ひしを以て。宗吾就刑の後。七個年を過ぎて正信の代に至り。父正盛の小祥忌を過ごしたるを以て。赦を行ひ骸を葬祭する事を免るされ。次で更に其親族のものに。家名再興をも許されたり。

此淨瑠璃は。嘉永六年九月。登與島玉和軒。佐久間松長軒の作れるものなり。

花雲佐倉曙

宗五郎住家の段

「荊棘の中に芝蘭を生じ云々」　つまらぬものゝ中にもよきものゝあるをいふ、芝蘭は靈芝蘭草にて、いづれも仙草、砂の中より砂金出づ、

「間々」　下總國東葛飾郡にあり、昔間々の手兒奈とて、絶世の美人ありし事は山邊赤人等の詠を以て、萬葉にのこり、間々の繼橋も有名にして、其歌歴代の撰集に見ゆたり、

「山田守る僧都の云々」　續古今集に見ゆ、玄賓僧都の歌なり、意は山田を守る僧都（案山子のこと玄賓自らたとふ）の身ほど悲しきも

宗五郎住家の段

荊棘の中に芝蘭を生じ。砂の中の黄金とかや。人の心の剛臆は。武士町人に限るべからず。然れば佐倉宗五郎。國民の爲め身を惜まず。強訴の大望有るに因つて。妻や子供に餘所ながら。暇乞をと思へども。晝は人目を憚りて。夜道を急ぐ一人旅。間々の渡りも打過て。古郷近く成ければ。幽に見ゆる我住家。垂木疎に傾し。窓に映らふ灯火の。替り果たる有樣を。見より宗五郎胸塞り。詞「ハヽ誠や人間一生は。此案山子の如くにて。稻熟すれば。晝夜に百人の代を成すと雖。刈入れ濟ば火に燒れ。夫故古歌にも詠ぜし如く。山田守る僧都の身こそ悲しけれ。秋果ぬれば問ふ人も無し。我身の上も先其如く。詞「計らずも此度の大難。我身一人に引受る。覺悟は固より極めたれども。跡に殘り

のはなし、秋の茹入れすめば捨てられて、搆ふ人もなしといふこと、今宗五郎が案山子に怖づる身の上にて案山子に思ひくらべての歎き、頗るよし、

「ぶしつけ」　しつけなき事より、轉じて無禮の意、「拜まぬ神もなかりける」一夜の留守だにも、物思ひに寢られぬ女氣、まして數多の子をひかへながら、夫は何時を歸りとも分らぬ詮義の身、家をつけまはす犬

し妻子にまで。如何なる憂目の掛るらん。我亡跡の吊ひも。何國の誰か爲吳ん。思へば傳身の上やと。さしも丈夫の男氣も。坐涙に暮けるが。ハット心を取直し。詞「ハヽ我ながら未練なり。時後れては惡かりなん。とは云ものゝ長の留主。內の樣子は如何ぞと。指足ながら脊戸口より。覗ば妻は寐もやらず。人待ち顏の其風情。ヤレ女房か懷しと。飛立つ心押沈め。詞「お三〳〵と音なふ聲。思掛無き女房は。又晝の惡漢め。弱みを見せては叶はじと。態と聲を勵して。詞「何誰でござんす。夫の留主の女房に。夜深て脊戸から不躾な。用事が有らば翌朝來んせと。强ふ云ても心では。拜まぬ神も無かりける。詞「ホヽ長々の留主の中。子供の介抱。嘸辛勞に有つらんと。言つゝ這入る顏見て惝り。詞「ヤア旦那殿かと走り寄り。物をも言ず縋り付き。嬉し涙に暮けるが。漸涙押沈め。ヱヽ聞えぬぞや我夫。國を出て四月

身にまとふ惡者など、消入る思ひの杖柱は、神頼みの外なかるべし、

「梨子も礫も」　梨子の礫ともいひ、おとづれなきをいふ、其譯明ならねど、梨子に無しをよせたるにて、闇の礫などいへる、俗語より出でたるにはあらざるか

「おとづれも泣こがれたる」とかけたり、

「五ヶ莊」　肥後國八代郡の東南、深山幽谷の中にあり、即ち椎原、久連子、樅子、業木、仁尾田の五ヶ村傳說によれば平維盛等、熊野浦より遁れ來り、住せし處にして、小松の姓多きは此證なりと、

「一揆」　領下の民の、徒黨して反くにいふ「百姓一揆」

「佛頂寺」　佐倉五大寺の

越。梨子も礫も音信も。泣焦れたる女房子を。思はぬ仕方は胴慾な。何ぼ男を立るとて。義理立も能い加減。慘い難面いお心と。恨歎くぞ道理なる。詞「ホヽ其恨は理ながら。汝も兼て知る通り。元某は肥後の國熊本領にて。五ヶ莊の產。先祖は平家の落人にて。一村殘らず。無年貢の土地なりしに。時の役人の計ひにて。年貢の取立より一揆起り。多勢の難を引受けて。某一人追放と成り。則當村佛頂寺の。迎然和尙は。俗緣の伯父なる故。此下總にさまよひ來て。不思議の緣で此家へ入聟。舅殿にも世を去つて。詞「名主の役義を相續すれば。星霜を頂いて。油を絞りし百姓より。給金同樣の役料を取り。我々夫婦子供等まで。安閑に暮すからは。斯る時には肉を裂き骨を粉に碎くとも。些少も厭ぬ兼ての覺悟。とは言ものゝ我とても。心に掛る妻子の事。安じ暮して一夜さも。目を合したる夜半も無し。さは去な

一にして、下岩橋村にあり宗旨は新義眞言、其創建詳ならずといへども、弘法大師の大佛頂の法を修せし所なりと、著名の古刹なれば取りて作れるなるべし、「星霜を戴いて云々」　野に出でゝ働く、百姓の辛苦をいふ「朝に霜を踏んで出で夕に星を戴いて歸る」「給金同樣の役料を取り云々」　此心得ある名主は、實に配下の父母なり、「後指さゝるゝ」　かげにて笑ひそしらるゝをいふ、「鎌倉のお邸」　江戸の藩邸に當つ、總解を見よ、「佞人原」　ねぢけ人ども「管領家」　領主堀田家にあてたるか、恐らくば德川家なるべし（管領は足利時代の職名、德川時代の老中の如し、堀田家は此時の老

から今更に。命を惜みのめ〳〵と。逃隱れせば卑怯者。人の皮着た畜生と。我耻ばかりか悴まで。後指さゝれふかと。夫が不便さ可愛さ故。嗜好んで此心苦。誰爲者ぞ去とては。推量爲よや女房と。男泣にぞ泣けるが。心を沈め涙を拂ひ。詞「ハヽ後れたり誤つたり。國の爲又二つには。幾千萬の其爲に。我身を捨て日外より。鎌倉のお邸へ。度々お願申すと雖。上に詔諛ふ惡人有つて。今日まで空しく月日を送る。夫のみならず佞人原の。計略に乘られて。無實の罪におめ〳〵と。命を捨んは殘念なり。最早此上は管領家へ直訴の外思案無し。左有る時には彌以て。强訴の罪重ければ。妻子にまでの御咎の。掛るまいとも計られず。夫故密に歸しは。夫婦親子の緣を切。他人と成て事を謀らば。如何なる罪科に逢とても。汝等にはお構無く。此家に疵付ねば。未來にござる舅御へ。少しは御恩を報ずる理り。必恨と

中なり）「夫婦親子の縁を切り」昔大罪を犯せば、父母妻子兄弟迄も刑せらるゝゆゑ、之をなさんとするものは、其縁を切りて行ひしなり、「此家に疵つければ云々」養子の身として、其家に疵つけまじとするも義なれば妻の身として、夫と生死を共にせんとするも亦義なりあはれにいぢらし、

思はずに。我亡跡に子供が事。頼と言も胸迫り。跡は詞も泣ばかり。始終聞居る女房は。怨めしそふに夫の顔。守り詰たる目も涙。保ちかねて聲を上げ。わつとばかりに叫び泣。正躰も無く見えけるが。漸に顔を上げ。最前よりの入譯を。無理とは更々思はねども。夫婦は二世と有ものを。夫の難義を餘所に見て。命を惜みのめ〳〵と。存命そうな私じやと。思ふてかいな聞えませぬ。殊更三人四人まで。子まで成したる夫婦中。御前一人が男じやと。世間の人に譽られて。跡に殘し女房子は。不心中者不孝者と。數多の人に笑はれて。夫がお前の本望か。譬未來の爺様に。呵られても大事無い。夫に付が女房の役。火の中水の底までも。連れて行くとは言もせで。忌はしい此去狀。見るもうるさや汚らはしと。寸々に引裂いて。狂氣の如く身を震し。かつばと伏して歎しは。理り責て道理なる。夫も悲歎に暮ける

「子供の枕元立寄れば云々」兄惣平が、手をつかへてのなとなしき挨拶ぶり、三之助が膝へ這上る頑是なき有樣、見る夫婦の胸中如何「互に顔を見合して云々」の句身にしみて覺ゆ、

「ぼんもたい〳〵」　坊も頂戴、

「包むに餘る」　隱すに餘る、

が。詞「ホヽ今に初めぬ汝が心底。過分なるぞよ。コリヤ嬉しいぞよ。イデ此上は思案を極め。片時も早く出立せん。世悴どもにも他所ながら暇乞。ソレ四人ともに起しやれと。夫の詞に女房が。アイと返事はしながらも。是が親子の別れかと。思へばいとゞ立兼る。心で心取直し。漸子供の枕元。立寄れば。兄惣平。長しく起直り。父が前に手を事へ。お父樣御機嫌能うお戻り成れ。御目出度存じますと。年端は往ねど流石にも。子供の中の兄也ける。其間に源助喜八郎。お父樣お歸りか。長しふ留主して居ました。サア賃下され〳〵と。何のぐわんぜも三つ子の。舌も廻らぬ三之助。ぼんもたい〳〵たい〳〵と。父の膝に這上れば。見る双親は熱湯に煮るゝよりも。猶切なく。互に顔を見合して。包むに餘る目に涙。保ち兼たる風情也。父は漸涙を拂ひ。詞「ホヽ長の留主中長しう。能ふ留主を爲て吳たな。取分け

「城付二百二十九ヶ村」小説的の宗五郎傳記によりて書けるなり、總解とは異なり、

「酒は有るまい水なりと」これ水盃、

「行く末頼むお神酒の餘り」常々の神頼みを見る、

「ちろり」酒を溫むる器和訓栞に「酒器にいふは三餘贅筆に急須と見ゐたり、チラ〳〵を俗にチロ〳〵と

て兄惣平。年端行ねど惣領なれば。云ねど知れた此家のあとゝり。今某が云ふ事を。サよふ聞よ。當所佐倉御領分。城付二百二十九ヶ村。其人々に此父が。笑はるゝが嬉しいか。但又譽らるゝのが。嬉しいか。サヽ如何じや。如何じやと尋ぬれば。詞アイ。ソリヤ譽られるのが嬉しうござります。ホヽ流石は惣五郎が血を分し子程有る。ヲヽういやつ〳〵。然らば此父は千萬人の人の爲に。鎌倉の御殿樣へ御願に行く程に。長しうして待て居よふぞ。ソレ女房。目出度ふ門出の盃せん。酒は有るまい水成りともと。言に女房心得て。幸ひ今日は神樣へ。夫の身の上子供等が。行く末頼む御神酒の餘り。鑊に有ふとかい立て。盆に載たる銚子盃。肴は鰹取添て。夫の前に指置ば。詞ホヽ目出度〳〵。サア女房酌やれ。アイと答へて銚子鍋。手に取上げは上げながら。此が此世の別れの盃。何にも知らぬ子供等が。

いへり、燗むるに急なるを以て名とするなり云々」と見ゆ、此チロ〳〵のちろりとなれるものか、或はいふ地爐裏にてあたゝむるよりの稱と、

「子供等が跡でうろ〳〵云々」　水盃も熱湯を呑む心地やせん、

「何が不足で」　と叱つてからが「これがお別れのお盃」といはれて胸を裂く「見やれば妻は身をそむけ云々」の句に至つては、悲慘讀むに堪へず、

「かゝる健氣な子を捨てゝ」

「笑へば笑へ親子づれ」

此場合、如何なる丈夫の心

跡でうろ〳〵仕やらうかと。思へばいとゞ胸塞り。手も戰々と搖ひ出す。ヱヽ未練者めと。夫の目顏で呵られて。心を沈め酌ぐ酒を。さらりと呑んで。詞ヤア惣平。一つ呑やれ。と差出せば。手に受ながらしく〳〵と。涙含めば父は見咎め。詞ヤア門出を祝ふ盃を。何が不足で其吠頬。不吉千萬嗜めと。言れて惣平おろ〳〵聲。お父樣のお盃。有難ふござりますれどな。鎌倉とやらへお越成れたら。何時お戻り成れふやら。萬一と是がお別れの。お盃に成ふかと。夫が悲しい〳〵と。稚心の孝行心。母は驚き。ムヽ扨は其方は最前から。夫婦の咄を。アイ寐た顏して聞て居ました。申し父樣御用が濟だらば。私等を不便と思ふて。早ふ戻つて下さりませ。賴まするとも物數を。言ねど胸に磴と答へ。見遣れば妻は身を背け。泣顏見せじと喰縛る。斯る健氣な子を捨て。何と命が捨られふ。笑へば笑へ親子連。何國

へなりとも立退ふか。イヤ今更に逃走らば。妻子に迷ひし卑怯者と。我ばかりかは家の耻。未來の舅へ言譯無しと。亂るゝ心押沈め。涙隱して。詞「ハヽヽヽヽ何を譯も無い。最前母に話したは。アリヤ本の轉ばぬ先の杖と言もの。氣遣ひ爲まい。ハテ案じまい。サ今度鎌倉へ往たらばナ。ユリヤ馬に乘つて。鎗を突して戻らふぞと。子供誑しに云ふ事も。心の覺悟ぞ哀なる。遉童のあどなくも。夫なら嬉しうござります。詞「そふして此盃は何致しませふ。ヲヽソリヤ弟共へ。順々に差召れ。ソリヤ弟じやと悅ぶ稚子。三之助は母が持添へ。涙隱して取納め。妻のお三は詞を改め。何時まで言ても盡せぬ名殘り。去ながら。お前を始め殘りの六人。若戻つても居よふかと。代官所より犬を入れ。日毎々々に嚴しい御吟味。夜明ては詮無い事。片時も早ふ御出立。早ふ〳〵と急がせば。詞「ヲヽ健氣にも申たり。然ら

も動くなるべし、否動かざれば惰なきなり、血なきなり、これを忍びて事をなす、則ち男子、

「轉ばぬ先の杖」　用心にいふ語、

「馬に乘つて鎗をつかして云々」　此詞を眞受にして「そんなら嬉しい」といふあどけなき心根に、又一倍の涙、

「犬」　代官などの手先につかはれ、人の惡事など探索する者の稱、

「しかし大事の身を以て云々」　これ夫を勵ます唯一の言、此健氣なる語を吐く女子、天下に幾人かある、かゝる妻の心底を聞くからは、夫たるもの、如何なる大事をもなし得べし、

「塒離れし親鳥の云々」　家を立出でし宗五郎が、恩愛の情に引かるゝ樣をいふ、

「顏見ねぬまで延上り云々」　此あたり芝居にて、泣きくづれて面をあぐる者なし、

ば萬事に氣を付けて。必ず留主を合點か。ヲヽ其事は氣遣有るな。必妻子に引されて。仕損じばしゝ給ふな。併し大事の身を以て。暇乞に遠々と。戻らしあんした御心底。お案じ申と勵せば。詞ホヽウホヽヽヽヽ云にや及ぶ。我とても其心底を聞く上は。後れは取らぬ氣遣ひすな。子供等達者で。女房さらばと立出れば。爺樣のふと慕ふ子を。心強くも振拂ひ。見顧もせず二足三足。遺が恩愛振返り。見れば見交す妻や子が。父樣いのふ。我夫のふと呼ぶ聲に。ヲヽイと云ふも胸塞り。親子夫婦の憂別れ。天も憐み給ひてや。又降頻る白雪に。見えつ隱れつ霏々と。塒離れし親鳥の。行艱みたる其風情。次第々々に遠ざかる。顏見えぬまで延上り。父上のふと兄弟が。聲を限りに泣叫べば。三之助はうろ〳〵聲。詞父樣何所へ行しやつた。ぼんも一所に行たいと。頑是無れど父親を。慕ふ有樣見る母が。堪らへ〳〵

「あぢきなや二世を契りし云々」　此歎き身にこたへて覺ゆ、三千世界のかなしみをあつめし、親子夫婦が生別れの死別れ「宿世如何なる種をまき」と過古まで思出されて、恨まるゝは當然、

「名主」　庄屋、

し溜涙。わつとばかりに泣倒れ。暫し答も無りしが。アヽおもへば〳〵味氣無や。二世と契りし我夫が。命を捨に行く旅路。我ばかりかは子供等が。一世の別の盃を。嬉しそふな顏をして。酌する私が心の内。何の樣に有ふぞいなア。未其上に日外より。待焦れたる長の留主。顏見て喜ぶ甲斐も無ふ。直に別るゝ味氣無さ。子供の愛に引されて。未練な心も出樣かと。態と氣强ふ追立し。其時の悲しさを。推量して下さんせ。如何にお國の爲じやとて。我身を捨て殿樣へ。恐しい直訴訟。名主と云るゝ身の因果。思へば〳〵我々は。宿世如何なる種を蒔き。夫婦親子と生れ來て。斯る憂目を見る事やと。狂氣の如く取亂せば。子供もともに縋り付き。一度にわつと聲立て。歎く涙は下總の。間々の渡りの波越て。堤も穿つばかりなり。何時の間にかは最前より。樣子を聞たる喜右衛門が。物蔭より現れ出で。詞「ヤア

「其女房子が泣く聲は云々」これにてがんづくとは、流石は犬、

「脇壺」脇のくぼみ急所なり、當は當身、

お尋者の宗五郎。其女房子が泣く聲は。合點行ずと窺ひしに。妻子の戀に引されて。戻り居たに違ひ無い。併し内には居らぬ躰。今爰へ來る道で。擦違ふたも旅姿。何でも宗五に極つた。渡船場まではよも行くまい。イデ追付いて一詮議と。駈出せばお三は取付き。コレ待つた。夫は大きな人違ひ。成程今宵此地の人。戻られたが只今。伯父御坊に逢度と。佛頂寺へ行れたと。言せも果ず。ヤアどこへ〳〵。詞「そこらの事も有らふかと。寺へは兼て手先を付置き。スハと云ば知爲の相圖。入ざる問答する中に。取逃しては一大事。其所退け女め。イヤ〳〵〳〵。詞「夫の代りに此三を。縛つて連て行しやんせ。さも無い内は何時までも。退ぬ〳〵と意地張たり。ヱヽ面倒なと踏飛せど。猶も支る其はづみ。脇壺丁と手練の當。うんと倒るゝ其隙に。跡をも見ずして逸散に。飛ぶが如くに駈り行く。子供は始終うろう

ろと。母に取付き縋り付き。母様のふと口々に。喚ぶ聲耳に通じてや。ウント一聲息吹返し。むつくと起て。詞ハア悲しや。少しなりとも隙入れて。夫を首尾能ふ落さんと。思に効無き女の身。取逃せしか。エヽ口惜しやと。無念の涙に暮けるが。詞イヤ〳〵〳〵。コリヤ斯しては居られぬ所。夫の身の上心元無し。私も跡から追付いて。夫の先途を見屆けて。ヲヽそうじや〳〵と甲斐々々しく。脛も露に駈出せば。母様何所へと稚子が。取付く手先拂ひ退け。遂戻て來る其間。兄の役じや惣領殿。子供寐かして能ふ留主しや。必門の戸明まいぞと。跡にも心殘れども。夫を思ふ一念力。柔弱き足を蹈締め〳〵。跡を慕ふてたどり行く。空も次第に更亘り。遠寺の鐘のこう〳〵と。いとゞ哀れを添にけり。不便やな宗五郎。我身を捨て國民を。救はんと言ふ大丈夫も。遺恩愛々着に。引れて道もはかどらず。たどり

「惣領」　長男の稱、群子弟を惣領する意なりと、

「なやみ」　止むこと、なは添辭、されど大坂の俗には、しばし止む意に用ふ、「師走」　十二月の異名、「下總一國手に取る如く云々」　玉盤に銀を布く下總平野の雲景色、物思ひなくて、漏れ出づる月影に見たらんには、比なき風光なれども、これを名殘とかへり見る、我家の森に妻子の歎きを畫き出す、宗五郎が胸には、如何に悲しく映じけん、

「月代」　月あしの意、月代はもと月の出でんとする時、空の白むをいふ「艪櫂たて淩も知らぬ夕闇に船漕出す夜半の月しろ」

「鷄明」　夜あけ、

「大の男大道一杯の大の字形」・立ばかりてとむる樣よくいひたり、

〳〵て漸々と。渡場近く歩みしが。雪も小止て雲間より。顯れ出る月影は。晝を欺く如く也。宗五郎ハット心付き。詞ハヽア誠や。今宵は師走十八日。下總一國手に取る如く。彼が御城下是が在町。彼森陰が我住家。是ぞ此世の見納と。思へばいとゞ胸塞り。暫し涕に暮けるが。詞ハヽア今更に返らぬ繰言。月代も傾けば。雞鳴に程近し。渡し守も待つらん。夜明けぬ中に急んと。足を早めて行先へ。思ひ掛無き小蔭より。現れ出たる大の男。大道一杯の大の字形。コハ狼籍何奴と。笠の中より差覗けば。因旛沼の喜右衛門なり。南無三とは思へども。今更外す道も無く。笠傾けて行過る。袖を扣へて。コレ待つた。詞岩橋村の名主殿。因旛沼の喜右衛門を。よもや見忘れはさつしやるまいと。聲掛られて詮方無く。笠取退けて慇懃に。詞コレハ〳〵喜右衛門殿。忰めが急病故。お醫者へ參る心急き。不禮の

「狼籍」　無法の意、前に解せり、
「南無三」　南無三寶の略失敗などの時發する語、前に解せり、
「岩橋村」　佐倉町のほとりにあり、
「慇懃」　丁寧、
「是非も生中に」　とかけたり、生中は却りての意、
「瀧澤村の六郎兵衛云々」　此七人の事、小説的の宗五郎傳記に見にたり、總解とは聊異なり、
「百年目」　逃れぬ場合にいふ語、

段は御免有れと。行んと爲るを猶引止め。詞サ、、、、、。心急かは知ねども。此方にちつと用も有る。ハテマ下に居て下さんせと。云れて是非も生中に。荒立ては悪かりなんと。心赦さず扣ゆれば。喜右衛門態と打解けて。詞イヤナニ宗五郎殿。今度御領分の騒動より。鎌倉の御邸へ。詰掛けた一揆の奴原。召捕た其中に。瀧澤村の六郎兵衛。小原村の半十郎。下勝田村十右衛門。瀧野村の伊兵衛。千葉村忠藏。高野村の三郎兵衛。岩橋村の惣五郎。サ此七人の行衛が知れぬ。草を分つて尋出せと。イヤモ殊の外嚴しい云付け。爰で逢たは百年め。繩打て代官所と云筈なれども。ハテ斯ならぬ其先は。お互に知た同士。眞更鬼にも成とも無い。品に因たら見遁すまい物でも無い。マア何と思ふて今比に。何國を指て行んすと。態と和ぎ問掛る。心の底に一物の。有と見て取る宗五郎。詞コレハ〳〵。御深切の段

「馳走」　もと奔走と同意なるが、轉じて人に飲食を振舞ふをいふ、

「將門山」　下總國印旛郡佐倉町の一隅にあり、往古平將門の築ける城趾なりといふ、故に此名あり、

「無いもせぬ智惠」　ありもせぬ智惠、

「淺草へ參詣云々」　此事も、小説的の宗五郎傳記に見えたり、

忝い。イヤモ何を隱さふ此度の騷動。元の起はお代官樣へ。二百二十九ケ村の。名主どもを召出され。樣々の御馳走を下され。其跡で五ケ年の間。御年貢二割增の御難題。夫からの大騷ぎ。將門山へ寄合じやの。イヤ印判じやのと上を下。彼地らかも宗五郎。イヤ此地からは岩橋村の名主殿と。引に引れぬ義理になり。無もせぬ智惠袋を。逆樣に振ひ立て。色々云ふても多勢に無勢。終には鎌倉の御邸へ詰掛け。上句の果には召捕れ。其節は我々七人。淺草へ參詣して。戻て見れば右の始末。聞くと其儘。皆密々と逃仕度。我等は先より好ぬ事。ヤレ嬉しやと立歸り。樣子を聞けば詮議最中。內にも居られず其儘に。出る事は出ても肌寒く。行衛定めぬ身の上を。哀れと思ふて喜右衛門殿。見逃して給べ情ぞと。有る事無い事取混て。此場を無事に遁れんと。雪に額を擦付けて。賴む心ぞ切なけれ。喜右衛門

「化の皮があらはれる」嘘のあらはるゝをいふ、狐より出でたる語なるべし、太平記に「畠山狐の皮の腰當に化の皮こそあらはれにけれ」

「ほざく」いふの賤語、

「やはら」やはらかき言葉、溫言の字當れり

「土ほぜり」百姓をいふほぜりはほじりの訛、

「利腕」右の腕、

「名主殿が味をやる」あくまで嘲弄する喜右衛門が詞、面にくし、

「蛇や蛙を鍬先で」これ

は心中笑み。しすまし顔で。イヤナニ宗五郎殿。詞「スリヤ何と云んす。六人の名主等は。皆村々へ歸しとな。ヘヽ、徐々と化の皮が顯れるはい。七人の名主ども。忍んで戻る事もやと。犬を付け置く其上に。最前貴樣の門口を。通り掛し内の樣子。夜更て女の泣聲は。合點行ずと窺へば。女房めがよまい言。管領家へ直々に。强訴の事をほざいたはやい。最前より溫言を入れ。垂し掛れど情强者。口利根に云廻し。此塲をずいと拔ふとは。扨も大膽い土堀め。人にこそよれ。此喜右衛門が見付たからは。一寸此塲は遁しはせぬ。覺悟ひろげと呼はつたり。モウ此上は絶躰絶命。觀念せよと切付るを。身を替して利腕摑み。詞「ウヽハヽ。ハヽヽヽヽ。コリヤ名主殿が味を遣るゝはい。蛇や蛙を鍬先で。轉りと遣とは當が違ふ。ヤちよこ才すなと捻合ふはづみ。拔身遙に飛散たり。喜右衛門は柔術の手練。此方は義民の

百姓をいふ、最も嘲るを見る、

「ちよこ才」　なまいきの意、種々の字を書けど、皆當字なり、

「柔術」　の事は、前に詳しく解せり、

「あやめ」　差別の意、

「小番」　小屋番

「遙に聞付け女房お三」　お三は貞女なり烈婦なり、かゝる危急の場合に、馳來つて夫を救ひたるは、念力とやいはん、神の助けとやいはん、

一念力。天も力を添ぬらん。又降出す雪風に。道の黑白も分り兼ね。組づ轉んづ挑み合ふ。如何は爲けん宗五郎。躓き轉ぶを飛掛り。下に引敷く强氣の喜右衛門。刎起んと急れども。力勝りに押へられ。無念涙に暮居たる。喜右衛門は懷中の。捕繩搜せど見えざれば。扨は今の爭ひに。取落せしかと當惑の。心緩めば起んとす。詮方無れば聲を上げ。渡し守小番々々。曲者は捕へたぞ。繩持て來いと呼ぶ聲を。遙に聞付け女房お三。息を計りに駈付けて。透せば夫は組敷れ。既に危き有樣を。見るより何の用捨も無く。飛掛つて喜右衛門が。髻摑めば。コリヤ何ひろぐと振返り。詞「ヤア儕は宗五が女房お三。ヱヽ面倒なと蹴飛せど。屈まず足に獅嚙付く。其間に宗五郎起んとす。前後に敵を引き受けて。さしも强氣の喜右衛門も。持餘して大音上げ。詞「ヤア〳〵御尋者の宗五郎を。喜右衛門が生捕たぞ。小番は居

「眞の當」　脇壷は當身の急所、

「甚平其手を押分けて」　甚平が實朴にして實意あろ樣よく見えたり、

「朝腹」　朝飯前といふに同じ、

らぬか。繩以て來い。早ふ〳〵と云ふ聲を。聞より甚平南無三と。櫂提げて走り寄り。透を見合せ喜右衛門が。脇坪丁と眞の當。うんと倒るゝ其隙に。下より宗五郎刎返し。互に顏を見合せて。女房か。我夫。甚平殿。先は御無事で。御まめでと。喜び合ふこそ道理なれ。お三は猶も夫に對ひ。最前別れて其跡へ。喜右衛門が來て樣子を聞き。何でもお前を捕へんと。跡追て來た故に。內は子供に留主さして。私も漸く駈付たに。危い處を甚平殿。能マア助けて下さんした。お禮は斯と伏拜む。甚平其手を押分けて。詞ハテ譯も無い。此方等が爲には神樣とも。拜にやならぬ旦那樣。責ての御恩報じ。ヤソレハそふと。最早夜明に間も無し。此樣子では。本海道は猶物騷。船路の足の續く丈。此甚平が送つて進ぜふ。夫は御苦勞去ながら。年寄の氣の毒と。云に甚平打笑ひ。年老たれども此親仁。一人前は未朝腹。

入らぬ斟酌成れずと。いざ召ませと勸むれば。妻のお三は今更に。又思ひ出す憂別れ。胸に詰つてお去ばの。詞も出ず目に涙。涙々は果し無き。船と陸との暇乞。息次返す喜右衛門が。宗五郎遣ぬと飛込む船。甚平心得櫂振上げ。横に打込む浪の底。哀れ儚き最期をば。跡に見捨て漕出す。女房去ばと一言も。遙に隔つ鎌倉へ。腕に任せて。

「斟酌」　遠慮の意。

牢屋の段

急がるゝ浮世とは。誰云ひ初し物やらん。直ぐなる心一と筋に。生れたが罪竊竿。鷹の羽強きとりもちも。屆き兼ぬるぞ力なき。頃は二月末つがた。御佛參の折りからに。外かへは斯と岩橋の。名主宗五郎眞斯と。願ひ出せし强訴の罪。御聞き濟みは有りながら。輕からざらん天下の掟。本國佐倉へ引き渡し。日のめもさゝぬ牢屋敷。決斷所には山住五平太。さも押柄に扣へ居る。所の百性打ち連れ立ち。五人組を先きに立て。御白洲に手をつかへ。詞「ハイ〳〵〳〵。申上げます。私共は高津新田の五人組でござります。承りますれば名主宗五郎殿。近かい内茨の臺にて。お仕置との噂。村中の者が申しまするは。今城付二百廿九ケ村が。安穩に暮しまするは。みな宗五郎殿のお陰。もしお仕

「直ぐなる心一筋に云々」性れついたる直なる心に、惡き役人を取落さんとしても、其威强くして及ばず、却つて罪を得たるをいふ、「直ぐなる」「一筋」「ゐもち竿」皆縁の語、ゐもち竿（得をかけたり）をうけて「鷹の羽」といへり、强きは强くとすべし、然らざれば文をなさず、

「斯と岩橋」とかけたり

「輕からざらん天下の掟」直訴は、其願意は聞届けらるゝも、其罪は頗る重しといへり、こゝは一族縁者、悉く罪せらるゝものとして書けり、

「決斷所」鎌倉幕府の官名、今の裁判所の如きもの

「五人組」　五人組の組頭の稱、德川時代人家五戸づゝ組合を立て、一戸を組頭とす。

「茨の臺」　宗五郎こゝにて刑に處せられしとぞ、

「氏神」　鎭守の神をいふ　委しく前に解せり。

「管領家」　德川家に當てしなるべし、前に解せり

「重き罪を輕くする」　賞の疑はしきは重きに從ひ、罪の疑はしきは輕きに從ふの意、

「塵灰つかぬ」　すげなき樣をいふ

「返す詞も內義の科」　とかけたり、

「山住が里の情も」　面白き語なり、

置に成りましては。氏神樣へどふも濟ませぬ。其かはりに私共の。役德を差し上げます。どふぞ宗五郎殿を。ハイ〳〵〳〵。お助けなされて下さりませと。尻もつ立てゝ願ひける。山住五平太聲あらゝげ。詞「ナニ役德を差上げるとな。コリヤヤイ。元來役德お取り立ての節。汝等一々承知仕ながら。鎌倉屋舗へ辭退するさへ。憎き仕方と思ひの外。管領家へ直訴訟。其重罪の科によつて。磔の刑に行ふ。武士たる者は申すに及ばず。民に心を苦しめて。重き罪を輕くするは。世の諺とは申せ共。サ拔さしならぬがお上の掟。達て申せば汝らも。磔のお相伴だ。叶はぬ願ひ取り置けと。塵灰付かぬ一言に。かへす詞も內義の科。せめて子供はお助けと。皆々手をすり願へ共。空嘯きし山住が。里の情も有らばこそ。そんならたつた一言の暇乞に。一目どふぞ逢して下さりませ。詞「ヤア幾度云ふても叶はぬと。呵り付け

「曲れる枝の杉山彈正」といへり。杉は直ぐなるゆゑすぐの木といへるが、すぐに轉ぜるなりと。これが曲るといへるもをかしく、名の彈正なるも面白し（彈正は曲れるを直す役）

「袴のひだも角菱の」いかめしく、角立ちて出來るをいふ。よく用ふる句。

「吉良細川」　吉良は足利の一門、細川は足利の管領にちいものを引だしたり。

「鰐と鱶、呑込み顔の」鰐も鱶も人を呑む惡しき海獸以て惡者にたとふ、

られ百姓共。互ひに顔を見合して。けふもむだ骨折りましたと。涙すゝつて立上り。我が家〳〵へ歸りける。こなたの間よりしづ〳〵と。曲れる枝の杉山彈正。袴のひだも角菱の。折り目正しく立出づれば。山住傍見廻はして。詞「イヤナニ彈正殿。兼て申し合はせし大望の一義。味方の者は申すに及ばず。吉良細川の輩は。大半味方に付きましたかな。アヽコレシイ。其義はちつ共氣づかひ有るな。が心得難きは宗五郎め。先達て因幡の喜右衛門に。預け置いたる臥龍の笛。正さしくきやつが奪ひ取り。隱しをるに相違なし。私しならぬけふの役目。拷問に事寄せ。名笛の有り家云はす分別。必ずぬかるな五平太と。しめし合ふたる鰐と鱶。呑み込み顔の山住が。詞「ヤア〳〵者共。高津新田名主の宗五郎。女房悴にいたる迄。尋ね問べき子細有り。殘らず是へ引ずり出せと呼ばゝれば。ハツトこたへて引き出す。餘

「積り來る幾世の科を云々」　數多の科を身に負ひたるをいふ、積るかうけて、身に背負ふといへり、

「夜の鶴」　子を思ふ切なる情をいふ、白氏文集に「夜鶴憶子籠中鳴」なほ、前にいへり、

「羊の歩み」　死に近づき行く歩みをいふ、もと佛書より出づ、前に解せり、

「喰しばり縄目もうるみ」　とかけいひたり、あはれなり、

「子を思ふ思ひは同じ」　調あり

所の見る目も。不便成かな積りくる。幾世の科を身に背負ひ。痩衰へし宗五郎。一棟隔つ牢格子の。妻子の事はいかゞぞと。案じ煩ふ夜の鶴。引つ立られてぜひなくも。羊の歩みたど〳〵と。跡につゞいて女房の。おさんも供に禁しめの。中にいたいけ稚子も。何を科とて引き出され。白洲の前に押直る。一と目見るより爺親は。無事で居たかと云ひたさも。喰しばり縄目もうるみ。翌日死る身も子を思ふ。思ひは同じ女房が。あひたかつたと斗りにて。涙は胸につかへける。夫とは知らぬ稚子は。何のぐはんぜもすや〳〵顔。三人の子供は目をすり〳〵。詞「かゝ様寐むたい。寐さしてと。いふにおさんはたまり兼ね。わつと斗りに泣沈む。耳にもかけず山住は。權威を甲に目をむき出し。詞「ヤイ宗五郎。其方を呼び出したは。尋ね問べき一義有り。眞つ直に白狀せば。勘辨も致してくれん。しかし包むにおいて

「水責水責天秤責云々」昔の拷問には、かくの如き殘酷なる責方もなせしものとぞ。

「きつば廻せば」刀に手をかけておどしかくるをいふ。

「間々の渡し」前段に解せり。

「奸佞の甘き詞」口に蜜あるもの腹に劍あり、論語に「巧言令色鮮矣仁」

は。水責火責天秤責。脊を斷割り鉛の熱湯。流し込んでも云はさにや置かぬと。きつば廻せば頭らを下げ。詞「ハア、何事かは存じませぬが。御不審のかゝつた事。存じました義でござらば。何しに包み隱しませふと。いふに杉山聲やはらげ。詞「ヲヽよくいふた。コリヤ某が尋ぬる子細は。去年間々の渡し場において。山住が下役。印幡の喜右衛門を殺害せし其砌。彼が懷中に臥龍と名號し名笛を。所持致したに相違なし。其笛汝奪ひ取り。何國に隱し置たるぞ。サヽ包まずかたれと奸佞の。甘き詞をこらへぬ山住。詞「ヤア彈正殿手ぬるし〳〵。ヤイ宗五郎。名笛の有り家早々ぬかせと。せり立つれば。詞「ハアヽ。コハ思ひも寄らぬお尋ね。印幡の喜右衛門を殺しましたのは。いかにも私なれ共。其名笛とやら臥龍とやらは。存じませぬ。コリヤ〳〵宗五郎。渡し守の甚兵衛は。其夜より逐電いたし。行方知ずと聞き

及ぶ。さすれば喜右衛門を殺したは。甚兵衛でサ有らふがな。是は又迷惑千萬。我が科を人にぬつても。輕ふ成るのが今の當世。それに何ぞや人の科を引受る樣な宗五郎でもござりませぬ。ヤアぬかすな。科もなき甚兵衛が。何故に逃隱れ致す。臥龍の笛を奪取り。立退しといふ事は。此彈正鏡にかけて。よく存じ罷有るが。所詮一應ではぬかすまい。よい〳〵女房悴に憂目を見せなば。白狀するは定の物。三人のがきらめは。爺親めと天秤責。又女房おさんは。見越の松へくゝし上げ。ぶつて〳〵白狀させよ。ヲツト心得山住が。何の用捨もあら繩取り。ひらりとこやす繩のはし。松の梢に引上れば。のふ情なや殺してたべ。我斗りか夫や子の。責苦は何の因果ぞと。見やるこなたに爺親は。我子をしづとしめ上られ。身ふし碎くる血の涙。とゞめ兼るぞ哀れなり。彈正はしたり顏。詞「コリヤ小悴共。わりや何で

「定の物」　きまったこと

「何の用捨もあら繩」　とかけたり。

「こやす」　こさす。

「しづ」　おもし

「イヤ知らぬ存じませぬ云々」　近眼の倫理學者曰く如何に義の爲めとはいへ、かく三人の子を見殺しにするは、人情にそむけりと、これ今を知りて昔を知らざる言なり、昔は人民の生命財産までも、上の手裏にあり、一たび其意に觸るれば其罪三族に及ぶ、此時に當り、暴戾の上に逆ひ、民を救はんとするもの、元より此大決心なかるべからず、否これなき時は、なし能はざるなり、今を以て古を律すべからず、

「こたへて」　こらへて、

「阿鼻焦熱」　いづれも八大地獄の一、阿鼻は梵語無

泣く。ナニ手がいたいか。ハヽハヽ。ハヽヽヽ。コリヤ尤だ。ハヽヽヽ。宗五郎是でもまだぬかさぬか。眞直に白狀せい。イヤ知らぬ存じませぬ。ェヽしぶといやつ。此上は次第々々にしめ上げて白狀さする。サこたへて見よ。三人のがきめらは用捨致さずぶちするよ。小悴めは我が傍へと。飽迄根づよき呵責のせめ。マア〳〵待つてと寄り添ふ母親。邪魔ひろぐなと蹴り飛し。結び合ふたる親子が禁め。阿鼻焦熱は目のあたり。詞「アヽあぶない。コレ必ず怪我してたもんなと。いへど其かひなく母親。我子も共に打するられ。詞「アレいたい。術ないわいのふと。親子が苦るしみ見る爺親。涙と共に聲を上げ。詞「ェヽどうよくじや〳〵。どうよくじやわいの。尤此身は科も有り。罪有ればこそ責ぜつてふ。辨へ知らぬ子供等に。何に科有つて此責苦。ェヽ餘りじや〳〵。あんまりじやわいのふ。譬此身は八つ

間と譯す、焦熱に大焦熱小焦熱の二あり、「アヽ危ない必ず怪我して云々」　仕置の此場に此語母の情何ともいはれず、以下涙に咽せて讀むに堪へず「其甲斐泣く母親」　とかけたり、「コレとゝ樣わしや云々」何たる殊勝の言ぞ、

「正體涙」　とかけたり、紋切形、「牛頭馬頭」　牛馬の頭したる地獄の獄卒、以て拷問するものにたとふ、後に詳しく解す、「割竹」　罪人をたゝく竹、

裂共。一分試しに合ふとても。微塵毛頭恨みませぬ。どふぞお慈悲に子供等を。お助けなされて下さりませと。いふもせつなき苦痛の有樣。詞「コレとゝ樣。わしや何ぼふくゝられても釣上げられても泣きはせぬ。じつと辛抱致します。おまへは殿樣を賴んで。堪忍して貰ふて下ださんせ。ヱ申し殿樣。私が骸をお責なされて。とゝ樣やかゝ樣を。お赦しなされてくださりませ。コレお願ひ申し上げますと。縛られし手を摺こすり。泣き顏隱くす心根を。思ひやりつゝ親々は。正體涙にくれ居たる。こなたは牛頭馬頭割竹取り。詞「サア笛の有り家を白狀せい。ぬかさぬか。ヱ云はずばかふして云はすると。目鼻も分かずめつた打ち。母は心も消え入る思ひ。氣はあせれ共手は叶なはず。子は絶兼ねる息の下。詞「アヽいたい。術ないわいのふと。身をもみ乍ら遺にも。兄は弟をかばへ共。弟は兄を打たせじと。互に爭

「餘尺もない」　小供の小さきからだをいふ、

「ちだんだふみ」　地團太など書けど、地鞴踏の訛なりと、さもあるべし、

ふ眞實の。心を察し母は猶。詞ヲヽじゆつないは道理じや〳〵。親を大事とけなげにも。つらい責苦の辛抱する。餘尺もない其體。何とそれがたまる物で。ヲヽ可愛や〳〵〳〵な。コリヤ〳〵。子供責るが悲しくば。臥龍の笛の白狀せいと。傍なる稚子踏飛せば。驚きながらちだんだ踏み。詞エヽアノ爰な。鬼よ蛇よ。かよわい子供を責むる手間で。なぜ此母を殺さぬぞ。いつそ殺して〳〵と。身を揉あせれど目もかけず。骨も折れよと打つ竹に。たまり兼て惣平は。うんと計りに目を見詰め。もがき苦しむ。其有樣。詞アレ〳〵兄が死はいのふ。コリヤマアどふせふ〳〵と。かけ寄らんにも儘ならず。引ばる繩も恨めしげに。詞コレ。コレイノウ惣平。惣平いのふと呼び生ける。母の心の通じてや。息吹きかへし目を開き。詞コレかゝ樣。どのやうに擲かれても。わしや悲しうはないけれど。喜八郎や源助が。手々

が痛かろ悲しかろ。イヤ〳〵ぼんは泣はせぬ。悲しうもなん共ない。ガと〻様やか〻様が泣しやるので。どふやらぼんも泣きたいと。足ずりしたるいぢらしさ。聞く母親は身も世もあられず。詞ヲヽ尤じや〳〵〳〵はいのふ。きのふ迄もけさ迄も。かふした憂目に合ふとは。夢にもしらぬ稚子迄。むごい難面い。ヱヽ胴欲な。こんなせめ苦がいつの世に。又ある事かと恨み泣き。歎けば父も諸共に。取亂したる恩愛の。涙々は遠近の。谷間にひゞく瀧津瀬に。雪解そゝぐ如くなり。人の歎きも空ふく風。折りしも告ぐる時計の七つ。詞ハア最早七つ。今にも新吾めが來りなば。何かの妨事むつかし。此間に一詮義。糺明さしていはしてくれんと。己が工みの奥深き。溜りの間より竹谷新吾。早番代の役目ぞと。衣紋繕ひ打いづれば。はつと二人は手持ち不沙汰。左あらぬ體に座をもふけ。詞ナニ杉山氏。山住殿に

「どうやらぼんも泣きたい」身にしみて覺ゆ、

「恩愛の涙々は遠(落)近」とかけたり、

「空吹く風」なうけて「折しも」といへり「空吹く風」は平氣に知らぬさま、

「工みの奥深き溜の間」とつゞけたり、溜の間は德川時代江戸城中にありて、親族及老功の譜代大名の詰めし間、他にもありしや知らず、

「有無」　否應
「口へ出兼ぬる武藏鐙」伊勢物語「武藏鐙さすがにかけて思ふ身は問はぬもつらし問ふもうらめし」これをもとにて書けるなるべし
「不易をしらぶる」　とは六ヶ數こじつけたもの、
「にがい挨拶」　心に當る詞をいふ、
「繩さきの細き心」　といへり、緣の語、

も御苦勞千萬。刻限來らば拙者が役目。そこ元方には御休足。然るべう存ずると。禮義に有無の返答も。口へ出兼ぬる武藏鐙。詞「アヽイヤ。此山住が仕かゝつた彼等が詮義。いまだ白狀いたさねば。暫くの間お扣へ下され。ムヽ詮義とは何の詮義。サア是はあの笛の。ナニ笛とは。イヤサアノ。ソレヲヽそふだ。不易を調べる我れ等が役。それ故ケ樣にせん義仕ます。ムヽそれ程の事に拷問とは。餘り御念が入り過ぎる。假初にも天下の科人。罪科極まる宗五郎。譬女房悴にもせよ。もし落命などいたしなば。お上への申し譯は。何んとせふと思ふてござる。サそれは。お役目相濟む上からは。彼等は赦し召れよと。何所やらにがい挨拶に。じつと目と目を見合はせて。手に汗握り拳をば。そつと袂へ押し隱し。ふせうぐに家來を呼出し。詞「ソレ科人めを一々殘らず。獄屋へ引けと下知の中。又引立る繩さきの。

「芭蕉葉のあしたの露」人生のもろくはかなきをいふ、涅槃經などに出でたる語なり、

「三衣」僧の衣「一物」三衣をうく

「佛頂寺」、前段にいへり

「從類」一族緣者をいふ

「沙門」僧侶の通稱、桑門に同じ、別記を見よ

「にべなき」少しの愛想もなきをいふ、前に解せり

細そき心も芭蕉葉の。あしたの露と消ゆる身の。胸の思ひは幾千筋。なく〳〵別れ引れ行く。時しも門内騒がしく。下れ〳〵と下部が權柄。耳にもかけず悠々と。入くる姿は墨染の。三衣の袈裟は結べ共。胸に一物迎禪和尚。白州に出て手をつかへ。詞「ハアヽ拙僧事は。佛頂寺迎禪と申す者。承はれば此度宗五郎夫婦。悴迄御仕置有るとの噂。何卒彼等が命乞。恐れながら迎禪が願ひ。御聞き屆け下されなば。有難く候と。身を謙り述ければ。竹谷新吾取あへず。詞「ナニ貴僧は宗五郎が伯父。佛頂寺迎禪よな。コリヤよく承はれ。大義を企て徒黨致し。强訴の科は從類を絶すおきて。沙門に入つたる其方なれば。格別の御勘辨を以て。おたゝりなきを有り難いとは思はず。命乞を願へば迚。御聞き濟み有ふ樣なし。早々立つて歸られよと。にべなき體に猶もすり寄り。詞「ハアヽ御尤なる御仰。上を恐れぬ宗五郎。

「入門」　寺へ入れ弟子となすをいふ。

「氣色を損じ」　怒るをいふ。

「歴々」　身分貴き人をいふ、前に解せり。

「傘持つて立退け」　これ僧侶の退去法、譽の石碑志度寺の段に「是非に及ばぬ傘一本、餘人にお世話は頼み申さぬ」

「つごと」　けんどの意

「舌長」　廣言又過言をい

強訴の科は是非に及ばず。併いかなる科有り共。十五才迄の子供は。御仕置なきと承はる。拙僧へ下し給はらば。入門いたさせ出家となし。宗五郎夫婦が亡跡の。菩提の爲に致したし。すべて人間生れてより。十五才迄を幼といふ廿才迄を少といふ。三十才迄を若といふ。此理を以て子供の助命。偏に願ひ奉ると。低頭平身詞を崇め。思ひ入つてぞ見えにける。杉山彈正けしきを損じ。詞ヤアいふな迎禪。儕が甥の宗五郎は。恐れ多くも管領家へ直訴訟。夫れ故鎌倉の屋敷には。お歴々のお方も。以つての外のお呵かり蒙る。重々憎き宗五郎。子供迚用捨はならぬ。其方も似合ふたやうに。傘持つて立ち退けと。誓の詞にくわつとせき上げ。詞ヤア舌長也彈正。無一物と申せ共。僧には三衣の法も有り。貴人に高位のくらゐを恐れ。子供の命助たい斗りに。一向願ふかひもなく。叶はぬ上に樣々の雜言。此上はぜひに及

ばず。妄語戒を破り。五戒の内がかけるからは。もとより我れは破戒の僧。此儘捺落へ身を沈め。恨をなさでや置ふかと。くはつと見開く眼中の。怒りの涙血をそゝぎ。古木の元へ立ち寄つて。我と我てに我額。眉間眞向打ち付け〳〵。血は瀧津瀨と流れ出で。墨の衣も朱に染み。左ながら惡鬼の如くにて。思ひ込んだる諸一念。かつばと轉び息絶れば。人々是はと驚ろく中。あやしやかしこに數多の鼠。彈正目がけ飛かゝる。心得ひらりと切り拂へど。猶も寄りくる因果の端。めぐりくる〳〵火の車。惡のむくひは限りなく。後にぞ思ひ。三重「しられたり。

ふ、詩に「婦有二長舌一」といへるは多言なり、

「妄語戒」　五戒の一、五戒は殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、

「奈落」　地獄の梵語、前に解せり、

「我と我手に我額云々」　僧慧亮、惟仁親王の爲めに、眉間を破りて佛に祈りしといふ事より、書けるなるべし別記を見よ、

「墨の衣も朱に染み」　墨朱對す、

「あやしやかしこに數多の鼠」　三井寺の賴豪の怨靈、鼠となりて山門の聖敎をくひしといへるより、書けるなるべし、別記を見よ、

「因果の端」　をうけて「めぐりくる〳〵火の車」といひ「惡の報ひは」とつゞけたり、因果應報車輪の廻るが如しといへるより書き、皆緣の語なり、注意すべし、火の車は亡者の罪人を載する車、實は人間火宅の苦みにたとふと、

增補宗五郎　住家の段

總解

此段は何人のものせるにや。現今專ら行はるゝ由なれば。通解することゝなせり。趣向も拙く文章も劣り。ばか〳〵しきふし多くして。前者の生別又兼ぬ死別の。悲哀の情を寫して。覺えず落涙せしむるものと。比ふべくもあらず。就中儀作の切腹の如き。させる理由もなきに。物好きに腹を切り。無理に言譯を考へたる趣きあり。隨つて宗五郎も。一身を捨てゝ數萬の人民を救ふ程の。器量ある男とも思はれず。これに連添ふおさんも。間の拔けた貞女と見えたり。

増補宗五郎
宗五郎住家の段

「雪明り戸ざゝぬ御代」とつゞけたり、太平の世民戸を鎖さずと、川柳に「堯舜の世には錠前直し來ず」「世を放れ家」とかけたり、「雪持竹のかれそれも」つたなし、「名うて者」評判の惡者をいふ、「代官」前に解せり、

宗五郎住家の段

冬の日の。早暮されど雪明り。戸ざゝぬ御代に住馴れて。世を放れ家の氣さんじは。雪持竹のかれそれも。我家斗の氣配りなり。折から表へ來かゝるは。印幡村の喜右衛門とて。人も知つたる名うて者。門口より差覗き。義作内に居らるゝかと。いふに打藁片寄せて。ヲヽ誰かと思へば喜右衛門。此大雪に何と思て。イヤ何と思ふてかふぞ。御代官徳島勘解由樣の云付で來やんしたと。ずつと通り傍を見廻はし。御代官の仰には。今度宗五郎が百姓一揆の腰押は。容易ならざる大罪なれど。お慈悲深い殿さまの御憐愍で。青山のお屋敷におとめ置き。去ながらもし村々へ内通して。どの樣な工を仕出すやら。此喜右衛門に目を付よと。勘解由樣の云付。あゝよいかげんにとゞまればよい

「破れ田地」荒れ田地、「心ゆかし」心やりの意なれど、こゝは氣やすめといふ程のこと、「萬一殿樣の云々」専制時代には、民の生命財産までも、領主の手裏にあり、「馬鹿庄屋」馬鹿の語は、權臣趙高なるもの、秦の二世皇帝に、鹿を献じて馬なりといへるに起ると、川柳に どう〳〵といつて趙高引いて出る」庄屋は前に解せり、

に。役にも立ぬ腰押して。後には舅や女房子に迄。つらい憂目を見せるで有らふ。ハレヤレ不便な者じやなと。煙草引寄せ空うそ吹き。ヱヽ何を云ぞい喜右衛門。今度宗五郎が骨折るも。誰が爲じや。二百廿九ヶ村の爲じやないか。すりやわがみも同じ御領分に住んで居りや。供に力を添へる筈。夫にまたあじな役目をお仕やるの。さればいの。おれも破れ田地の一反も持つて居るが。年貢の定めと云は。畢竟百姓の心ゆかし。萬一殿樣の御意に違ふて。所を追はらはれて見りや。田畑屋敷も皆お取上げ。それをまた我物顔して。訴訟立する馬鹿庄屋共に。加談する宗五郎は。大馬鹿者の大盗人。義作何とそうでは有るまいかと。出る儘の雜ごんに。おさんは聞かね。これ喜右衛門樣。放れ家なれど宗五郎が宅。人聞も悪い。宗五郎殿が何盗みました。多くの村々を助ける爲の訴訟じやぞへ。盗人の因縁。サヽ

「因緣」　わけの意、

「佐倉」　下總國印旛郡にある町、

「木の空へ上られ」　はりつけをいふ、

「どつちよ聲」　調子はづれの大聲をいふ、

ヽヽ聞ませふ〳〵と。疊たゝいて腹立涙。喜右衛門猶も聲高に。ヲヽ盜人の因緣聞たくば。云ふて聞かそふ。コリヤやい。此佐倉の田畑は云に及ばず。十八萬石の御領分は。皆殿樣の物じやぞよ。其村々に住居して。親子女房子を育つるも。コリヤ皆誰の影じやェヽ其泰平の有難さを忘れ。上に敵對ふは御恩盜人じや。ヲヽ國盜人と云ふが無理か〳〵〳〵。ヱヽ無理かい。可愛や追付つ木の空へ上げられ。鎗でぐつしやり。ヲヽいたハヽヽ。ヲヽいたアハヽヽ。ヲヽいた〳〵〳〵。ムヽハヽ〳〵〳〵ハヽヽヽヽ。ハレ氣の毒な物じやな。ウハヽヽヽヽと邊へひゞかすどつちよ聲。意地に印幡の喜右衛門と。名に渡りたる惡黨なり。表の方より子分の彌吉。親分こゝに居やんすか。ちよつと足が付たはなしがごんす故。迎ひに來やんした。早ふごんせ。ヲヽよふしらせた。一所に行かふ。ヤ時に御内儀。今の樣に云たは惡

「若い女房を獨寢云々」あちな所へ同情をよせたり、

「口と心の裏表」　といひ

「目配り氣配り」とつゞけたり、

「門の戸口のしめくゝり」

といへり、

「まつべ」　まつへの轉にて、とゝのへそらへる事にいふ語、

「行燈」「蒲團」「油斷」　等の語は前に解せり、

「草臥」　と書きて、くたびれとよむは、詩經の古點に、敝淆をくさぶしと訓せしより起るといふ、前にいへり、

氣じやない。皆宗五郎の爲じや。今にも戻つたら知らすがよい。おれがとつくり意見して。もふ江戸通ひはやめさせふ。アヽ可愛そふに若い女房を。獨寢さすと思や。おりや涙弱い故。ついつい云過ぎた。了簡して下さんせ。ヤ義作。火の用心よふしやと。口と心の裏表。目配り氣配り點き合ひ。子分引連れ喜右衛門は。我村さして歸りける。跡見送つて女房は。門の戸口のしめくゝり。行燈の油竈の火。見まつべ夜着や敷蒲團。イヤ申しとゝ樣。あの意地惡の喜右衛門めが。深切らしい今の詞。めつたに心は。ヲヽそふ共〳〵。油斷のならぬ此時節。そなたも隨分心を付きや。アイ〳〵。そりや呑込んでおりまする。此程よりの御心づかひて。嘸お草臥でござんせふ。もふお休みなされませぬか。ヲヽそんならもふ寢ませふが。アヽ何やら心にかゝつて。サア私も今夜はいつこふ目がさへて。もしや虫がしらすと云ふ樣な。

「身は丸寢」　用心の爲め、「添乳しん〳〵」　とかけたり、つまらず、

「晴間を白雪」　とかけ「八重降りしげるかへる山歸る主」とつゞけたり、歸る山はかへるの枕詞なり、古今集に「白雪のやへ降りしげる歸る山かへる〳〵も老にけるかな」もと雪國なる、越の歸る山より出でしなるべし、

「跡や咲(先)初の」　とかけたり、

「脊戸のほと〳〵」　何の寢言やら、

「夜さとい」　目の覺めの早きをいふ、

サア〳〵早ふお休なされませと。親や子供の夜具の裾。押へて廻り身は丸寢。我子に添乳しん〳〵と。ふけ行く夜半の鐘につれ。又一頻り吹越して。いつか晴間をしら雪の。八重降繁り歸る山。歸る主の宗五郎。通ひ馴たる在道も。案じに跡や咲初める。軒の山茶花目印に。脊戸のほと〳〵打たゝき。おさん〳〵と音なふ聲。内にはふしぎと枕を上げ。ハテ合點の行かぬ。今のは慥夫の聲と。云も心の迷ひ故。アヽ思ふまじ案じまじと。云へど氣すまず寢もやらず。添乳ながらの手枕を。しらぬ外には氣をあせり。アヽ夜さとい女じやが。寢入端と見えて。コレおさん。わしじや宗五郎じや。明けてたも〳〵。ヤアそふ云しやんすは宗五郎殿か。ヲヽ今戻つたはい。ヱヽと惝り立上がる。足もしどろにつまづく物音。義作目覺し起上り。誰じや〳〵。アヽコレとゝ樣。戻られました〳〵。ヱヽ跡先も云ず戻つた〳〵

「明けてうれしき」　明けてくやしき玉手箱のうらをかけるのみ、「ほた〳〵」　悦び迎ふる樣、

「孫を涌して云々」　妹背山杉酒屋の段に「酒買が來たらたゝき出せ盜人が來たら酒はかつてやりをれ」

とは。そりやマア何がい。イヱイナ。宗五郎殿が戻られましたはいな。戻られましたはいな。何じや宗五郎が戻つた。ドヽドレどこに〳〵。アヽ申し。シイ密に〳〵。ヲヽヲヽヽヽ。合點じや〳〵と。俄に差足脊戸の戸を。明けて嬉しきおさんが思ひ。今更何と挨拶の。口籠るこそ道理なり。義作ほた〳〵傍に寄り。マア〳〵挨拶はほつて置き。此寒いのに夜々中。戻つて來たは。ムムヽ定めてよい御沙汰が。有つた故で有らふ。マア〳〵何はともあれ。達者で目出たい〳〵〳〵。ハヽヽヽヽ。ヤよふ戻つて下さつたのふ。ウハヽヽヽヽ。コリヤ娘よ。聟殿もひだるかろ。早ふ茶を涌してしんぜんかい。コリヤ孫を起して聟殿に見せんかい。ヱヽなにをうろ〳〵するぞやい。孫を涌して聟殿にくはさんかい。茶漬を起して聟殿に見せんかいと。何を云やう分ちなく。お前樣にも御息災。長々の留主中。二人の子供や女

「義理ぎんどう」　義理のかたぐるしきをいふ、俚言集覽に、勉答の字を用ふれど、いかゞなる由いへり、

「へちまもいらぬ」　前にいへり、

「老少不定」　佛典の語、

房迄。いかいお世話でござりませふ。ヱヽ義理ぎんどうな。何云ぞい。女房と云へどおれが娘。二人の子供は孫じやないか。禮もへちまも入る物かい。扨ヤア何から云はふぞ。たんと咄しが有るはい。そなたの戻りを。孫めがやかましう云ふて。待つておつたぞや。コリヤ宗吉とゝが戻つたぞよ。サヽ起きて清書を見せぬかいと。いふに夜ざとき宗吉が。とゝ樣戻つて下さつたか。嬉しい〳〵。サア清書見て譽めて下され。ヲヽ賢い〳〵。何と手が上りませふがな。ヲヽ精出してよふ覺え。隨分おとなしう成人せよ。コリヤ宗吉。よふ聞けよ。人間と云に物は。老少不定といふて。年寄が跡へ殘り。若い者が先へ死なふやら。知れぬが浮世。まして此とゝは。江戸表に二年越の長逗留。どふで死なねば成らぬ此身。ヤサどふで一度は皆死ぬる體。コリヤヤヲ咄しじやが。もし今にもとゝが死んだら。ぼんは何と言るぞ

「遠慮」　遠き慮りの意より、謙遜のことゝなる、

「七人の庄屋」　前段に其名を載せたり、

いと。それとは云ぬ暇乞。とはしらずして宗吉が。アイとゝ樣が死なしやつたら。わしがお前の代りに成つて。祖父樣を二人前。孝行にするはへ。ヲヽかしこ。よふ云ふた〳〵ナ。ハヽヽヽ何の事じやい。思はず咄しに實が入つてハヽヽヽヽ。時に親父樣。女房共。おりや折入つて賴みたい事が有つて戻りましたが。何と聞いて下されふかと。樣子有りげな詞の端。鼻は何の氣も付かず。ヱヽ宗五郎。何云ふぞい。賴むの賴まれるのと云ふは。他人同士の咄し。親や女房に何遠慮が入らふぞい。定めて七人のお庄屋衆と。一所に戻つた故で有ふと。聞れて宗五郎唾を呑込み。其庄屋達と一所に。青山といふ所に居たがの。ヲヽそふで有ろふ〳〵。シテ殿樣のお聞入が有つたか。どふじやの〳〵。さればの事。お聞入が有るやらないやら。知れもせぬ事に骨を折り。終には牢屋へ。牢屋へ行く樣に成まい物でもない。

よふ思ふて見りや。そんなあぶない事をせふよりは。やつばり手馴た百姓業。二ッには江戸逗留の其内に。ふつと云かはした女も有れば。さつばりと心變りがした故。今度の百姓一揆は。マアお斷りじやと。サ七人のお庄屋達へ。云切つて戻つたが。扨夜が寐よい事いの。親父様女房共。一々そう思ふて下されと。聞いて驚く親と子が。互に顔を見合せて。あきれ果たる計りなり。義作たまらず膝つゝかけ。コリヤ宗五郎。わりや氣が上つたか。イヤイノ狂氣に成つたかやい。わりや是程まで思ひ立つた今度の大望。殊に大事の〳〵菩提寺。方丈様のお頼といひ。二百廿九ヶ村の難義。又云迄もなけれ共。今度の訴訟には頭立つそなた。今其様な事を云出して。江戸に殘つて居らるゝ七人の庄屋達へ。何と云譯が有る物かいやい〳〵。そんな譯もない事云はずと。早ふ江戸へ往て。伴々に力を添へてたも。ヤコレ智殿。宗

「菩提寺」　旦那寺をいふ、佛頂寺をいふなるべし、前に解す

「方丈」　寺の長老の室をいふより、轉じて其住職の稱に用ふ、後に委しくいふべし、

「人身御供」　人の身をいきにへとして、神に供ふるをいふ、古へ行れたる事なり、

「東の花」　江戸の女をいふ、

「佐倉の軒の枯木」　東の花をうけて書き、佐倉に櫻を含めたり、

五郎殿〳〵。ヱヽ是程云ふに返事せぬは。ヽリヤ彌々江戸へ行く氣はないの。ヱヽ見違へた。アノこゝな人でなし。とはいふ物のも一人と。かけがへのない聟のそなたを。義に寄れば人身御供に。上げる樣な此扱ひ。浮世の義理とは云ひながら。今更そんな事云ふてくれては。方丈樣や村々の。お庄屋衆におりや云譯がない。どふぞ心を取直し。早ふ江戸へ往てくれと。事を分たる老の賴み。おさんも涙の顏を上げ。コレヤ宗五郎殿。東の花に目が留つて。佐倉の軒の枯木と。見くらべん樣はなけれ共。三年此方二人寐も。戀し床しを打越して。主によふ似た二人の子供。育上げるを樂しみに。くらす私が心根を。不便と思ふて今一度。訴訟する氣に成つてたべ。夫の命のちゞまるを。賴む此身は鬼か蛇か。赦して下されこちの人と。かつぱと伏して泣けるは。理りせめて哀なり。宗五郎せゝら笑ひ。ヱヽ女の

「女の猿智惠」　女のあさどき智惠をいふ、

「久離切る」　縁を切つて勘當するをいふ、舊里切ると書くが正しといふ、

「横に寢耳の水放れ」　寢耳に水の語より書けるたわごとなり、

「仕置」　刑罰の意、

猿智惠と。コリヤよふ聞けよ。どれ程大勢の人が悅んだとて。夫の命にはかへられぬ物じやに。夫を達てすゝめるは。ハア聞えた。コリヤ何じやな。おれが留守中に。内證の男を拵へ。おれを殺さす積りで有らふ。ヱヽめつそふな。イヤそふじや〳〵〳〵はい。そふ性根のくさつた奴。女房でない暇をくれ。縁切つたぞ。ヱヽコレ親父樣。こなたも大方方丈や村々へ。云譯がないといふて。こゝで聟舅の縁切るで有ふ。サ久離切つて貰はふ〳〵〳〵と。横に寢耳の水放れ。是辛抱の一ッかや。おさんは夫の顏打詠め。ヱヽ聞えぬぞへ宗五郎殿。なぜ其樣に物を隱して下さんす。心變りと見せかけて。誠はとゝ樣や私らに。縁を切りに戻り。お仕置請けるお前の心でござんしよがの。最前からのにくて口。云しやんす度々に。ソレ其目に涙の浮んで有るに。なぜに明〻て云はしやんせぬ。お仕置なら共にお仕置。

「暖簾」　前に解せり、

「水呑百姓」　貧苦の百姓をいふ、前に解せり、

「双金をならせし」　羽振を利かせしをいふ、

「悋貪」　けちんぼの慾ふかをいふ、あまり聞なれぬ語なり。

親子四人未來迄。連立て行く氣じやはいな。ヱヽ聞えませぬ〳〵。聞えぬはいのと取付いて。わつと計りに歎きける。ヱヽ何度云ふても返らぬ事。去つた女房に用はないと。ずんと立てば親義作。イヤ聟殿待やれと納戸に入り。兼てたしなむ用意の一腰。拔より早く腹へぐつと突込めば。驚くおさんうろつく子供。突退け〳〵宗五郎。納戸の暖簾即座の腹帶。しつかと引しめ。コレ親父樣。ヱ早まつた事してくださつた。氣をたしかに持つて下され。親父樣〳〵。とゝ樣いのふ。呼はる聲に起上り。ヤア早まつたとはおろか〳〵。今こそ水呑百姓成れど。元は鄕代官佐倉與左衛門とて。双金をならせし家成れど。上役の悋貪に世をせばめられ。今の有樣。何卒元の代官の家に立歸り。國の治り見て死んと。仇に月日は送らねど。世の成り行は是非もなし。然るに近頃聟せし宗五郎こそ。百姓なれど魂は。武士も及ばぬ

「水盃」生別れ死別れの時になす。

大丈夫と。思ひ込みしが我誤り。實の我子と云ふではなし。聟とは云へど。根は他人の息子の命をば。塵芥の樣に思ふたは。皆こつちの得手勝手。聟殿の眞實の。親御がござつたら。嘸恨ましやるで有ろ。さは云へ此まゝ捨置けば二百廿九ケ村の。其人に宗五郎をば。人でなしと思はれん。其云譯の此最期。淺ましい罪を造ましたと。痛手を隱す苦痛の手負。聞く宗五郎は兩の目に。落くる涙呑込んで。しばし詞もなかりしが。ヱヽ殘念なるかな御切腹。去ながら。是非に及ばぬ此場の時宜。コレ申し親父樣。お聞かせ申す子細有り。コレ女房。戸口に氣を付けよと。傍り見廻し〳〵つ。手負の傍へ差寄つて。我再度古鄕へ歸りし所存。全く卑怯未練でなし。此程お江戸靑山。揚り屋での咄し。七人の村の衆は。銘々家を出る時。妻子親類に水盃をして出たとの事。ハアヽ百姓ながら天晴の魂。其頭立つたる此

「徳川家綱」　四代將軍にして家光の子、
「東叡山」　京都比叡山に對しての稱、比叡山は王城の鬼門、東叡山は江戸城の鬼門に當る、いづれも其鎭護の爲めの大寺院なり、
「幾瀨」　あまた、
「渡し」、間々の渡しなるべし、前にいへり、

宗五郎は。國に親妻子を殘し置き。いかなる難義のかゝらんも計り難く。實に夫よ。一夜がけに拔歸り。妻子一族離緣の上。改めて名乘て出るか。但し又來る廿日は。江戸表に恐れ多くも。御將軍德川家綱公。上野東叡山へ御佛參。ヤ是幸ひ。行列の途中に待受け訴訟の上げんと。七人の庄屋と云あはせ。雪の夜道を歩はだし。幾瀨の艱難したりしが。天も憐み給ひしや。渡しは甚兵衛が持場。程能く小船で岸へ着き。ヤレ嬉しや。何卒品能く。親女房に離緣せんと。心に思はぬ愛想づかし。思ひ寄ざる此御生害。却つて女房に憂目をかけ。親殺同前の此宗五郎。ヱヽ悔しや殘念や。赦して下され親父樣と。疊にくひ付き詫ければ。義作は思はず這寄つて。スリヤ親女房子に緣切らんと。最前からの愛想づかしも。本心は村々の衆の心を合はせ。お國を治める所存で有つたか。ハヽア仰迄もなく。國家の爲に捨つ

「草葉の陰」　冥途の意、前にいへり、

「遠い所へ」　冥途、

「のり返れば」　仰向にそりかへるといふ、

「城下の油藥」　いかなる

る命。よしまた此世で願叶はず共。魂魄はとゞまつて。きつと治めて見せませう。必々草葉の陰から。御覽下され親父様と。聞いて苦しさ打忘れ。コリヤ娘。アヽアレ聞いたか。最前からのは皆うそじやといやい。アヽそうとは知らず老の愚痴から。人でなしの腰拔のと。赦して下され〳〵宗五郎殿。コレおさん。アヽそちや手柄者じやぞよ。天晴な男を持つた。悅べ〳〵。エヽ何を泣くぞい。おれが死んだ跡では。隨分大切にせいヨ。コレ聟殿。目をかけてやつて下され。賴みます〳〵。コリヤ孫よ。こゝへこい。アヽかわいや〳〵〳〵な。祖父はモウ遠い所へ行くぞよ。又とゝもない樣に成らふも知れぬ程に。おとなしう成人して。佐倉の家を立てくれい。是斗りが賴みぞや。云置く事も外にはない。聟殿さらば。娘よさらばとのり返れば。宗吉は縋り付き。コレ祖父樣。こゝから血が出る。痛いかへ。御城下の

ものか、

「五臟六腑」前に解せり、
「斷末魔」臨終又其苦みをいふ、前に解せり、

「氏神」前に解せり、
「利生」利益衆生の略、

油藥付けて上げふ。ついなほつたら。又山へ柴仕に連れて往てや。ヱヽ其樣に皆が泣いてじやと。ぼんも悲しい。祖父樣やとゝ樣が。遠い所へ往てなら。わしも行きたい。無理も云まい惡さもせまい。コレとゝ樣。どふした事やら離れとむない。モウどこへも行ずと。内に居て下され。賴みます〳〵。行ねばならぬ事ならば。わしも一所に行きたいと。わつと叫べば宗五郎。五藏六腑を切刻み。油拔るゝ憂思ひ。祖父は今端の斷末魔。次第々々に引く息も。切れてあへなく成にける。コレとゝ樣〳〵。アヽ悲しや〳〵〳〵な。ほんに思へば此年月。育上げたる孫子をば。捨てゝ未來へ行しやんすと。思へばいとしい勿體ない。こんな事なら私から。先へ死だら此樣に。親に苦勞はかけまい物。常々賴む氏神の。慈悲も利生もない事かと。死體に取付きすがり付き。狂ひ歎けば二人の子供。あなたへうろ〳〵こなた

「生者必滅會者定離」生るゝものは必ず死し、會ふ者は必ず別るゝといふ、佛典の語、前にいへり、

「雪の別れと白妙の」かけたやらかけぬやら、「六つの花びら」雪をいふ、前の七つをうけて書く、「散行く身には云々」ちらちらの調をうけて書く、こゝらは少し文章らし。他はいふに足らず、「聲も細道一筋」とかけ「直なる心」とつゞけたり、一向味ひなし、

へ轉び。聲を限りに泣叫べば。さすが丈夫の宗五郎も。親の別れと恩愛に。胸の棚打碎け。たもち兼たるため涙。落ちて流れて佐倉川。水層增る斗りなり。涙を拂ひつゝ立上り。實に誠。生者必滅會者定離。いつ〳〵迄。名殘惜めばとて限りはなし。是より直に江戸表へ。もしお聞屆なき時は。多くの人の爲め國の爲め。命を捨て訴訟せん。是が此世の暇乞。子供の行く末女房賴む。早さらばと。出行く先をかけへだて。取付く女房。ふり放せば。裾にまつはる二人の子供。一足行けば二足跡へ。雪の別れと白妙の。軒の氷柱や深田の氷。身をきる斗りひえこゞへ。これや責苦の始めぞと。鳴るは七ツ曉の鐘。六ツの花びらちら〳〵。散行く身には見る影も。次第々々に遠ざかる。とゝ樣のふ〳〵。ヲヽイ。聲も細道一筋に、直なる心宗五郎。御國の爲や人の爲と。心定めて一さんに。東をさして引かへす。

岸姫松響鑑　朝比奈上使の段

總解

此淨瑠璃は。寶暦十三年閏四月十八日。豐竹座の興行に上せしものにて。作者は豐竹應律。若竹笛躬。福松藤助。淺田一鳥。黑藏主。並木永輔。

未だ總解として載すべき程のものを見當らず。且取調も行屆かねば。後に讓る事とせり。趣向は。御所櫻堀川夜討の。辨慶上使の段に似たるふしあり。御所櫻の方先作なれば。それより取れるものか。文章は上出來なり。順禮歌を巧みに取用ひて。書ける所などは。頗るあはれに。そゞろに涙を垂れしむ。

岸姫松轡鑑

朝比奈上使の段

「去りながら欺し討に殺せとは云々」　情を述べ義を説き、如何にも場合の欺し討にする外手なきをいふ、頗るむごし、

「たんまりと」　は滿足にの意、

「來ると其日に身がはりとは」　頗るなさけなし、

「今宵五つ」　は今の午後八時、

「おそよ〳〵と思ふ生漉の戸禊」　ヲヽさうよ〳〵と思ふ氣の意を含めたり、巧

朝比奈上使の段

跡に藤卷只一人。夫の詞用ひてや。司姫の一大事。我子を切て身代りは。末代家の譽ぞや。去りながら欺討に殺せとは。如何に忠義と云ひながら。十七年目に廻り逢ひ。未だたんまりと顔容。見覺える間も有る事か。詞來ると其日に身代りとは。殘忍い無情い兵衛殿。樣子を篤と云ひ聞かせ。其上の事。アヽ否々。一應で得心せねば。今宵五つの間に合はず。逃る共叫ぶ共。討たねばならぬ手詰となり。其彼是が奥の間へ。洩れ聞えなば朝比奈殿。僞首と請取ぬは必定。ソリヤ切たる首に功もなし。ハテナア。不憫ながらも欺して討つが好いわいの。ヲヽ夫れ〳〵。おそよ〳〵と思ふ生漉の戸禊を。明て娘は勇々と。母樣お呼なさるゝは。何の御用で御座んすと。裾搔合はせ座に着けば。い

に過ぎたり、生漉の戸襖は板戸に生漉紙（土を交へずにうずのみにて漉きたるもの）を張りたるふすま「見れば父上すまぬ顔云々」身の上とも知らずにこれを問ふ、一倍のあはれ、

「幸いのよい所へ云々」こゝの母が詞、よく書きたり、

「姿かたちも見納めの云々」これより悉く髪の緣の語にて歎きをいへり、頗る巧みに、頗るあはれに、頗る名文なり、言ふべからず味ふ

とゞ塞き來る胸撫下ろし。詞イヤコレおそよ。今迄とは違ふての。飯原兵衛と云ふ武士の娘。髪容も屋敷風に。アイ〳〵否や申し母様。見れば父上すまぬ顔。何ぞ氣縛れな事でも御座りますかえ。去ればいの。今朝未明より朝比奈三郎義秀殿。賴朝公の上使と有て。當舘に忍ばせし源氏何某の胤。懷胎し給ふ姫の御首切れと有る。畏つて我夫。今宵五つ時に渡す契約。其身代りに左や右と。心を碎く兵衛殿。幸いの好い所へおじやつた其方。イヤサ姫君が御座らねば俄に淋しい。夫であの。其方をお姫様の代りに仕立てゝ置はいの。ドレ〳〵修飾ふて遣りましよと。鏡臺直せば嬉しげに。詞アヽ夫はマア〳〵有難い。長の旅路に草臥て。ツイ取上げのつくね髪。慮外ながらと押直る。姿容も見納めの。形見と思へば胸逼り。詞も涙に暮ながら。後ろに寄りて何氣なく。櫛取上げてすきかへす。心は暗む烏羽玉の。黑髪

べし「詞も涙に」とかけたり、「心は暗む烏羽玉の黒髪」縁の語なり（烏羽玉は黒髪の枕ことば）「後に兀げるぞやと云々」後にといへど後あらぬ、今直ぐに殺す命は、あへない桂水なるべし、桂水は香水の名にてもあるか、命のはかなきをいふ、「逢ふが別れか」會者定離の中、此別れ最もかなし、「前髪も分けていは（結）れぬ」前にかくといひ聞かされぬをいふ、「思ひ返し卷反へし」よくいひたり「悲さつらさを嚙み占めて締まる根取の元結に結びも留めぬ玉の緒は」一唱三嘆の名句、妙味言語に絶す、しらぬ娘に別れの櫛上げ、嚙みしめる血の涙の元結ひに、髪の根は結ひとめても、命の根の結ひ止め難きを如何せん。

分けて。詞「コレハマア中を釣て結やつたの。アイ釣らねば髪が落る故。ツイ結癖になりまして。ヲヽいやいや是では後に兀るぞやと。口には云へど後待たぬ。無敢命は桂水。逢ふが別れか前髪も。分けて云はれぬ親心。思ひ返へして卷反へし。悲さ辛さを嚙み占めて。しまる根取の元結に。結びも留めぬ玉の緒は。一櫛宛に拔櫛の。暫時此世を假髷とも。先には知らぬ下髪も。見交はす許に結立てゝ。髷の後毛を撫付け撫上げ。透を見合はせ隱し持つ。刀すらりと鏡に影。娘は飛退きコレ母様。何の科で切らしやんす。何で〳〵と身を戰慄ふ。詞ヲヽ是れ〳〵娘。嬰兒で別れ今日の今。蘇生て來た大事の其方。夫を殺すは大切な。御主様への忠義じや程に。諦めて命をたもやと切付くる。與茂作一間を駈け出て。母を突き退け娘を圍ひ。詞エヽこりや何とするのじや。コレイノウ。最れ殺して貰ふ迚。育て上

玉の緒は命、「一櫛づゝに抜く櫛の」これ別れの櫛、「此世を假寐」とかけたり、「先には知らぬ」娘の知らぬをいふ、「見かはす」は見ちがへる、「かもじのおくれを」きも共におくる、「刀すらりと鋭に影」此趣向頗る味ひあり、「忠義じやほどにあきらめて」といふ心にも、あきらめれぬ恩愛の情を、強て斷つ武士のならはしこそ、はかなけれ、「殺して貫ふとて云々」尤も至極、「猿繋ぎ」は後手にくゝりし紐を、柱に結びつくるをいふ、「親仁が前に兩手をつき云々」詞を改めて無禮を詫び、譯けを述べて娘の一命

げて連ては來ぬわいの。娘よ來いと手を引て。逃げ出る向ふへ飯原兵衛。ヤレ待たと。云へど押退刎退けて。譯を聞ねば詮方なく。親仁引伏せ縛上げ。傍なる柱に猿繋ぎ。飯原兵衛親仁が前に兩手を突き。段々の我失禮。嬰兒より今日迄。親にも優さる養育の大恩。先以て忝し。心急く儘仔細も云はず。産の親迚我儘に。殺さうと申すは不調法。何をか腹藏まん某。預り居申す大切の姫君。頼朝公より首討つて渡せと有る御使者參り。今天下の亂を失ふ瀬戸際。忝くも其御身代りに立つる娘。ナコレ是れ〳〵。爰の道理を聞き分けて。娘が命をたまはれよ。

詞「エヽ成らぬ〳〵〳〵。成りませぬぞ。テモ偖も侍と云ふ商買は。胴慾な物じやよの。東西子の時湖で助けて後。我子も同前に。コリヤ姉よ〳〵と。十六七年手しほにかけ。祖父樣〳〵とまはせばの。おりやモ可愛うて〳〵。不憫に思ふはアレ只た一人

を乞ふ所、武士の氣質よく見ゐたり、

「瀬戸際」　は危急の場合をいふ。船より出でたる語なるべし、

「エ、ならぬ〳〵云々」　ひたすらかあゆきまゝ、ひたすら聞き入れず、恩愛の情を説く所頗る切に、田舍親仁の氣質よく見ゐたり、「侍といふ商賣は」の語こよなく面白く、「己が此白髮首を云々」といふに至つては、如何なる兵衛も胸にこたふるなるべし、

「瀬減し」　漁人の語なるべし、武王が紂を討つ時、清盛が熊野詣の時など、白魚の船中に入りし事あり、皆これを吉祥とせり、かゝる事より、放ちやるならばしとなれるか、

「獵人も懷に入つた鳥はと

じや。偖己等が毎日漁に出ても。網を未だ下ろさぬ先に。自然と船へ飛込む魚は。瀬減しとて放してやり。何程でも殺しはしませぬ。又獵人も。懷へ入つた鳥は捕らぬと云ふ。可愛想に此娘。血脈の緣が有ればこそ。眞實の親達に廻り合ふたは。コレ祖父樣。お前の蔭じやと悅んで。最前もアノ一間で。手を合して拜みました。拜んだわい〳〵〳〵。コレ〳〵。眞實身代りせいでならざ。己が此白髮首を切て。おそよは助けて下さりませ。コレ拜みまするとの後手に。縛られた手を摩り擦り。道理と思へど聞入れず。おそよが方へ打向ひ。詞「コリヤ〳〵娘。そちを育てしアノ親仁。承引ないも道理ながら。委細の譯は聞通り。手しほにかけし娘なら。只一討に御用に立つれど。幼少より他人の手にて。成人なつたる其方故。親ながらもことを分て言聞かす。諦めて命を吳れい。猶豫ならぬ時宜なれば。一時も早く疾

らぬ」　顔氏家訓に「窮鳥入レ懷人所レ憫」
「時宜」　は場合

「竹生島の觀音堂」　竹生島は近江國西淺井郡にありて、菅浦を去る十八町、周回二十六町ばかりの一孤島なり、此觀音は西國三十番の札所にして、大神宮寺にあり、天平三年行基菩薩の創建、眞言宗なり、

「來國光」　は源兵衛と稱し、天應頃の刀の名工、

「緣頭は紅葉流し」　緣は鐔にあたる所の金具、頭は柄頭の金具、紅葉流しは其模樣なり、

「素袍の片袖押きって云々」　此あたり、御所櫻の辨慶上使の段に似たり、それにより作れるなるべし、

「隙も波(無)の船」　とかけ、

く致せと。詞尖に詰寄れば。おそよ從容に手を支へ。御詞脊きは致さねど。私しや現世で只一目。逢たい御人が御座んする。過つる比ろ源賴家樣。竹生島詣での時。觀音堂に御一宿。島中の娘子共。御茶の給仕に召寄せられ。私も終夜勤めしに。若い殿御が長廊下で。通る私を引留めて。夫れは〳〵恥しい。初めは憎やと思ひしが。遂其人が愛しう成り。爺樣の下さんした。來國光の守護刀。緣頭は紅葉流し。目貫は金の唐子相撲。又逢ふ迄の紀念にと。渡せば先にもその時に。素袍の片袖押切て。詞所を問へばアノ鎌倉と。跡は御立で騷ぎ立ち。名を聞く隙も波の船。甲斐なき戀路と思へ共。忘れがたなく懷かしく。此順禮を幸ひに。鎌倉を見せていのと。云ふたももしや戀人に。廻り合はんと力草。道の間も其人に。添ふ心ぞと樂しみに。肌を放さぬ紀念の衣。是れ見給へと身に添へし。風呂敷包み解く解

「甲斐なき」に櫂（船の縁の語）を含めたり、

「與茂作の縄目を解き云々」其厚恩を謝し、身の因果を恥ぢて、「命の御用差上げませう」といさぎよくいひ切る所、頗るけなげに見えたり、

くと。明けて見せたる素袍の片袖。見るより母は驚きて。一間を見遣れば隼人之助。詞「ホヽ其の夜の紀念は是成かと。守護刀を投出せば。娘は取上げ打眺め。詞「ヲヽ是れじや〳〵申し母様。ヤ何といやる。スリヤ是に相違は無いじや迄。アイナ。ハア悲しやコレ〳〵娘。其方が生れ落るとの。左る御聖に尋れば。佛神へ願ふ申し子は。順禮させば命長しと。聞くと俄に乳母諸共。旅の用意に御上を恐れ。笈摺に國所も書かず。其時持たせし短刀を。今又是を所持するは。現在兄の隼人じやわいの。エヽと驚き口ごもり。餘りの事に呆れ果て。面目も無き次第なり。おそよは立て與茂作の。縄目を解き。申し祖父様。詞「話しを聞けば二ツの年より。假令方なき御苦勞掛け。其大恩も得送らず。産みの親より大切にと。思へど此身の徒で。恥かしい事聞かします。御赦しなされて下さんせ。エイヤ申し父上様。命の御用

「君の御馬前」の討死は、武士の最も名譽とし、最も望みし所、

「此子を育てしを云々」親御の頼み娘の得心に、漸く納得して、拾ひ上げ育て上げし來歴を述ぶ、またなくあはれなり、

「戌亥」は西北

「叡山颪」は湖水の船の最もをそるゝ所、往々難破の災あり、

差上げませう。ホヽ立派な一言能く言ふた。出來いた〳〵。コリヤ娘。姫君の身代りは。我人君の御馬前。討死致たす晴れの場所。武士の望む所。女ながらも義は一つ。其意を定め覺悟致せと。刀を提げて立向ふ。與茂作見るより走り寄り。詞「マアマア待つて下さりませ。御待なされて下さりませ。實の親御の切しやる事。娘も亦得心の事なり。したがコレ。此子を育てし概畧を話しませう。ヱヽ十七年あと竹生島へ渡たる人。夥しき參詣群衆。偖八ツ過ぎの比。戌亥よりおかしな雲が出ると疾や。叡山の吹颪。ソリヤと云ふ間も湖の。船は木の葉の散る如く。否やもう〳〵。口で言ふ樣な事じや御座りませぬ。其中に稚兒を抱きし女中。抱へ帶にてぬしの肌へ括りあけ。まさかの時は泳がんと。其身拵へは好けれ共。中々及ばぬ事じや。其れと見るより漁船を漕ぎ付け。引乘せて助けたが彼女中。船中騷

動の砌。船端で急所を打ち。骨の折れたる樣子も有り。何が抱へて我家へ伴ひ。醫者よ藥と騷げ共。五躰の痛み物言はず。其子を敎へ涙を流がし。賴む〳〵と云ふ事か。其儘往生遂げられた。ア南無阿彌陀佛〳〵。夫れにつけても湖の船。皆々無事で怪我もなく。是觀音樣の御助。アヽ有難い忝い。が此稚兒殿。段々成人するに付け。實の親御へ手渡しと。思へど所も知れず。月日重る其中に。此頃不思議な夢の告。御出家が來て枕に寄り。手を取る許になされたで。俄に踏み出す西國順禮。廻り〳〵て親達に。逢ふが合圖に殺すとは。宿世の罪が廻り來た其方の因果。附添ひ廻る己も因果。最ふ此上は死で未來へ連れ立ふ。潔ふ其方も死にや。エヽ泣くな。アイ。泣きやんな〳〵〳〵。土產には廻り殘しの御詠歌。三十番は札を打ち。今三番を唱へての。コレ往生遂げや。イヤ申し御二方樣。詠歌三番唱へる間。

「西國順禮」　順禮の事は委しく前にいへり

「逢ふが合圖に殺すとは」　身にしみてむごし。

「宿世の罪が廻り來た云々」　因果應報車輪の廻るが如し、めぐりの語よく用ひたり、

「詠歌三番唱へる間」　此

巡禮歌をうたはしむる趣向、頗る上出來、一層の悲慘を添ふ、

「力とも、杖折かゞみの親子づれ」　とつゞけたり、「はし折かゞみの兄弟」などいへるに對して書ける句なるべし、

「佛間へこそは入相の無常をつゞる鐘の音」　此かけ方つゞけ方は紋切形、

「八千年や柳に長き命寺」

西國卅一番近江國長命寺、

「八千とせ　や柳に長き命寺はこぶあゆみのかざしなるらん」蒲生郡にありて、聖德太子の開基なりといふ、

「これが何の長い命云々」

此巡禮歌に合しての歎き、頗る妙

「十七年目に　泣きやんだ云々」「又新しう　悲しみを云

暫時御延ばし下さりませ。ホヽ今暫らく間も有れば。佛間へ向ひ急がれよ。イザ案内せん兩人と。前に進めば與茂作は。おそよが肩を力共。杖折かゞみの親子連れ。伴なひ佛間へ入相の。無常を告ぐる鐘の音。八千年や柳に長き命寺。此方の一間に立ち聞く母親。詞「是が〳〵何の長い命。丸々生きて十八年。二ッの年に別れたを。死に別れじやと今朝迄も。片時泣かぬ隙もなく。今日と云ふ今日半時程。親子名乘りの笑ひ顏。十七年目に泣やんだ。餘りを今又此樣に。生中ちらりと顏見せて。又新らしう悲しみを。百倍添へて泣かすのか。彼の子と私は前の世で。何うした敵が結ぼれて。親子と成て來たぞいのと。泣く〳〵覗くも及腰。歌も後れて觀音寺。遠き國より運ぶ歩行を。詞「コリヤ〳〵娘。遠い國から遙々と。殺しに計此祖父が。連れて來たかと慮ふ程。己りや悲しうて〳〵ならぬ。イヤなう祖父樣。最ふ

三十三番美濃の谷汲。詠歌も終。名殘りに私しが詠ひませう。イヤ申し。父上樣も來て給べと。呼ぶ聲聞いて母親は。今が此世の別れかと。思へば一層涙も出ず。身も世も有られずうろ〳〵と。足爪立て差覗き。身も急せる中詠ひ出す。今迄は親と賴みし與茂作が。是れのふ暫時と泣く聲も。音はばつさり奥の口。思はずわつと聲を上げ。身を投伏して娘が首。互に手をかけ緊搦つき。前後正躰取亂し。絶入る計り泣叫ぶ。次の間より隼人之助走り出。父が前に兩手を着き。詞某妹と不義の振舞聊か無し。最前の守護刀は。御主人鶴ケ岡下向の夜道。何者共知れず北條へ。打かけし手裏劍。立たぬを幸ひ某が。密かに拾ふて立歸る。然るに先刻妹が。紀念に遺りしと云ひし刀。目貫緣頭寸分違はぬ。シヤ是幸ひ。其夜忍び合ふたるは。兄弟と思はせなば。執着の念も晴れ。清く最期をさせんものと。ナソレ思ふ

「々」とは何たる名句ぞ、酸鼻に堪へざらしむ。

「歌も後れて觀音寺」　詠歌の終りが此世の終り、屠所の歩みの歌の聲、豈後れざるを得んや、「後れて」の語下の、「遠き國より」の詠歌にひゞく、味ふべし、觀音寺は西國三十二番近江國觀音寺「あらたうとみちびきたまへ觀音寺遠き國よりはこぶあゆみを」栗太郡にありて、聖德太子草創の古刹なりといふ、

「遠い國から遙々と云々」　此歌きも詠歌をうけて來る、上々の手際、

「美濃の谷汲」　は西國三十三番、美濃國谷汲寺「今までは親をたのみしおひづるをぬぎておさむる美濃の谷汲み」、大野郡にありて十一面觀音、

「今迄は親とたのみし」これも詠歌より來る、「隼人之助走り出で云々」兄の詞も血の涙、「御主人鶴ケ岡下向の夜道云々」　時政が隼人と共に繪馬堂に繪馬を献ぜし歸途朝比奈が手裏劍をうちかけし事、前に見にたり、

「針を含み」　は恨みを含むをいふ、

も姫君御大切。始めて逢ふた妹に。睦じき名告も致さず。別れし事の不憫やと。語るを聞て母親も。父も安堵に晴るゝ胸。一間の内に聲有つて。詞ヤア〳〵方々。夫れへ參つて朝比奈が。物語る仔細有りと。間の襖踏開き。司姫を小脇に抱へ。勢ひ込んで義秀が。凜然と立たる有樣に。はつと人々秀景より。與茂作は只仰天に。顏打詠めて詞なし。始終を聞て司姫。自ら長らへ有し故。夫婦に苦勞を爲すわいの。自害せうにも朝比奈に押止められ。死なれぬ事なら身代りに。立てたもつた言譯に。尼とも成て吊らはふ。夫れがせめての云ひ譯ぞやと。身を悶へてぞ伏沈む。朝比奈兵衛に打向ひ。某若年の比。賴朝公の御前にて。不圖爭論しが意趣となり。年月互ひに針を含くみ。左程遺恨の中なれど。此身代りは請取らにやならぬ。其仔細と云ふは。最前の守護刀。是へ納めて見られよと。云ふに不思議は覺えの

「しつくりとさしもの兵衛」とかけたり、「一日の情けに百年の命を捨つる」　白氏長慶集に「爲二君一日恩、悞二妾百年身一」

「二念もつかず」は忘れて思ひ出さぬをいふ、こゝらから見ると、男の方が薄情か、二念の語一筋に應ず、

「心の千倍胸一盃」といい

鞘。件の刀に緊りと。さしもの兵衛も不審く。仔細如何にと尋ねば。朝比奈思はず涙を浮め。まことや一日の情に百年の命を捨るとは此事。詞「其比竹生島御供の時。一献酌みし微醉紛れ。最前娘が話した通り。我も紀念を誰がのやら。引裂き遣りし素袍の片袖。其後二念も付かず暮せしに。娘心の一筋に。我を夫と思ひ詰め。海山越えて來たりしとは。是りや過分なぞよ忝ない。一間の内で義秀が。聞く苦しさは如何計り。今一度顔見せたらば。何程か悦ばんや。身躰轉倒すれ共。イヤ〳〵重き役目の此義秀。又二ッには物語り致しなば。未練を起して姫君の。御身代りの妨げ共ならんかと。耐へ〳〵て居たはやい。赦して吳れ了簡せよ。武士の胤程有る娘。草村に生立ても。詞違へず來りしは。義秀が女房耻かしからず。汝が其貞心を妻と定め。一生無妻で暮らすぞと。心の千倍胸一盃。鬼を欺く兩眼に。流

へり、

「鬼を欺く兩眼に」　よき句なり、玉藻前にも「血筋の別れ鷲塚が、鬼を欺く兩眼に、たばしる涙云々、」

「布引の女瀧男瀧」　攝津國八部郡布引山の半腹にあり、雌瀧は高さ七丈餘幅二間、雄瀧は其上三町ばかりにして、高さ十五丈幅十三尺、

「拜領せし鶴の丸」　朝比夷に鶴の丸の紋所は由來あり、今其書無ければ引くを得ず、後にいふべし、

「草葉の陰」　の事、委しく前にいへり、

「姫に着せたる二世の緣」　順禮は二世安樂の所願にして、其おひづるを、娘と姫とに着せたるゆゑいふなるべし、

涙は布引の。女瀧男瀧も斯やらん。飯原兵衛詞を正し。詞八幡太郎義家公より。拜領せし鶴の丸。何と聟引出に進ぜたし。不肖ながら御請有らば。草葉の陰でも嘸や嘸。娘が悦び如何計りと。半分聞かず何が偖。詞不中を直ほす彼が媒介。宿意は消して聟舅。いざ〳〵隼人同道せんと。首桶抱え立出れば。藤卷暫時と押留め。詞コレ申し。御前は濟でも彼の姫君。ホヽヽヽ。其りや此秀景が思案あり。コレコレ與茂作。聞かるゝ通りの次第なれば。其方隱匿吳れまいか。ハイ〳〵何が偖〳〵。シタガ大事の御姫樣。外に御供は。否ヤ〳〵大勢附ては人目に立つ。畏れながら姫君を。其方の娘に仕立。今宵の内に一宿でもと。聞くより肌の笈衣を。娘も伴れる心ぞと。姫に着せたる二世の緣。父は死骸を搔き懷き。結ぶ涙に與茂作は。順禮札を胸に上せ。娘が廻り殘したる。札所は繼いで廻はれ共。接れぬ命

亡躰に。去らばと云ふも咽び聲。旅へ立つ人止まる人も。涙果しは泣別れ。反らぬ教へ會者定離。哀別離苦は法の縁。迷はぬ道ぞ頼母しき。

「涙果しは泣別れ」とかけたり、「會者定離」は會ふ者は必ず離るゝといふ佛教の語「生者必滅會者定離」「愛別離苦」は親しみ愛する者に、生き別れ死に別れなどする苦みをいふ、佛教の語にて四苦の一、かくの如き事が法の縁となりて、佛道に入るなり、されば「種々因縁而求佛道」などいへり、

淨瑠璃通解第六篇別記

求塚　此故事は萬葉集に見えたれど。左に大和物語を引く。

昔津の國に住む女ありけり。それをよばふ男二人なんありける。一人は其の國に住む男。氏は菟原になんありける。今一人は和泉の國の人になんありける。氏は血沼(ちぬ)となんいひける。かくてその男ども。年齡顏容貌人のほど。唯同じばかりなんありける。志の優らんにこそは逢めと思ふに。志のほど唯同じやうなり。暮るれば諸共に來逢ひぬ。物遣すれば唯同じやうにおこす。いづれ優れりと云べくもあらず。女思ひ煩ひぬ。この人の志のおろかならば。いづれにも逢まじけれど。此も彼も月日を經て。家の門に立ちて。萬に志を見えければしわびぬ。此よりも彼よりも。同じやうに遣する物ども。取りも入れねど。いろ〳〵に持ちて立てり。親ありて。かく見苦しく年月を經て。人の嘆を徒に負ふもいとほし。ひとりひとりにあひなば。今一人が思ひは絶えなんといふに。女こゝにもさ思ふに。人の志の同じやうなるになん。思ひ煩ひぬる。さらばいかゞすべきといふに。當時生田川のつらに。平帳をうちてゐにけり。かゝればそのよばひ人どもを。よびにやりて。親のいふやう。誰も御志の同じやうなれば。このをさなきものなん。思ひ煩ひにて

侍る。今日いかにまれ。この事を定めてん。或は遠き所よりいまする人あり。或は此處ながら其いたつき限なし。此も彼も。いとほしきわざなりといふ時に。いとかしこく喜びあへり。申さんと思う給ふるやうは。この川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射あて給へらん人に。奉らんといふ時に。いとよき事なりといひて。射る程に。一人は頭の方を射つ。今一人は尾の方を射つ。當時いづれといふべくもあらぬに。女思ひわづらひて。

住みわびぬわが身なげてん津の國の生田の川は名のみなりけり

と詠みて。この平帳は。川に臨みてしたりければ。つぶりと落ち入りぬ。親あわて騷ぎの丶しる程に。このよばふ男二人。やがて同じ所に落ち入りぬ。一人は足をとらへ。今一人は手を捕へて死にけり。當時親いみじく騷ぎて。取り上げて泣きの丶しりて。はふりす。男どもの親いふやう。同じ國の男をこそ。同じ所にはせめ。他國の人のいかでか。この國の土を犯すべきと。いひて妨ぐる時に。和泉の方の親。和泉の國の土を船に運びて。此處にもて來てなん。遂に埋みてける。されば女の墓をば中にて。左右になん男の塚ども。今もあんなる。かゝる事どもの昔ありけるを。繪に皆書きて。故后の宮に人の奉りければ。これがうへを。皆人々この人に代りて詠みける云々。

一

えびす　七福神の一にして商賣の神なり。伊諾岐伊諾冊兩神の御子にして。足なへにて

流され。給ひし。蛭子の御事なり。といふ說あれどいかゞ。

貞德文集「此三幅對掛畫。毘沙門辨財天惠比須三郎相見え候云々。此神魚を釣り給ふよし見えねども、海上に放ちすてられ給へば。漁人の如く作れるなるべし」

玉かづま「源平盛衰記に。成經康賴俊寬の。鬼界が島に流されてある事をいへる段に。かの嶋に鬱岳といふ山あつて。其山に夷三郎殿と申す神を。いはひまつりて岩殿となづくといへり。神祇官年中行事にも。戎三郎殿とあり。此神の事いといぶかし。神に殿と申すも。めづらしき稱なり」

傍廂「拾玉集に。

西の海風心せよ西の宮あづまにのみやえびすさぶらふ

こは攝津國武庫郡西の宮神をよめるにて。さふらふは侍候伺守などの意にて。うかゞひまもり居る事なり。さるを軍物語文などに。夷三郎殿とあるは。をかしき事なるを。近頃には。夷三郎左衛門殿といふ人あり。いつの世の贈官ならん。いと〳〵おかしき事にぞありける」

佛頂面　和訓栞に「輟耕錄。凡納婢僕。初來時曰搖盤球。言不撥自動。稍久曰盤珠。言撥之則動。既久曰佛頂珠。言終日凝然雖撥之亦不動」

勾引　和訓栞に「カドフ。新撰字鏡に詿をよめり。折曲也と見えたり。後撰正義に拘引也といへり。今人を勾引するをカドハカスといふこれなり。略人といふも同じ。後撰集に「山風の花の香かだふ」といへる。韋莊が詩に「勾引花枝笑凭牆」といへる意なるべし。カダフは加多不の假名なり」

沙門　桑門に同じ。在菩提人の稱なり。故に比丘比丘尼をいひ。或は佛を大沙門と稱せり。四十二章經に「佛言、辭親出家。識心達本。解無爲法。名曰沙門」と見え。阿含經に「捨離恩愛。出家修道。攝御諸根。不染外欲。慈心一切無所傷害。遇樂不忻。逢苦不戚。能忍如地。故號沙門」

慧亮眉間を破つて佛に祈る事　元亨釋書に「仁壽帝二皇子爭儲位。帝二皇子鬪藝勝者得立。兄惟喬弟惟仁敵不決。乃賭力士相撲。於是乎惟仁有羽林郎將善雄。惟喬武衛將軍那都羅。膂力過善雄。惟仁付亮乞法救。亮乃修大威德護摩法。惟喬又請濟闍梨修密供。都下皆知二沙門加二皇子也。期日二人角力。那都羅身體壯大。善雄不及。群臣以爲惟仁失也。于時惟仁馳使告亮。亮即獨鉆杵鑿破頭腦。投爐火而供持念。須臾忽大威德尊。所騎青牛大吼一聲。此時宮中善雄得勝。惟仁立爲太子。貞觀帝是也」

賴豪の怨靈鼠となる　源平盛衰記に「白川院御即位の時后腹の皇子渡らせ給はざりければ。主上御心元なく思し召し。貴僧と聞し召しければ三井寺の實相房の賴豪阿闍梨

を召されて。汝皇子祈り出でんや効驗あらば勸賞は乞ふによるへしと。仰せ含めらる。頼豪畏つて申す。年來深き望みはべり。勅定相違なくば。皇子の御誕生勿論の御事なりと奏す。主上大に悅び思し召して。勸賞乞ふに依るべしと。重ねて勅約あり。頼豪悅んで本寺に歸り。年來所持の本尊の御前にして。肝膽を碎きて祈り申しける程に。中宮たゞならぬ御事と承りて。いよ〳〵皇子御誕生と。黒烟を立てゝ祈り申す。月滿ちおはして承保元年十二月十六日。いと安かに皇子御誕生あり云々。頼豪はからき骨を碎きて。皇子をば祈り出だしまゐらせたれども。戒壇は御免なし。大惡心を起して。餓死しけるぞ無慙なる。去る程に。山門又皇子を祈り出し奉り。御位に即かせ給ひたりければ。頼豪が死靈もいとゞ怨靈となり。山門といふ處があればこそ。我寺に戒壇をこそゆるされね。されば山門の佛法を亡さんと思ひて。大鼠となり。谷々坊々みち〳〵て。聖教をぞかぶりくひける。これは頼豪が怨靈なりとて。上下こゝかしこにて。打殺し踏殺しけれ共。いよ〳〵鼠多くいで來て。おびたゞしなんとはいふばかりなし。此事只事にあらず。怨靈をなだむべしとて。鼠の寶倉を造つて。神にいはひ奉る。さてこそ鼠もしづまりけれ。圓宗の敎を學して成佛す頼豪が。由なき戒壇だてゆゑに。鼠となるこそおかしけれ。

丙午　丙午の女は其夫を殺すと。本朝俚諺などにも見え。一般にもしかいひはやせど。さ

せる本說もなかるべし。丙は正字通に陽火也と見え。午もまた陽なり。男は陽女は陰としたるに。其女が盛なる陽の重なれる年に生るれば。男を凌ぐなどいへるよりにてもあらんか。丙午の年必火災ありといへるは。丙も午も陽火なるゆゑなるべし。五雜俎に吹劍錄を引きて「丙午丁未年。中國遇之必有災。然有不盡然。卽百六陽九亦如是耳」

淨瑠璃通解第六編終

明治三十七年六月十八日印刷
明治三十七年六月廿一日發行

淨瑠璃通解第六編
定價金參拾五錢

著作權所有

著者　山本信吉
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社　博進社工場

發兌元　東京日本橋本町　博文館

謡曲及能狂言

大和田建樹君著

增補 謡曲通解

全一册 背皮上綴 大判一七八六頁 正價壹圓八拾錢 小包送料貳拾錢

目次

總論○歌舞の起原○猿樂の起原○能の大成○能の作者外五章
第一○高砂○田村○東北○道成寺○鵜飼○熊野外廿四番
第二○老松○八島○江口○望月○紅葉狩○葛城○知章外十九番
第三○白樂天○服○楊貴妃○俊寛○蝉風○雛波○放下僧外十九番
第四○養老○敦盛○井筒○關寺小町○石橋○加茂○木賊外廿一番
第五○三輪○鵜○芭蕉○草紙洗○小町○鳥帽子折○白髭外廿三番
第六○龍田○兼平○誓願寺○葵上○禪師曾我○佐保山外廿九番
第七○玉井○橋辨慶○檜垣○東岸居士○國栖○江島外廿八番
第八○蟻通○大佛供養○女郎花○定家○錦道○繪馬外廿九番
第九○鴉羽○悪源太○朝顔○佐々木○鐘引○紅葉○鵜岡外十三番

大和田建樹君著

謡曲文粋

全一册 紙皮上綴 小判 五三〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

其文は金玉其曲は金繡誰か謡曲を一讀して三嘆せざるものあらん、大和田先生其文中に就き、粋の粋なるものを拔き、之を四季戀雜の六種に類別して一々に題を設け、文の妙處に批圈して味ふべく誦すべき點を示されたり讀者若し夫れ首卷に掲けられたる、謡曲の國別、謡曲の古名、謡曲作者類別等を一覽せは更に便益を得給ふこと多からん

大和田建樹君著 彩色木版寫眞銅版挿入

謡と能

全一册 洋並綴 大判 二七六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

幸田露伴君校訂

狂言全集

（上卷狂言記、中卷續狂言記、下卷狂言記拾遺）

全三册 和上綴 中判一三〇〇頁 正價一册五拾錢 郵税一册八錢

▲上帙入合本 正價壹圓六拾錢 小包送料拾五錢

上の卷

（一）○鳥帽子折○ぎんし聟○貰聟○萩大名○七騎落 ○ひめ糊○拔殼○宗論○酢薑○鹿狩
（二）○渡福○苞山伏○二千石○内沙汰○茶壷 ○こんくわい○をばが酒○悪坊○胸突○生捕鈴木
（三）○末ひろがり○どごんさう○かき山伏○太刀ばい○八句連歌 ○かくすい○法師物くろい○薩摩守○どぶかつちり○佛師
（四）○あいやい袴○なすの與市○かさの下○文山だち○かきうり ○粟田口○つり女○あかゞり○ふれふな○二人大名
（五）○羯鼓炮碌○文蔵○富士松○長光○すれ萱 ○伊文字○武悪○花子○腹立てず○縄綯

中の卷

（一）○連歌毘沙門○秀句大名○居抗○飛越新發意○鶯 ○河原新市○子盗人○荷文○針立雷○黒塗女
（二）○蛭子大黒殿○鶏立江○雁争○菊花○見物左衛門 ○成上物○寶笠○土産鏡○鱸庖丁○瓜盗人
（三）○岡太夫○竹子争○朝比奈○眼袋○鬼継子 ○つんぼ座頭○金岡○こんぶ布施○六人僧○[illegible]聟
（四）○目近大名○櫻静○六地藏○柑子俵○膏薬錬 ○俄道心○禁野○猿智勾當○狐塚○どちはぐれ
（五）○牛馬○入間川○路連坊主○箕かづき○蟹山伏 ○素襖落○磁石○三人片輪○算勘聟○節分

下の卷

（一）○三本柱○文相撲○盗人連歌○梟山伏○通圓 ○かりかれ○樋のさけ○横座○枕物ぐろひ○手負山賊
（二）○松の精○舶磐○唐人相撲○どもり○祇園 ○老武者○石神○松ゆづり葉○なきあま○鬮罪人
（三）○棒しばり○水論聟○水汲新發意○若市○比丘貞 ○塗師平六○煮物覺○合柿○三人百姓○禰宜山伏
（四）○餅酒○鼻取相撲○樂阿彌○犬山伏○料理聟 ○茶盃拜○人馬○止動方角○しゆでう○ゑさし十王
（五）○對馬祭○たこ○鐘の音○腰いのり○佐渡狐 ○八尾地藏○布施ない○米市○鎧○双六僧

大和田建樹君著

能のしをり

（全部六冊洋上綴中判一冊二百餘頁）

●一冊金四拾錢 ◎三冊壹圓拾錢 ●全部 圓拾錢 ▲郵税一冊弐錢宛

能の種類、役者、地謠囃子分、舞臺と橋掛、形、位と緩急、中入と物着、次第、名乘笛、一聲、出方、早笛、太鼓、下羽、來序、亂序、あしらひ出し、早鼓、祝詞、舞、舞働、翔、祈、立廻、イロへ、幕、面、裝束、作物、小道具、替の形、囃子と仕舞

一の卷
- ○總説
- ○翁
- ○三輪
- ○田村
- ○竹生島
- ○高砂
- ○兼平
- ○江口
- ○八島
- ○羽衣
- ○百萬
- ○東北
- ○安宅
- ○猩々
- ○蘆刈
- ○安達ヶ原
- ○蟻通
- ◎船辨慶

二の卷
- ○邯鄲
- ○小鍛冶
- ○清經
- ○鉢木
- ○熊野
- ○卷絹
- ○杜若
- ○隅田川
- ○俊寛
- ○海人
- ○花筐
- ○鞍馬天狗

三の卷
- ○橋辨慶
- ○養老
- ○四王母
- ○春榮
- ○忠度
- ○松風
- ○道成寺
- ○富士太鼓
- ○七騎落
- ○山姥
- ○蜘蛛
- ○紅葉狩

四の卷
- ○葛城
- ○賀茂
- ○花月
- ○景清
- ○巴
- ○小袖曾我
- ○實盛
- ○櫻川
- ○三井寺
- ○草子洗
- ○葵上
- ○唐松
- ○攝待
- ○放下僧
- ○望月
- ○野守
- ○鵜飼
- ○善界
- ○紅葉狩
- ○帽子折

五の卷
- ○嵐山
- ○項羽
- ○少督
- ○盛久
- ○賴政
- ○井筒
- ○住吉詣
- ○雲雀山
- ○熊坂
- ○柏崎
- ○阿漕
- ○殺生産
- ○善知鳥
- ○紀上

六の卷
- ○大佛供養
- ○國栖
- ○龍田
- ○羽衣
- ○斑女
- ○朝長
- ○法師
- ○藤戸
- ○大原御幸
- ○砧
- ○大江山
- ○丸山

文藝雜著

大和田建樹君著

日本歌謠類聚

全三冊背皮上綴 正價一冊拾錢 中判二〇四六頁 郵税一冊拾弐錢

我國開闢以來二千五百年間の歌謠は載せて本書にあり、時代を以て古今を分ち、種類に依て雅俗を別にし、一讀人をして照々其沿革を詳にせしむ、大和田先生が之を輯むるに幾星霜の勞苦を費されしかは、請ふ一本を繙て實驗あらんことを

長井金升君校訂

俗曲大全

全一冊背皮上綴 正價六拾錢 中判一〇九四頁 郵税拾六錢

目次
- ○義太夫の部
- ○富本節の部
- ○常盤津節の部
- ○長唄の部
- ○端唄の部
- ○小唄惣まくり
- ○一中節の部
- ○園八節の部
- ○大津絃節の部
- ○新内節の部
- ○都々逸の部
- ○流行唄の部
- ○情歌
- ○河東節の部
- ○清元節の部

大一座

博文館編輯局編纂

聲曲自在

彩色木版寫眞銅版挿入 全一冊洋並綴 正價貳拾五錢 大判 二四八頁 郵税六

博文館編輯局編纂

琴曲獨稽古

彩色木版寫眞銅版挿入 全一冊洋並綴 正價貳拾五錢 大判 二四八頁 郵税六

鶯亭金升君著

都々逸一千題

全一冊紙皮上綴 正價參拾五錢 小判 五六〇頁 郵税六

鶯亭金升君著

風雅文庫

全部六冊小判洋裝紙皮金文字入上製約三百頁 正價（一冊貳拾錢 六冊壹圓拾錢）郵税一冊四錢宛

第一編 ●都々逸の栞 第四編 ●狂句の栞
第二編 ●冠句の栞 第五編 ●狂體句の栞
第三編 ●狂歌の栞 第六編 ●雜俳の栞

水谷不倒君著

（寫眞銅版四頁挿入）

竹本攝津大掾

全一冊和裝上綴 正價四拾錢 中判 一二六頁 郵税八錢

攝津大掾が少年より身を起して藝人社會に投じ、千辛萬苦今日の大名を博したる其經歷、彼が平常の行狀、得意の語り物、細大漏さず一面より見れば大掾が傳にして一面より見れば實に一編の立志談、又最近五十年間に於ける人形淨瑠璃の變遷消長より文樂座の沿革を窺ふ本書に限るべし

淨瑠璃集

義太夫百番

水谷不倒君校訂
饗庭篁村君校訂

全一冊洋布上綴正價壹圓
小判 六七六頁 郵税拾貳錢

次目

○凱陣八島國性爺
○唐船噺今國性爺
○大職冠文武五人男
○賀古敎信七墓廻孕盤
○曾我五人兄弟平家女護島當流小栗判官石節盃
○浦島年代記松風村雨束帶鑑狩衣本地
○大原問答寄葉笛持統天皇歌軍法釋迦如來誕生會
○雪女五枚羽子板

近松時代淨瑠璃

全一冊脊皮上綴正價六拾錢
中判 一〇八頁 郵税拾六錢

次目

○生玉心中槍の櫻三重惟子心中萬年草
○博女耶波枕清十耶五十年忌歌念佛
○紙屋治兵衛天の網島心中双は氷の朔日おふさ重井筒
○淀鯉出世瀧德丹波與作與兵衛おかめ緋縮緬卯月の紅葉
○堀川波の鼓梅川冥途の飛脚夕霧阿波鳴渡
○日本振袖始傾城酒呑童子聖德太子繪傳記
○日本武尊吾妻鑑室町千疊敷源氏十二段長生島蓬
○最明寺百人上臈吉野忠信門出八島
○嫗山姥雙生隅田川傾城反魂香

近松世話淨瑠璃

博文館編輯局校訂

全一冊脊皮上綴正價六拾錢
中判 一〇四頁 郵税拾六錢

次目

○曾根崎心中山崎與壽の門松薩摩歌
○槍の櫻三重惟子心中萬年草
○博女耶波枕清十耶五十年忌歌念佛
○紙屋治兵衛天の網島心中双は氷の朔日おふさ重井筒
○淀鯉出世瀧德丹波與作與兵衛おかめ緋縮緬卯月の紅葉
○堀川波の鼓梅川冥途の飛脚夕霧阿波鳴渡
○日本振袖始傾城酒呑童子聖德太子繪傳記
○日本武尊吾妻鑑室町千疊敷源氏十二段長生島蓬
○最明寺百人上臈吉野忠信門出八島
○嫗山姥雙生隅田川傾城反魂香

續近松淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

全一冊脊皮上綴正價六拾錢
中判 一〇九〇頁 郵税拾六錢

次目

○百日曾我氏烏帽子折切
○源長蟬丸者女腹
○天皇職人繪草紙鑑
○吉野都女神留多記
○峨眉山會稽國志
○歌加留多記
○曾我中二枚扇八景
○明心天皇職人繪草紙鑑
○傾城島原三國合戰
○本朝平河内通
○井筒業平河内通
○後太平記十八卷四津國女夫池
○女殺油地獄
○信州川中島合戰
○心中宵庚申

近松二世淨瑠璃集

水谷不倒君校訂
牛

全一冊脊皮上綴正價六拾錢
中判 一〇九〇頁 郵税拾六錢

次目

○お茂兵衛戀八卦柱暦
○おさんひとと心中卯月の潤色
○お二耶兵衛今宮心中百合若大臣野守鑑
○役行者大峯櫻
○山城國畜生塚
○蘭奢待新田系圖
○三日太平記
○萩大名中龜傾城敵討
○道中山嘶
○時代織室町錦繡

並木宗輔淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

全一冊皮脊上綴正價六拾錢
中判 一〇四〇頁 郵税拾六錢

次目

○道成寺現在蛇鱗
○七條河原釜淵雙級巴
○日條連時記兒硯
○北賴登記
○安倍宗任松浦
○後三年奥州軍記
○軍法富士見西行
○菊萱桑門筑波鑠
○一休蟾川本朝壇特
○那須與市西海嘶山
○丹生山田青海
○桶昔飛硯
○一津國長柄人
○谷嫩軍記柱

紀海音淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

全一冊脊皮上綴正價六拾錢
中判 一〇一〇頁 郵税拾六錢

次目

○奥州安達原
○お花七京羽二重娘氣質
○新版歌祭の時文
○東海道七里濱
○替唱歌糸

次目

○末廣十二段
○殺生石
○八百屋お七
○賴光新跡目論
○傾城國性爺
○花山院都巽
○鎌倉三代記
○神功皇后三韓責
○吳越軍談
○東山殿室町合戰
○傾城無間鐘
○小野小町都年玉

○百人一首
○忠臣青砥刀
○三井寺開帳
○本朝五翠殿
○曾我姿富士
○甲陽軍艦今樣粧
○義經新高館
○鎮西八郎唐土船
○心中二ツ腹帶
○玄宗皇帝蓬萊鶴
○難波橋心中

水谷不倒君校訂

◉竹田出雲浄瑠璃集

全一册背皮上綴 中判一〇四六頁 正價六拾錢 郵税拾六錢

次目

○小町炭燒深草土器師七小町
○白髮實盛 黑髮實盛 加賀國篠原合戰
○江戸文七髮結 大阪文七紺屋 男作五雁金
○太平記 網目 大塔宮鐙
○大內裏大友眞鳥
○南朝正平四年北朝貞和五年太平記菊水の卷

○三莊太夫五人孃
○甲賀三郎窟物語
○小栗判官車街道
○雙蝶々曲輪日記
○菖蒲前操弦
○右大將鎌倉實記
○諸葛孔明鼎軍談
○時代世話新薄雪物語

水谷不倒君校訂

◉文耕堂浄瑠璃集

全一册背皮上綴 中判一〇二〇頁 正價六拾錢 郵税拾六錢

次目

○河內國姥火
○佛御前扇車
○三浦大輔紅梅靮
○信州姥拾山
○鬼一法眼三略卷
○須磨都源平躑躅
○車還合戰櫻

○應神天皇八白旗
○敵討襤褸錦
○行平磯馴松
○今川本領猫魔館
○將門冠合戰
○伊豆院宣源氏鏡
○敵討御米太鼓

水谷不倒君校訂

◉江戸作者浄瑠璃集

全一册背皮上綴 中判一〇六〇頁 正價六拾錢 郵税拾六錢

次目

○河井正宗由來 芭蕉翁俳諧濫觴 志賀敵討
○矢口後日𣏐御 靈新田神德
○伊達競阿國戯場
○宇賀道者源氏鑑
○吉野靜人目千本
○狸和尚勸化帳 化地藏畧緣記 化競丑滿鐘

○糸櫻本町育
○源氏大草紙
○靈驗宮戸川
○石田詰將棊軍配
○褶重血紅跋
○自來也物語
○鏡山舊錦繪

博文館編輯局校訂

◉浄瑠璃名作集

全一册背皮上綴 中判一〇〇〇頁 正價六拾錢 郵税拾六錢

次目

○菅原傳授手習鑑 竹田出雲
○妹脊山婦女庭訓 近松半二
○關取千兩幟 近松半二
○蘆屋道滿大內鑑 竹田出雲
○本朝廿四孝 近松半二
○ひらがな盛衰記 文耕堂
○伊賀越道中双六 近松半二
○太平記忠臣講釋 近松半二
○御所櫻堀河夜討 文耕堂
○義經千本櫻 竹田出雲
○壇浦兜軍記 長川千四
○小野道風青柳硯 竹田出雲

幸堂得知君校訂

◉忠臣藏浄瑠璃集

全一册背皮上綴 中判一〇八〇頁 正價六拾錢 郵税拾六錢

次目

○碁盤太平記 近松門左衛門
○假名手本忠臣藏 竹田出雲
○いろは歌義臣鑑 中村阿契
○鰈方武士鑑 近松半二
○忠臣いろは實記 福內鬼外
○忠臣墳盟約大石 若竹笛躬
○忠臣後日噺 北脇素宜
○忠臣金短册 並木宗輔
○難波丸金鷄 中村阿契
○太平記忠臣講釋 近松半二
○いろは藏三組盃 近松半二
○廓景色雪の茶會 梅野下風
○忠臣一力祇園曙 芝屋芝叟

饗庭篁村君著

◉巢林子撰註

全一册洋並綴 大判四四二頁 正價八拾錢 郵税拾錢

▲特製本 洋布上綴 正價壹圓 郵税拾貳錢

▲大坂五行義太夫本

上等半紙　木版刷　○正價一枚金參厘五毛の割　郵税一册貳錢　五八枚以上各一錢宛▼

藝題	紙數	藝題	紙數	藝題	紙數
忠臣藏 鶴ケ岡	一九	先代萩 政岡忠義	四〇	桂川連理柵 帶屋	五九
同 桃井館	二三	涙脊山 山掛合	六一	夕霧 揚屋	二三
同 けんくわ場	四六	同 鱶七使者	二八	戀緋鹿子 八百屋の段	二九
同 鹽谷館	三四	同 竹に雀	三五	八百屋献立 おちよ半兵衛	三四
同 鐵砲場	二九	二十四孝 勝頼館	三一	昔八丈 城木屋	五一
同 勘平腹切	四九	同 景勝足駄	一七	同 鈴ケ森	一七
同 茶屋場	四七	同 勘助住家	五三	播州皿屋敷 鐵山館の段	三五
同 山科雪	五六	璧仇討 新左衛門屋敷	三八	ひばり山 中將姫雪責	三三
同 天河屋	四〇	同 十種香	三五	同 別れ	三〇
同 夜討	二五	三代記 三浦わかれ	五四	同 瀧の段	五〇
忠臣講釋 喜内住家	三四	日吉丸稚櫻 五郎助住家	三七	腰越狀 泉三郎館	三〇
忠臣講釋 宅兵衛上使	三三	盛衰記 源太勘當	三五	八陣 政清本城	三九
二度目清書 寺岡切腹	三三	同 笹引	三九	合邦辻 合邦内	四五
太功記 本能寺	二九	同 さかろ	五二	近江源氏 盛綱館	四七
同 局注進	三七	彦山 すまの浦	二八	姥堀山 しやべり	二七
				梅の由兵衛 聚樂町	三十
				木下陰 竹中砦	六三
				同 壬生村	四五
				同 土はし	三二
				累物語 埴生村	三四
				双級巴 釜入り	二三

同　尼ヶ崎　三九
朝顔日記　濱松小屋　二九
同　宿屋　四五
菅原　道明寺　二九
同　車曳き　二一
同　佐太村　五〇
同　松王屋敷　三六
同　てらこや　五七
安達ヶ原　袖萩祭文　四二
同　一ッ家　三七
一の谷　小次郎魁　一四
同　須磨組打　三〇
同　陣屋　四九
兜軍記　あこや琴責　三三
先代萩　竹の間　二三
同　瓢箪棚　三三
千兩幟　いな川内　四三
卅三間堂　平太郎内　三一
御所櫻　辨慶上使　三八
同　辨慶遺袖　三一
千本櫻　大物浦　三一
同　茶見世　四二
同　すしや　五六
矢口渡し　八郎物語　四五
同　渡し場　三五
玉藻前　道春館　三五
蝶花形　小阪部館　三八
阿波鳴戸　順禮歌　五三
三日太平記　松下住家　四三
伊賀越　沼津里の口の段　三〇
同　平作切腹　三〇
同　岡崎雪降　五四
阿漕浦　平治住家　五八
姫小松　俊寛島物語　三七
日蓮記　勘作住家　三二
三略巻　鬼一菊畑　四八
同　橋辨慶　一〇
花の上野　志渡守　四五
女舞衣　三勝酒屋　四一
戀飛脚　新口村　三八
紙屋治兵衛　時雨のこたつ　三九
堀川　猿廻し　四九
お染久松　質見世　五五
新版歌祭文　野崎村　五三
あしや　狐わかれ　二七
苅萱　高野山　二三
お妻八郎兵衛　うなぎ谷　四七
布引　綿くり馬　二八
國性爺　獅々城　三六
鶴山　在所の段　三一
二代鏡　秋津島腹切　四九
佐倉曙　子別れ　五三
反魂香　吃又平　二九
和田合戰　市若丸初陣　三三
比翼塚　長兵衛内　三九
娘景清　日向島段　四三
鬼奢待　幸内住家　三七
老婆餅　馬追の段　一二
膝栗毛　赤坂並木　三〇

淨瑠璃通解

第壹編

- 壇浦兜軍記……琴責の段
- 伊賀越道中双六……婚礼の段
- 伊賀越道中双六……沼津の段
- 伊賀越道中双六……沼津の段切
- 伊賀越道中双六……新關所の段
- 伊賀越道中双六……岡崎の段
- 伊賀越道中双六……伏見の段
- 伊賀越乘掛合羽……圓覺寺の段
- 染模様妹背門松……賈屋の段
- 新版歌祭文……野崎村の段

第貳編

- 菅原傳授手鑑……傳授の段
- 菅原傳授手鑑……八聲の鶏の段
- 菅原傳授手鑑……道明寺の段
- 菅原傳授手鑑……車曳の段
- 菅原傳授手鑑……佐太村の段
- 菅原傳授手鑑……飛梅の段
- 菅原傳授手鑑……松王屋敷の段
- 菅原傳授手鑑……寺子屋の段
- 菅原傳授手鑑……賀茂堤の段
- 近頃河原の達引……堀川の段
- 傾城戀飛脚……新口村の段

第參編

- 桂川連理柵……帶屋の段
- 源平布引瀧……綿繰馬の段
- 蝶花形名歌島……松波琴音の段
- 本朝二十四孝……小阪部館の段
- 本朝二十四孝……百度參の段
- 本朝二十四孝……桔梗ケ原の段
- 本朝二十四孝……景勝下駄の段
- 本朝二十四孝……勘助住家の段
- 本朝二十四孝……十種香の段
- 關取千兩……猪名川内の段

第四編

- 近江源氏先陣館……四斗兵衛内の段
- 近江源氏先陣館……盛綱陣屋の段
- 近江源氏先陣館……船長の段
- 義經腰越狀……目貫屋の段
- 義經腰越狀……免狀の段
- 義經腰越狀……政清城の段
- 鎌倉三代記……清本城の段
- 日本賢女鑑……片岡忠義の段
- 三浦別れ……泉三郎の段
- 八陣守護城……姫子松子の日の遊……俊寛島物語の段

第五編

- 木下蔭狹間合戰……竹中砦の段
- 釜淵双級巴……壬生村の段
- 釜煎り……釜の段
- 三日太平記……松下住家の段
- 吉丸稚櫻……五郎助住家の段
- 絵本太功記……本能寺の段
- 絵本太功記……局注進の段
- 絵本太功記……夕顔棚の段
- 絵本太功記……尼ヶ崎の段

第六編

- 增補生寫朝顔話……明石船別の段
- 增補生寫朝顔話……摩耶が嶽の段
- 增補生寫朝顔話……笑藥師小屋の段
- 增補生寫朝顔話……濱松屋の段
- 戀模昔八丈……城木屋の段
- 花雲佐倉曙……鈴ヶ森の段
- 花雲佐倉曙……宗五郎住家の段
- 岸姫松……牢屋の段
- 花雲佐倉曙……倉住家の段
- 朝比奈上使の段

國民新聞評（上略）淨瑠璃の文章上の註解を施こしたるものにして、之れに加ふるに、各淨瑠璃の由來、并に其人物の考證を試みたるなど、我邦の淨瑠璃を新たに紹介するに當つて、既に近松物の出でし外はこの書を以て、最も忠實なる者となすを得べし、我が淨瑠璃愛好者は之れを讀み、之れを語るを知れ共其脩辭を解するもの少なく、而かも益々流行せんとするに當つて、この著あるは、先づ其愛好者の爲め、次いでは德川文學研究者の爲めに多大の便益ありと謂つて可なり。

一冊正價金參拾五錢郵稅六錢
●六冊貳圓●十二冊參圓八拾錢▲外要郵稅